2
Луна Лайкан
Носферату
月とライカと吸血姫
ノスフェラトゥ
牧野圭祐
ill. かれい
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月とライカと吸血姫　2

牧野圭祐
イラスト　かれい

2
Луна, Лайка и Носферату
月とライカと吸血姫
ノスフェラトゥ
牧野圭祐
ill. かれい

リュドミラ・ハルロヴァ
「吸血鬼、イリナ・ルミネスク。毒にも薬にもなる絶品の素材を、どう料理するのか……じっくり考えたらいかが？」
「『ミエチタ計画』が核兵器にも勝る武器であることは、間違いないと思うのだがね」
フョードル・ゲルギエフ

ポップコーンの箱を掘り締めているイリナの瞳はきらきら輝き、
子どものように純粋で、
そんな彼女を見ていると、
レフは忘れていた感情を思い出す。
初めて天体図鑑を見たとき、
どきどきしたことや、
自分で考えたロケットを絵に描いて、
宇宙旅行をしたこと。

「レフ！」
声は演奏の音に掻き消される。
身体が勝手に動く。
会って何を話すかなんて考えない。
柵に近づいたそのとき、
目の前に黒い影が飛び込み、
道を阻まれた。

Contents

〈前奏〉 прелюдия …… 12
〈第一章〉 『ノスフェラトゥ計画』完了 …… 14
〈第二章〉 乙女の祈り …… 44
〈第三章〉 飛行士選抜試験 …… 64
〈第四章〉 月よりも遠く離れて …… 90
〈第五章〉 冷たい春 …… 132
〈間奏〉 интерлюдия …… 178
〈第六章〉 史上初の宇宙飛行士 …… 182
〈第七章〉 祖国の英雄 …… 236
〈第八章〉 新世界へ …… 270
〈終奏〉 постлюдия …… 308

〈第二楽章〉 銀髪の吸血姫 …… 322

Луна, Лайка и Носферату

Cover & Logo design／Junya Arai + Bay Bridge Studio

目次

前奏　прелюдия
第一章　『ノスフェラトゥ計画』完了
第二章　乙女の祈り
第三章　飛行士選抜試験
第四章　月よりも遠く離れて
第五章　冷たい春
間奏　интерлюдия
第六章　史上初の宇宙飛行士
第七章　祖国の英雄
第八章　新世界へ
終奏　постлюдия
あとがき
第二楽章　銀髪の吸血姫

月とライカと吸血姫（ノスフェラトゥ）2

牧野圭祐
ill.かれい

人物紹介 Луна, Лайка и Носферату

■ レフ・レプス …… 21歳。宇宙飛行士候補生。『ノスフェラトゥ計画』に参加。

■ イリナ・ルミネスク …… 17歳。吸血鬼の少女。『ノスフェラトゥ計画』の実験台。

■ ミハイル・ヤシン …… 25歳。空軍中尉。宇宙飛行士候補生のエース。

■ ローザ・プレヴィツカヤ …… 22歳。空軍中尉。女性の宇宙飛行士候補生。

■ スラヴァ・コローヴィン …… ロケット開発主任。

■ モジャイスキー博士 …… 動植物実験担当の生体学者。

■ アーニャ・シモニャン …… イリナのデータ採取係。

■ ヴィクトール中将 …… 宇宙飛行士候補生の指導教官。

■ ナタリア …… 共同宿舎の寮母。

■ サガレヴィッチ副長官 …… 訓練センターの副長官。

■ フョードル・ゲルギエフ第一書記 …… 共和国の最高指導者・政府首班。

■ リュドミラ・ハルロヴァ …… ゲルギエフの側近。文章担当秘書官。

конфиденциальный

「この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは関係ありません」

конфиденциальный
旧リリット国
[閉鎖行政領域体]
ライカ44
首都:サングラード
ツィルニトラ共和国連邦
アルビナール宇宙基地
Союз
Цирнитра
Социалистических
Республик

前奏　прелюдия

黒竜の瞳　Очи　Цирнитра

一二月一二日。

イリナが宇宙を飛んだ、その日。

サングラードにある秘密警察──通称〔運送屋〕本部の会議室では、議長をはじめとする最高幹部たちが、アルビナール宇宙基地にいる部下から報告を受けている。

《──イリナ・ルミネスクが生還したようです》

通信機の向こうの管制室では喝かつ采さいが渦巻いているが、〔運送屋〕の幹部たちは誰ひとりとして笑みを見せない。

額にしわを刻んだ議長が、冷酷無情に告つげる。

「用済みになり次第、廃棄処分せよ」

かつて、無数の粛しゆく清せいが行われていた頃の、人権が抑圧されていた時代の重い空気が、ここには色濃く残っている。

〈祖国に不都合なものは処分する〉

秘密警察のバッジを付けた者は、ただ忠実に、職務を遂行する。対象が人間ではない実験体の吸血鬼ノスフエラトウならば、なおさらだ。

彼らには、人間に対する情もないのだから。

つい先日も、連合王国の諜ちよう報ほう員と発覚した若い男女が捕らえられ、地下室で尋じん問もん、拷ごう問もんを受けた。

彼らの命がどこへ運ばれたのかは、誰も知らない。

第一章　『ノスフェラトゥ計画』完了

藍の瞳　Очи　индиго

霜の精マロースの息吹は落ち着き、雲の切れ間から白々と輝く光こう芒ぼうが零こぼれ落ちる。

ひらひらと粉雪の舞うパルマ平原を、共和国軍の救急車両が砂煙を上げて走っている。

極寒の雪原から救助されたレフとイリナは、軍医の診察を受けながらアルビナール宇宙基地に向かっていた。

簡易寝台に腰かけたレフは、怪け我がをした膝ひざの治療を受ける。出血は止まったが、ずきずきと痛み、腫はれあがっている。

「っ……」

「重度の打撲だと思うが、骨に異常がある可能性もある。精密検査を受けなさい」

軍医に松葉杖を渡されたレフは、力なく頷うなずく。もし骨折していれば、宇宙飛行士不適格になるかもしれない。事実、三〇〇〇人を集めた最初のふるい落としで、古傷のある者は即座に落とされていた。

さらに、不調は膝だけではなかった。

「はっくしょん！　うぅ……」

氷点下の世界で無茶をしたせいで、震えが止まらないほどの悪お寒かんにも襲われていた。

一方、橙だいだい色いろの与圧服を着たまま寝転んでいるイリナは、着地時に頬ほおを軽く打った程度で、ほぼ無傷。体温や血圧などは平常時と変わらず、宇宙を飛んだことによる悪影響は、今のところ出ていない。

そんな彼女は、心ここにあらずという感じで、手のひらに載せた首飾りを見つめている。
宇宙のことを考えているのだろうか。
レフは温かいお茶をすすりながら、雪原で救助隊を待つあいだに交わした会話を思い出す。

パラシュートの幌の中、レフとイリナは寒さを凌しのぐため、身を寄せ合っていた。
「―身体からだがすごく重く感じるの。短い夢を見ていたみたい……」
長い睫まつ毛げが凍りついたイリナの瞳ひとみは、きらきらと、星ほし屑くずを散らしたように輝いている。
「地球は、どう見えた？」
凍えて歯の根を震わせながらレフが問うと、イリナは目を閉じて、大切な宝物を数えるように、静かに語る。
「透明な青いヴェールに包まれてて……すごく綺き麗れいだった。あの星に住んでる……って思うと、不思議で。星々は茴香芹チヤービルの花みたいで。月も綺き麗れいに見えたの……。私、絶対に月に行きたいって、まだ死にたくないって思った……」
身体からだは凍えても、宙そらを想う情熱が心を熱くし、レフはますます宇宙への憧あこがれが強くなった。
茴香芹がどういう花かわからず、イリナに説明を求めたら苦笑された。
「白くて小さくて、可か愛わいらしい花よ。図書館で調べたら？」
彼女の穏やかな表情を見ていると、レフは心が通じ合った気がした。
「レフ……えっとね」
「ん？」

「私、宇宙で月を見て、思ったことがあるの……。それはね……」
　はにかんだように目を伏せ、彼女が何か言おうとしたとき──救助隊のサイレンが聞こえた。
　その途端、イリナはレフから飛びのき、口をつぐんだ。宇宙で何を思ったのか聞けずじまいだったどころか、怪け我がの治療を受けるレフを見て、
「──まったく、人間はひ弱ね」
　二か月前に出会った頃と同じように、氷柱つららみたいに冷たく、つんとしている。
　泣きじゃくっていたイリナなど、寒さと痛みが見せた幻想だったのかもしれない──
　そう思えるほどの変わりようだった。
　しかし、ともかく、彼女が生還したことがレフは嬉しかった。
　だが、その一方で、得体の知れない焦燥感に襲われる。
　本当に、彼女は歴史の闇やみに消されてしまうのではないか、と。

　アルビナール宇宙基地へ帰還したレフとイリナは、着の身着のまま、こぢんまりとした職員用宿舎に案内された。焚たかれた石油ストーブの臭いで空気がむんとしているロビーに入ると、打ち上げに携たずさわった技師や職員、国家委員たち三〇名ほどが出迎えにきている。
　しかし、彼らの表情はストーブの熱気とは真逆で冷えており、帰還を祝う歓声や拍手はない。
　皆が皆、『モノ』扱いすべき実験体の帰還をどうしようかと、互いの顔色を窺うかがい、牽けん制せいしあっているようだ。あまりに静かで、ストーブの作動音のほうが大きく聞こえる。
　片隅にいるアーニャは周りを気にしながら、どこか申し訳なさそう

に、指先だけで音の出ない拍手をする。ヴィクトール中将は松葉杖のレフを睨にらみ、モジャイスキー博士は何か言いたげに髭ひげを触っている。

寂しい歓迎に、レフは憤いきどおりや哀しみを覚える。イリナが宇宙に到達したとき、管制棟では成功を大騒ぎしていたというのに、本人には労ねぎらいの言葉のひとつもないのか。

イリナも、どう振る舞っていいのか困った様子で、与圧服の袖そでをつまんで下を向いている。

レフが拍手を求めようとしたそのとき、ロビーの奥から誇らしげな声が響いた。

「よく戻ってきてくれた！」

頬ほおを紅こう潮ちようさせたコローヴィンがのしのしと出てくる。

「どうした君たち！　イリナ・ルミネスク同志に最大の祝福を！」

コローヴィンは大げさな身振りで、熱い拍手をイリナに送る。

それを合図に、ようやく技師たちは盛大な歓声を上げ、抱き合って喜びをわかち合う。

「万歳！　万歳！」

「イリニャンさん、おかえりなさい！」

アーニャは子犬のようにぴょんぴょん飛び跳ね、モジャイスキー博士やヴィクトール中将も笑みを浮かべる。レフとイリナを歓迎の輪が包み、人いきれするほど賑やかになる。

レフはほっとして、イリナを見る。

主役の彼女は頬ほおを赤らめてうつむき、前髪の先を恥ずかしげに捻ひねっている。

「手を振るとかしなよ」

「べつに、私はキャビンに座ってただけだし……」

これまで受けたことのないであろう人間からの祝福に、戸と惑まどい

を隠せないイリナ。
　興奮を抑えきれないコローヴィンが鼻息荒くイリナの両肩にドンと手を置く。
「宇宙はどうだった!?」
「どうって……。その……」
　少し口ごもったイリナは、いきなりキッと鋭するどい視線でコローヴィンを見据える。
「あなたたちの技術がダメだったせいで、熱くて死にかけたわ。もっとマシなもの用意しなさいよ。ポンコツ作って喜んでる場合なの？」
　連合王国を震え上がらせるほどの天才科学者に向かって暴言を吐くイリナ。コローヴィンはびっくりしたように目を丸くしたが、彼女の強気な態度が嫌いではないようだ。
「わはは！　そういう正直な意見はありがたい！　おい、みんな聞いたか、ポンコツだと！　不眠不休で改良だな！」
　イリナは罵ののしったつもりが相手にされず、ぽかんと拍ひよう子し抜けする。
　コローヴィンはもう一度大きな拍手をする。
「話はあとで聞かせてもらおう！　まずは帰還を祝して、君の大好きな茱グ萸ミの実の浸酒ナストイカで乾杯だ！　あっ、いや、すまない。君は検査完了まで飲めないな！」
　宇宙飛行の交信時、レシピ以外の言葉を許されなかったイリナは、レフの好物である浸酒を言うことでレフにだけ想いを伝えたのだが、その私信がレフ以外の人たちには誤解され、イリナの好物になってしまった。
「そ、そんな、好きじゃないし……」
　浸酒を買ってこようと職員が騒ぐ中、イリナはうつむき、首まで真っ赤になる。彼女の照れた表情の意味を知るのは、レフだけだった。

祝福に沸く傍かたわらで、国家委員と〔運送屋〕は仏頂面で耳打ちし、宿舎を出て行った。笑ったら投獄される罰則でもあるのかと、レフは内心毒突き、松葉杖を強く握にぎり締める。キャビンに自爆装置を仕掛けたことからしても、彼らがイリナの命を軽く見ているのは間違いなかった。

その夜、コローヴィンの一声で急きょ開催が決まった祝賀会が、宿舎の食堂に関係者三〇名程度を集めて、ひっそり挙行された。蓄音機からは共和国の国歌が控ひかえめな音量で流され、長机には、酸味の利いた匂いを漂わせるブリュシチ、蝶鮫卵キヤビアの缶詰、果実の浸酒ナストイカ、そしてチーズバーガーが並んでいる。飾り物は国旗しかなく、一般市民の誕生会より地味である。

史上初の偉業のわりに小規模なのは、『ノスフェラトゥ計画』が国家機密だからだ。基地の職員でさえも、吸血鬼の打ち上げを知らされていない者は多かった。

「―乾杯！　連合王国など食ってしまえ！」

ヴィクトール中将の音頭に合わせて、皆がチーズバーガーにかぶりつく。祝賀会というよりも決起集会のようだ。

主役のイリナは蚊か帳やの外で、居い心ごこ地ち悪そうにブリュシチをすする。

「くだらない……」

ぼやいて、スプーンを口に入れたまま頬ほおを膨ふくらませるイリナ。

その隣で、レフは額から滝のような汗を流し、ぐったりしていた。

「どうしたのよ……」

先ほどまでつんけんしていたイリナも、レフの様子に心配げな表情を浮かべる。

「ちょっと、つらい……」
　鎮痛剤が切れ、膝も頭も痛む。そんなレフの容態に気づいたコローヴィンが激昂する。
「飛行士たる者、身体からだが資本だ！　自分の健康を把握できない者など失格だぞ！」
「すみません……」
　こっぴどく叱しかられたレフは、祝賀会を途中退席して、基地の外れにある病院へ行くことになってしまった。
　会場を出るときに、レフはヴィクトール中将に次の予定を告つげられる。
「イリナ・ルミネスクはチーフとサングラードに向かい、非公開の臨時委員会で航行日誌に関する報告をしてから、『ライカ44』へ戻る。お前は我々と先にライカへ帰還する」
　委員会でどういう話し合いがなされるのか、レフは気になった。報告だけでなく、実験体であるイリナの今後についても議論されるのではないかと。レフの胸の奥底では、以前ローザに言われた『廃棄処分』という残酷な言葉がとぐろを巻いていた。そこでレフはヴィクトール中将に「担当官である私も、委員会に同席したほうが……」と求めたが──
「何か言ったか？」
　ヴィクトール中将は、殺人熊のような目つきで、拳こぶしをぼきぼき鳴らす。
「──何も言っておりません」
　レフはこれまで散々命令に背そむいてきたことを反省し、おとなしく引き下がった。
『非公開の臨時中央委員会』という物騒な響きに、不安の種を植え付けられたが。

翌日『ライカ44』に帰還したレフは、街をぐるりと見て回る。この街も、アルビナールと同様、イリナの宇宙飛行を祝う様子はなく、以前と変わらぬ日常が続いている。

イリナを助けるためにレフが壊した遠心加速器は自然に故障したことになっており、事件を起こしたフランツ技師は異動し、後任の技師が何事もなかったかのように補充された。フランツ技師に細工を命じた人物は、コローヴィンの政敵であるグラウディンではないかと推測されたが、この件は突如「不問」とされ、フランツ技師の単独犯行となった。裏で大きな力が働いているのだろうが、サガレヴィッチ副長官は何も語らず、レフたち候補生の知るところではない。

そして、じつは秘密警察〔運送屋〕の一員だったナタリアだが、寮母の姿に戻り、食堂でひそかに監視を続けている。レフが帰還後、初めて配膳カウンターに顔を見せたとき、ナタリアは小声で囁ささやいた。

「あのことは忘れたよね？」

口調は柔らかいが、眼鏡めがねの奥で冷たく光った目は寮母のそれではなく、熱々のスープが凍りつくようだった。

また、レフの膝ひざは「骨には異常なし」と診断された。深い安あん堵どを覚えたレフだが、全治二週間の打撲で、酷ひどい怪け我がに変わりはない。患部はいまだに腫はれており、ペンチでひねられるような痛みが走る。

食堂を出たレフは、松葉杖をつきながら独房に戻る途中、星々が煌きらめく夜空を見上げた。

「本当に、飛んだんだよな……」

宇宙飛行の偉業は、計画に関わっていない人には全然伝わっていないようだった。宇宙開発の中枢であるライカとアルビナールですらこれなのだから、当然一般市民は何も知らない。

科学者も技師も、集団農場で働く労働者も、連合王国の国民も、それ

以外の世界各国の人々も、以前と同じように太陽の下で働き、月の下で眠りにつき、昨日から今日、そして明日と、変わらない毎日を送っている。
　イリナが宇宙を飛んだ証拠など、悲しいほどに何もなかった。

　打ち上げから三日が経った、一二月一五日。
　イリナが街に帰還したため、レフは訓練センターの所長室に呼ばれた。松葉杖が不要な程度には回復したが、痛みは残り、足を引きずっている。
「失礼します！」
　煙草たばこの煙がもうもうと漂う室内にレフが入ると、肘ひじ掛かけ椅い子すに深く腰かけているコローヴィンと、ヴィクトール中将、そして軍服姿のイリナがいた。たった三日会わなかっただけなのに、随分久しぶりに感じる。中央委員会でどのようなやり取りが交わされたのかレフは聞いていないが、つんと澄ました彼女の表情を見て、少し安心する。
　コローヴィンは、煙草を美う味そうに吸い、満足そうに頷うなずく。
「『ノスフェラトゥ計画』は成功に終わり、課題も見えた。改めて感謝する」
　無事帰還したものの、アンテナの破損など想定外の不具合が合計で一一個も記録されており、本番までに改良する予定となった。
「また、実験飛行は終わったが、中央委員会の決定により当面のあいだ、イリナ・ルミネスクの生体検査を継続する」
　今のところ、イリナの体調は平常値だったが、重力や宇宙線の影響が時間差で生じる可能性もあるため、Ｘ線撮影や体重の記録が行われるという。

　レフがイリナを横目に見ると、とくに表情を変えることなく、じっとしている。
「そして、レフの今後だが──」
「はい……！」
　姿勢を正すレフ。二か月前、今回の任務を言い渡されたとき──コローヴィンに「期待している」と言われたとき、候補生への復帰が叶うのではないかと、淡い期待を抱いた。
　その答えが、まもなく出る。
　いかめしい顔をしたヴィクトール中将が、ゆっくりと書状を開き、レフを見据える。
　嫌な沈黙が部屋に満ちる。
　レフはごくりと生なま唾つばを呑のむ。
　そして、ヴィクトール中将が、重い声を発する。
「同志レフ・レプス。今回の任務での功績を認め……正式な候補生に再昇格とする」
「やった！」
　喜びを抑えきれずにレフが拳こぶしを握にぎり締めると──
「規則は守れよ。でないと、また降格だぞ」
　ヴィクトール中将が脅すように釘を刺した。
「は、はい……！」
　冷や汗をかくレフの隣で、イリナが呆あきれたように苦笑する。
　コローヴィンは煙草の灰を落とすと立ち上がり、レフと向き合う。
「候補生になったからといって、すぐ飛べるわけではないぞ。来年の一月一七日と一八日に、最終候補の選抜を兼かねた、候補生卒業試験を行う。無事に卒業すれば、宇宙飛行士の『資格』を得る。そして『ミェチタ計画』が滞とどこおりなく進めば、春には本番がある予定だ」
「春……」

近い未来に、レフの胸がどくんと鳴った。
「また、候補生復帰にともない、レフの住居を共同宿舎に戻す」
独房を出る……つまり、イリナと離れる。それを想像し、レフは少し淋しくなる。
だが、まさか独房に住み続けたいとは言えず、遠回しに尋たずねる。
「彼女の担当は、どうするのですか？」
「検査担当のアーニャに一任する。また、近々、イリナはサングラードの軍科学病院へ移送される予定だ」
コローヴィンに目を向けられたイリナは、既知の事実を告つげられたように「はい」と返事をすると、一瞬、レフをちらりと見た。
ぶつかった視線が、レフの胸を刺す。
自由に行き来できない遠い場所に、イリナが行ってしまう。
気が焦り、レフは発言の許可も得ず、しつこく訊きいてしまう。
「移送は、いつですか？」
コローヴィンは煙草たばこをゆっくりと吐いてから答える。
「まだ決まっていない。諸々の手続きが終わり次第だ。ひと月もすれば見えるだろう」
イリナは反論のひとつもしない。中央委員会でひとしきり意見をぶつけあったのだろうかとレフは思うが、心配ごとは尽きない。
「彼女は、病院での検査のあと、開発現場に戻るのでしょうか？」
質問を重ねると、コローヴィンは訝いぶかし気な目つきで、煙草の先をレフにずいっと向けた。
「候補生への復帰よりも、彼女が気になるのか？」
図星を衝つかれたレフは、胸の前で手を振って否定する。
「ま、まさか。そんなことはありません」
自分で思っていた以上に、イリナの処遇が気になっていたことに気づく。一方、心配されている当の本人は、興味なさそうに窓の外を眺めて

いる。
「いいか、翼竜ジラントよ」
　コローヴィンは煙草を灰皿で揉もみ消すと、レフと改めて向き合い、意志を確かめるような強い眼まな差ざしを向ける。
「卒業して史上初の宇宙飛行士となれば、重大な責任が生涯つきまとう。君の言葉は、君だけのものではなくなる。祖国のために人生をなげうち、大切な人を犠牲にするという選択を迫られることもあるだろう。君に、その覚悟はあるか？」
　共和国は、「全市民の平等」を謳うたう国家体制上、一市民が「特別な存在」になることは厳禁だった。だが、宇宙飛行が公表されれば、四五年前に建国されて以来の「英雄」が生まれる。
　共和国民二億人を代表して宇宙という戦場に立ち、祖国のために命を捧ささげる。
　その覚悟を問われたレフは、コローヴィンを見つめて、はっきりと答える。
「もちろんです。私の夢ミエチタは、祖国の夢ミエチタです」
「よろしい」
　コローヴィンは目を細め、続ける。
「だが、まずはその足を治さねば、試験どころではないぞ」
「はい……」
　幸い、試験日までは約一か月ある。しばらく運動できないので体力が落ちそうだが、できる準備を精一杯やろうとレフは決意する。
「今回はご苦労だった、翼竜ジラントよ。また会える日を楽しみにしている」
　コローヴィンの差し出した手を、レフはしっかりと握にぎる。節くれだって皮膚の厚い大きな手は、故郷の農村にいる父を思い起こさせた。
　そしてコローヴィンは、イリナにも握手を求める。

「君には本当に感謝している」
　イリナは差し出された手をじっと見つめると、握り返さずに肩をすくめ、悪戯いたずらそうに微ほほ笑えむ。
「どうして、無名のおじさんに感謝されるのかしら？」
　存在自体が国家機密であることを暗に指摘された『設計技師長コローヴイン』は、一本取られたと言わんばかりに自分の頭を叩たたいた。

　所長室を出たレフとイリナは廊下を歩いて玄関口へ向かう。これから独房へ行き、アーニャに担当の引き継ぎをするのだ。
「補欠から昇格できたのは、イリナのお陰だ。ありがとう」
　レフがニコッと笑うと、イリナは鼻をふんと鳴らす。
「あなたのために飛んだわけじゃないし。それより、その足……」
　イリナはレフの膝ひざを見た。
「もしあなたが卒業試験に落ちたとき、私のせいにされたら、たまったもんじゃないんだけど。……どうなの？」
　言葉はきついが、揺れる瞳ひとみは心配を隠しきれていない。
「すぐ治るさ。余裕だよ」
　気に病んでほしくないので、レフは強がって親指を立てるが、足を引きずっていては説得力がない。
「余裕？」
　イリナはひょいっと屈かがんで、レフの膝を指で勢いよく突いた。
「痛！」
　レフは飛び退いた拍ひよう子しに天球儀の飾ってあった陳列棚にぶつかり、その衝撃で、天球儀がぐらりと揺れる。
「あっ！」
　落ちないように慌あわてて手を伸ばすレフだが、膝に体重がかかり、激痛が走る。
「痛ってぇ！」
　天球儀は重力に逆らえず、棚から落ちる。
　まずい。復帰早々に備品を壊したら──
　降格。
　目の前がぐにゃりと歪ゆがむレフの前で、イリナが素早く天球儀を受け止め、失笑する。
「どこが余裕なのよ」

「君のせいだろ！」
　痛む膝をさすりながら、こんなふざけたやり取りができるようになったのはいつからだったかなと、レフは出会った頃を思い返す。
　二か月前、吸血鬼の監視役を命じられ、独房へ向かって廊下を歩いたときは、一歩進むごとに寿命が縮ちぢむ気分だった。
　今は、その逆だ。
　仲良くなった彼女と別れるために、独房へ行く。
　任務は完了。
　イリナの今後については、管轄外だ。気にすることはない。
「……」
　とはいえ、中央委員会で交わされた議論がレフは知りたかった。尋たずねれば恐ろしい答えが返ってくるかもしれない。しかし、今を逃すと二度と訊きけなくなる。
　訊くべきか迷っていると、玄関口の方から話し声が聞こえてきて、イリナの視線が刺とげ々とげしくなった。
　やって来たのは、ミハイルやローザたち、候補生の一団。ミハイルは地味な訓練着姿でも映画俳優のように様さまになっており、男性の候補生に比べて小柄なローザも、従者を率いているような堂々たる貫かん禄ろくがある。
　談笑していた彼らは、レフとイリナを見ると、すっと笑みを消した。
「実験体だ……」
　彼らは、イリナが宇宙飛行に成功したことを知っている。
　ひと悶もん着ちやくあるだろうなと、レフは暗あん澹たんたる思いで足を止めたが、イリナは堂々と胸を張り、肩で風を切って歩いていく。
「おいっ……」
　足を引きずりながらイリナに追いついたレフは、総勢一五人の候補生と対たい峙じする。

　勿もち論ろん、祝福の言葉はない。
　決闘でも始まりそうな張り詰めた空気を破るように、ミハイルが微ほほ笑えみを浮かべて一歩進み、イリナを無視してレフの肩をポンと叩たたく。
「聞いたぞ。復帰だって？」
「ああ。もう補欠とは言わせないぜ」
　ミハイルはレフの膝ひざを憐あわれむように見る。
「補欠の次は、留年か落第だったりしてな」
「ははっ、そうならないように頑張るよ」
　レフは適当に話を切り上げ、去ろうとしたのだが。
「怪け我がは『呪われし種』の呪いじゃないの？」
　ローザがイリナに意地悪な視線を投げた。
「あのさぁ──」
　レフが諫いさめようとしたところ、イリナは勝ち誇ったように髪を払う。
「呪われていようと、私が先に宇宙へ行ったことは事実。負けおしみかしら？」
　禁句を、直球でぶつけてしまった。
　レフは勘弁してくれと額に手を当てる。
　当然、バチバチと火花が散り、ローザが噛かみつく。
「犬以下の実験体が出しゃばらないで」
「雪虫以下の人間はしゃべらないで」
「誰が雪虫って？」
「群れているだけの虫はしゃべらないで」
「はぁ？」
　候補生たちがイリナに責めるような視線を向ける中で、ミハイルだけは冷めた目で観察している。そんな中、イリナは雪虫を追い払うよう

に、候補生たちにしっしと手を振る。
「どいてくれる？　通れないんだけど」
　当然、彼らが道を譲るわけもなく、逆にイリナは詰め寄られる。
「ちょっと待て！」
　レフは慌あわててイリナの前に身体からだを入れ、候補生たちに告つげる。
「もう打ち上げは終わったんだ。こういうのはやめよう」
　そして振り返り、イリナにも言う。
「君も君で、つっかかるなよ」
「先に言ってきたのあっちじゃない」
　双方とも頭を下げず、レフは板挟ばさみになる。
　すると、ミハイルが候補生たちをなだめるように話す。
「レフの言うとおりだ。実験飛行のお陰で、ロケットの欠陥が改善されて、無重力の研究も進む。実験犬マールイに敬意を払っているのと同様、実験体イリナにも感謝をしよう」
　イリナと犬は同等だとミハイルは強調し、言葉を続ける。
「いくら俺でも、飛行中に機器が爆発したらどうしようもない」
　冗談ひとつとっても、過剰な自信に満ちている。そんなミハイルを、ローザは腕組みして面白くなさそうに見る。『史上初』を争う相手として、強いライバル意識があるのだ。あまり険悪になってほしくないとレフは願うが、なだめると余計にいざこざが起きそうだった。
　ミハイルは腕時計を見ると、候補生たちに先へ進むように促す。
「行こう。訓練に遅れるぞ」
　皆、イリナを冷ややかに一いち瞥べつし、ミハイルについて行く。
　去ってゆく彼らの背中に、イリナは舌をべーっと突き出す。
「呪ってやる」
　不仲っぷりに、レフは天を仰ぐ。明日からは自分が向こうの集団に入

るのだと考えるとあまりいい気持ちはせず、イリナとの関係を考えると内心ひやひやだった。

　訓練センターを出ると、夕陽は地の果てに落ち、寒々しい夜が街を包んでいた。
　レフとイリナは、街がい燈とうの灯った並木道をゆっくり歩く。
　別れる前に何をしゃべろうかと考えたとき、やはり、レフはさっき訊きけなかった委員会の内容が気になった。アーニャに担当を代わるとはいえ、気持ちまで切り離すのは無理だ。しかし、仮に国家上層部が『実験体の廃棄処分』を検討していたとしても、イリナ本人には教えないだろう。だが、もし、それを暗示するようなことをイリナが告げられているのなら、レフは担当を離れてもできる支援策を何でもいいから探そうと決意した。イリナの味方は、自分以外に全然いないのだから。
　レフは周りに人がいないことを確認し、探るように切り出す。
「中央委員会では、飛行報告以外に、何を話したんだ？」
　イリナの瞳ひとみがぱちりと瞬またたいた。
「……何って？」
「その、君の、検査が終わってからについてとか……」
　思い切って質問を投げる。
　するとイリナは、呆あきれたように両肩をあげた。
「さっきチーフに注意されたこと、もう忘れたの？　候補生への復帰より、私のことが気になるのかって」
　──候補生への復帰よりも、彼女が気になるのか？
　ウッと詰まるレフ。
「本当に英雄になる覚悟があるの？　翼竜ジラントよ？」
　冗談めいた口調でイリナに突っ込まれる。
「いや、つい、君のことが気になっちゃってさ……。君がこの街に帰っ

てくるまでのあいだも、ずっと考えてた。今後は、離れてしまうし……」
　レフは正直な気持ちを明かした。
　するとイリナは、少し間を空けて、囁ささやくような声を出す。
「……ずっと前、ローザの言ってた、廃棄処分のこと？」
　残酷な言葉にレフは戸と惑まどいつつも、無言で頷うなずく。
　イリナはひとつ息を吐き、視線を少し上げて遠くを見て、言うか迷ったような素振りをしてから、口を開いた。
「これ、委員会の偉そうな人間から『口外厳禁』って忠告されてるんだけど……」
「うん……」
　レフは、病気の宣告を受けるような心持ちで、イリナの言葉を待つ。
「私、検査が終わったら……宇宙を飛んだ経験を活かして、設計局に勤つとめることになったわ」
「……は？」
　にわかに信じられず、レフは目を見開く。
「本当か？」
「ええ。国家機密を知ってしまった以上、行動は制限されるようだけど。技師として、生活は保障されてる」
　イリナは真顔で、冗談とは思えない。
「設計局って、チーフ管轄の？」
　レフの質問に、イリナは困ったように眉まゆを下げ、人差し指を口に当てて声を潜める。
「……口外厳禁の秘密を話したってバレると、私もあなたも罰せられるんじゃないの？」
「あ、ああ。そうだな知らないほうがいいかもしれない」
　もし訊きいてしまったら、何かの拍子に顔に出てしまいそうだとレフ

は案じた。
「ふたりだけの秘密よ」
　硬い顔つきのイリナに約束を求められ、レフは強く頷うなずく。
　技師とは意外だが、たしかにイリナはそこらの人間よりも勤勉で優秀だし、宇宙への情熱もある。そこを評価したコローヴィンが取り計らったのだろうとレフは思った。
「君なら、良い技師になれそうだ。教官を務めた俺が太鼓判を押す」
　レフが微ほほ笑えみかけると、イリナはムッとして腕を組んだ。
「なにヘラヘラしてるのよ。あなた、教官とか言って偉そうだけど、自分はどうなの？」
「俺のなにが？」
「飛行士の試験に決まってるでしょ！　もしあのイヤな奴らに負けて落選したら、手や足や全身に噛かみついて、血を全部抜いて、干からびた木ミ乃イ伊ラにしてやるから」
　小さな炎が揺らめくような紅い瞳ひとみで、イリナはレフをじっと見つめる。
「私の教官を名乗るくらいなんだから、勿もち論ろん、一番最初に飛ぶわよね？」
「えっと……」
　問われたレフは、即答できない。宇宙を想う気持ちならば候補生の中で一番だという自負はあったが、正直、補欠上がりの自分が一番手になるのは、かなり困難だと感じていた。
「……選ばれるように、頑張るよ」
　自信なげにレフが答えると、イリナはがっくりと溜ため息いきを吐つく。
「はぁ……。嘘うそでもいいから『一番に飛ぶ』って誓いなさいよ」
　レフは頭を掻いて苦笑しながら、「飛ぶよ」と誓った。

　独房の前にある看守所では、毛皮のコートにくるまったアーニャが凍えていた。
「イリニャンさん、これからよろしくお願いしますね」
　アーニャは寒さに震えながら、看守所の壁にもたれかかるイリナに敬礼する。
　レフは引き継ぎに際し、アーニャに任務の詳細を訊いたが、彼女はモジャイスキー博士から「有人飛行成功まで、実験体の検査担当をしてもらう」と告つげられただけで、国家の事情は知らされていないようだった。
「わたくしは、課された任務を一生懸命やるだけですよ」
　レフは、イリナに聞こえないような小声でアーニャに話しかける。
「俺がイリナの傍そばにいられないあいだ、支えてやってくれ」
「御意。言われずとも、です」
　アーニャはにこにこしている。
　ふたりが仲良くしてくれればいいなとレフは期待を寄せる一方で、今まで感じたことのない漠然とした淋しさが胸に広がる。娘を嫁に出す父親とはこういう気持ちなのだろうかと、よくわからないことを思ってしまった。
　イリナの独房には、医療用の機器がいくつか置かれている。「睡眠中の生体データを計測する装置です」とアーニャは言った。
　今朝まで使っていたレフの独房を覗のぞくと、寝具などがすべて撤去され、空っぽだった。
「まったく、仕事が速いな……」
　ここに、レフの居場所はもうない。入館証を返却すれば、独房には近づけなくなる。

任務は終わった。
イリナに別れを告げなければいけない。
けれど、別れの言葉は、言いたくなかった。
三年後の話になるが、二〇歳の誕生日の約束もある。
だから。
レフは姿勢を正し、イリナに最敬礼する。
「ありがとう」
イリナは何か言いたげにレフを見つめていたが、
「……ご苦労様。帰っていいわよ」
最後まで偉そうに振る舞うと、自分の独房に向かい、棺かん桶おけに入っていった。

共同宿舎の食堂では、レフの候補生復帰を祝い、ささやかな歓迎会が開かれた。
ミハイルもローザも他の候補生も、イリナについてまったく話題にしない。
もともと「実験体について深く知ることはない」とヴィクトール中将に命じられていたが、まるで『イリナ』という言葉が禁句に指定されたかのようだ。しかし、レフにとっても、あれこれ詮せん索さくされないほうが気が楽だったので、自分から彼女の話を振ることはなかった。

午後一〇時、就寝時間となり消灯された。
四人部屋の寝台に転がっているレフだが、ひとりだけ寝付けない。暗くて寒かった独房に比べれば天国なのに、昼夜逆転の生活が長かったせいで、目が冴さえてしまう。
暗くら闇やみのなかで、ついイリナのことを考える。

今はまだ起きている時間だよな、とか。
アーニャと上う手まくやれるだろうか、とか。
「……いけない。早く寝ないと……」
明日から候補生の訓練が再開する。膝ひざが治るまでは体力訓練は無理だが、できることは一二〇%の力でやる。イリナの期待に応えるためにも、史上初を勝ち取りたい思いだった。飛行士になれず、血を吸われて木ミ乃イ伊ラになるのは御免だ。
「けど、『吸血鬼』なんて……誤解を与える名前だよ」
二か月ずっと一緒にいたが、特別なときしか血を吸わない。
「……」
イリナに噛かまれた左腕を撫なでると、生々しい感触が蘇よみがえる。
甘美な痛みに頭がのぼせ、身体からだの芯が疼うずく。
もう一度吸われたい。
そんな欲求に襲われる。
「はぁ……」
イリナの眷けん属ぞくになっているはずなどないのに、どうしてしまったんだろう。
「ははっ、疲れてんだな……」
自じ嘲ちようを含んだ溜ため息いきを漏もらし、温かく柔らかい布ふ団とんを頭から被かぶった。

第二章　乙女の祈り

緋の瞳　Очи　алый

一二月三一日、新年が近づき、施設内はいっそう静まり返っている。イリナがレフと別れてから、二週間ばかりが経過した。訓練はなくなり、検査だけの日々が続いている。

壁に囲まれた『ライカ44』から逃走することは不可能なので、常時監視されることはなかったが、アーニャから「鎮静剤の入った注射器を持たされてます」と訊きいたときには、イリナは軽く眩め暈まいがした。逃走以外にも、宇宙線の影響による精神障害を危き惧ぐされているようだった。

イリナは起床時と就寝前に全身写真を撮られ、検査結果とともに「N44」としてファイリングされる。動物の実験体みたいで、あまり好きではなかった。今のところ身体からだも精神も正常で、神経質だった医師や科学者も、イリナに対する態度が多少は和らいでいた。

食事は以前と同じで、栄養素が計算された料理が与えられるだけ。

検査以外にやることは、健康維持のために軽い運動をする程度。

暇ひまつぶしのために、週刊生活誌や国民紙『真実イースチナ』、教育的な書籍、ラジオ、ジグソーパズルなどが支給されたが、宇宙飛行という刺激的な体験をしたイリナにとって、研究所と寝床を往復するだけの生活は退屈だった。パラシュートで高いところから見る景色が恋しいとすら思えた。

アーニャは優しく接してくれるが、レフのいない生活は、色を失った世界を彷徨さまよっているような気分だった。

「今年も、終わりね……」

底冷えする独房内、軍服の上着一枚で棺かん桶おけに腰かけているイ

リナは、この一年を振り返る。
　故郷の村に『狩り』に現れた黒ずくめの男たち。
　軍科学病院での実験体としての選考検査。
　そして、何よりも鮮明に思い出されたのは、この街にやってきてからの二か月。
　レフと出会い、訓練でいろいろな経験をして、毛嫌いしていた人間の文化に触れて、生まれて初めて、血の絆きずなを結んだ。
　彼には伝えられなかったが、血を吸っているとき、身体が幸せで満たされるような心ここ地ちになった。味や匂いはよく覚えていないが、血が食道から胃に落ちると下腹部が熱くなり、身体中に血が巡って力が漲みなぎると同時に、ぞわぞわと鳥肌が立った。
　もう一度、いや、何度でも、彼の血を吸いたいとイリナは思った。
　けれど、血を吸いたいと頼むなんていうことは恥ずかしいと感じていたし、頼んでも絶対に嫌がられるだろうから、想いは心の奥底にしまい込むしかなかった。
　そして、何よりも大きかったのは、宇宙に行くという夢を叶えたこと。
　目を閉じれば瞼まぶたに荘厳な光景が浮かび、今でも身体からだが、魂が、震える。宇宙から地球を見たとき、両親が人間に殺されて以来抱いていた憎悪──人間の支配している惑星ほしなど壊れてしまえという心の闇やみが洗われたが、いざ地球に帰還してみると、厳しい現実が待ち構えていた。
「ふぅ……」
　帰還後に召しよう喚かんされた中央委員会を思い出し、イリナの胸がざわめく。

　──閉ざされた会議場で、イリナはコローヴィンとともに、政府幹部の

前に立った。
　航行日誌を読み上げ、宇宙での体験を報告した。
　皆、静かに興奮している様子で、頬ほおや顎あごに手を当てて唸うなっていたが、喝かつ采さいはなかった。
　会議場がもっとも騒がしくなったのは、航行日誌に書かれた『宇宙に神の実像はない』という記述に触れたとき。
「あなたたちの信じる神の姿はどこにもなかったわ」
　イリナの発言に一部の人間が「『呪われし種』に見えるわけがない！」と声を荒らげ、それを咎とがめる咳払いがそこかしこで聞こえた。世界中で多くの人間が「宇宙には巨大な神が浮遊していて、地球を見つめている」と考えており、神の不在が公表されれば大騒動になってもおかしくない。そのため、神については口に出さぬよう、イリナは釘を刺された。
　このイリナの帰還報告を受けて、「経過観察で異常が出なければ、来春、有人ロケット打ち上げを行う」という方針が固まった。
　また、実験体となった報酬として、「打ち上げ成功後、研究協力費を支払い、保養地に別荘ダーチヤを与える」と決議されたが、老ろう獪かいな人間の言うことなど、イリナは信じない。どうせおとなしく検査を受けさせるための方便だろうと感じたが、口には出さない。
　そして、会議終了後、イリナはコローヴィンに申し訳なさそうに声をかけられた。
「私は君を評価している。この先も、我々の計画に参加してもらいたいが……」
　いくら待っても、その先の言葉は出てこなかった。いつもは自信に満ちているコローヴィンも、困ったように首の後ろを掻かくだけだった。
　言えないのか、何も決まっていないのか。イリナにはわからなかったが、強気を貫く。

「私もあなたの功績を評価しているわ。次があるなら、計画に参加してあげてもいいわよ」
　言葉尻が震えたが、命乞いなどは絶対にしたくないとイリナは思った。
　つまり。
　レフに伝えた「設計局に採用される予定」など、全然なかった。

「はぁ……。レフに、嘘うそ吐ついちゃった……」
　あまりにもレフが自分の処遇を気にしている様子だったので、つい、適当なことを言った。心配してくれるのは嬉しかったが、飛行士試験の邪魔になりたくない。
　彼のお陰かげで、宇宙を飛ぶという夢を叶えることができたのだから。
　だから今度は、彼に夢を叶えてほしい。
　小さな嘘うそを吐つくことが、自分にできる精一杯だった。
　イリナは彼が宇宙飛行士に選ばれることを願っているのだが、彼の胸で号泣したことが恥ずかしくて、つっけんどんな態度を取り続けてしまった。そして、自分を救助に来たせいで膝ひざを怪け我がさせてしまったことを素直に謝りたかったのに、突ついたりしてしまった。
「……後悔ばっかり……」
　イリナは髪の毛をもしゃもしゃ掻かくと、棺かん桶おけの上に寝転ぶ。
　隣にレフがいてくれたらと、何度も思った。彼に弱みを見せるつもりはなかったが、傍そばにいてくれるだけで心が安らいだ。
　だが、隣の独房は、空っぽだった。
　もしレフが飛行士になったとして、いったい、自分はどこで何をしているのだろうか。

来年の今頃、ちゃんと生きているのだろうか。

降りしきる雪のように不安は積もり、埋もれて息が苦しくなる。

イリナは首飾りを外し、電燈の薄明かりに宝石をかざす。その透きとおった青い輝きに、レフの綺き麗れいな瞳ひとみを重ねる。

「レフ……」

彼の怪我が気になってアーニャに探りを入れたところ、「まだ全力で走れないみたいです」と言っていた。もし、怪我が原因で落選したら、なんて想像すると、胸がきりきりと痛んだ。

「はぁ……」

髪の先を指にぐるぐると巻き付けては解き、長い溜め息いきを吐くのを繰り返していると──

ドンドン。扉がノックされた。

「アーニャです。入りますね」

落ち込んでいたことを悟られないように、イリナは国民紙『真実イースチナ』を手に取り、興味もないのに読んでいたふりをする。

入ってきたアーニャは、自分の身体からだほどある巨大な麻袋を引きずっている。

「よいしょ……っと。これなんでしょー？　うふふ～」

麻袋を指し、楽しそうに微ほほ笑えむアーニャ。身の危険を感じたイリナは『真実』を放り出して、慌あわてて棺桶の陰に隠れる。

「な、なにそれ。変な検査だったらお断りよ……」

「違いますよ！　新年のお祝い道具一式です」

アーニャは麻袋に手を突っ込むと、色鮮やかな衣装を取り出した。

「リリット国の民族衣装を調達しました」

「あっ……」

イリナは城の衣装部屋に仕舞ってあったものを思い出した。朧おぼろげだが、父と母が着ていたような記憶がある。

　棺かん桶おけの蓋ふたに、アーニャは衣装を広げていく。
「戦前のものらしいので、糸がほつれたりしてますけど」
　緻ち密みつな刺し繍しゆうやビーズで華やかに彩いろどられたブラウス、花柄の羊毛皮のベスト、蝶ちようを刺繍した襟飾り、縦たて縞じま模様の巻きスカート。
　暗い独房のなかに色とりどりの花が咲き、一足早く春の野原が生まれたようだ。
　アーニャはブラウスを手に取って、肩にあててみせる。
「可か愛わいいですね♪」
　そう言うと、アーニャはいそいそとブラウスを羽織る。
「なんで、こんな……？　命令されたの？」
「いいえ。一緒に新年をお祝いしたかっただけですよ」
　ぽかんとするイリナに、アーニャはもう一着のブラウスを「どうぞ」と差し出す。
「どうぞ」
「……せっかく持ってきてくれたんだし、しょうがないから、着てあげるわ」
　嫌々受け取ったふりをしたが、可愛い服を着てみたいとイリナは思った。強がっているが、彼女も年相応の一〇代の女の子だ。

赤い花が刺し繍しゆうされたブラウスの袖そでに手をとおし、革のベルトを締めると、心が弾む。鏡を見ると、顔が自然とほころぶ。
「似合いますね。可か愛わいいです！」
「そ、そうかな……」
褒ほめられたイリナは照れて、もじもじと蝶ちようの刺繍を指で突つく。
「ご飯もありますよ～」
アーニャは麻袋から食卓マットを引っ張り出し、床に敷くと、食べ物の入ったプラスチックの容器を次々と並べていく。
「じゃがいもと鶏肉をマヨネーズで和えたサラダに、『毛皮を着たニシン』。あと、リリットの伝統料理もあります。挽き肉を酢漬けのキャベツで包んだサルマーレ。イリニャンさんに美お味いしく思ってもらえるように、全部香草で香り付けしてます。頑張って作りました」
イリナはアーニャの温かい心遣いが胸にしみる。
吸血鬼は香草のような強い匂いが苦手だと一般的に言われているが、それも教会による流言だった。味覚がないから、むしろ香りで味わうのだ。
ところで、食事まで用意してくれて嬉しかったが、イリナは単純な疑問が浮かんだ。
アーニャは、新年を家族と祝わないのだろうか。研究所の職員の多くは家族と過ごすため、今夜の検査は早く終わっていた。
「ねえ、アーニャ──」
そのことについて彼女に尋たずねると、思わぬ答えが返ってきた。
「家族はいませんよ。子どもの頃から、ずっと独りです」
まるで献立の続きを話すような軽い調子で、アーニャはさらりと言った。
「えっ？」

「戦災孤児なんです。じつはわたくしも、リリット国出身なんですよ」
「そうなの……!?」
　目を丸くするイリナに、アーニャは過去を話す。
　吸血鬼の村アニヴアルからは遠く離れた工業都市で、アーニャは生まれた。
　だが、彼女が一歳のときに街は爆撃を受け、壊滅してしまった。彼女は、瓦が礫れきの下で母親に抱きかかえられ、泣いていたのだという。
「当時の記憶はまったくないんです。両親の顔も知りません。アーニャ・シモニャンという名前は、名札でわかりました」
　同じ戦災孤児でも、イリナは、まだ自分のほうが救いがあるように思えた。両親と遊んだり、名前を呼んでもらった記憶があるのだから。
「それから、どうしたの……？」
「共和国軍に拾われました」
　アーニャは食器をイリナに渡しながら、悲しむ様子もなく、淡々としゃべる。
　養護施設で育った彼女は、優れた知能を買われ、一五歳で初等学校を卒業してすぐ、空軍医学研究所に籍を置いた。
「最初は吸血鬼に興味なかったんですけど、調査書類が面白くて、興味を持ったんです」
「怖くなかったの？　リリット国の子どもでも、私たちを怖がってるって聞いていたけど……」
　アーニャは首を横に振る。
「施設の先生のほうが怖かったです。怒鳴ったり叩たいたりするので。サガレヴィッチ副長官みたいな人ばかりでした」
「最悪」
「でしょう？」
　イリナとアーニャは肩をすくめると、ふふっと笑う。

レフがいなくても、彼女がいてくれることで、イリナは救われている。そして何より、同じ故郷で、同じような境遇だったことを知り、いっそう親近感を覚えてきた。

彼女も人間なのに──。

頭の片隅でイリナはそう思ったが、もう気にしないことにした。

食事を皿に盛り付けていると、アーニャが時計を指した。

「あっ、もうすぐですよ！」

あと三〇秒ほどで二四時だ。黙って秒針を見つめる。

五七秒、五八秒、五九秒──

「新年おめでとうございます！」

「ええ、おめでとう」

ふたりで食事をつまみながら、東歴一九六一年の訪れを祝う。

誰かと一緒に年越しをしたのはいつ以来だったか、イリナは覚えていなかった。毎年、ひとりで夜空を見上げ、静かに月の詩を詠うたっていた。

アーニャと過ごすのも良いけど、レフがこの場にいたらもっと良かったのにと、密ひそかに思う。

レフたち候補生は、今、この街にはひとりも残っていない。

軍の規定で、一年に三回は保養地での休養が義務づけられており、ヴィクトール中将に率いられて皆で出かけていた。彼らは故郷の家族には「遠くへ出張する」と伝えており、帰省していないのだとイリナはアーニャから聞いた。

そして、コローヴィンたち技術者は、年末年始返上で設計局に泊まり込み、宇宙船の不具合を修正している。

そんな状況を知ると、イリナは宇宙開発からひとり取り残された気分になった。皆は未来へ進んでいるのに、自分は宇宙から少しずつ遠ざかっているような、漠然とした孤独に襲われることがあった。

「あの、わたくしの料理、美お味いしくないですか……？」
　アーニャが不安そうにイリナの顔を覗のぞき込む。考えごとをしていたせいで、イリナは食事の手がすっかり止まっていた。
「ううん。食堂のより好きよ。いい香りね」
　イリナはニシンをぱくっと齧かじる。好きというのは嘘うそではなく、本当に香草の匂いが気に入ったのだ。
　するとアーニャはホッとしたように微ほほ笑えむ。
「よかったです！　あ、でも、わたくしの料理のほうが好きなんて、ナタリアさんに言っちゃ駄だ目めですよー。あの人、ときどき冷たい目するんですよねぇ……」
　アーニャは寮母の正体が〔運送屋〕だと知らないようだった。
　イリナはふと、彼女の秘密を教えようかと悪戯いたずら心ごころが芽め生ばえたが、冗談では済まなくなる気がしたのでやめた。そして、キャビンに爆薬を搭載したのも〔運送屋〕だったことを思い出し、同じ肩書きでもいろいろな人間がいるのだなとイリナは感じた。
　サラダを食べていたアーニャは、じゃがいもをフォークで刺すと、顔をハッと上げて言う。
「そうだ！　あとで外に出て、新年のお祈りをしましょう！」
　リリット国の慣習では、川に松まつ毬かさを投げながら一年の幸運を祈る。沈んだ松毬が水で清められ、願いが叶うと伝えられていた。
　この街に川はないが、「同じ水なら大丈夫でしょう」というアーニャの提案で、町はずれの人工湖に向かうことになった。イリナにとっては、レフとスケートをした思い出の場所。勿もち論ろん、アーニャには秘密だ。

　食べ終えたイリナとアーニャは外がい套とうを纏まとい、外へ出た。
　吐く息は、真っ白。

白しら樺かば並木は凍りついて樹氷になり、月明かりを浴びて幻想的に輝いている。

閉鎖都市である『ライカ44』は「公式には存在しない街」なので、新年を祝う花火を打ち上げるような目立ったことは厳禁だが、極寒の真夜中なのに人々が出歩いていたり、バーの電気が点ついていたりと、街はふだんと違う祝祭の空気に包まれている。

歩いてゆく途中で、煙草たばこ屋の老主人と少女が不思議な格好をしているのをイリナは見つけた。老主人は貴族風の帽子に付け髭ひげ、青い外套を着て、金色の杖を持っている。少女も青い外套を着て髪を三つ編みに結び、白い袋を持っている。

「なんだろう……」と訝いぶかしげな視線を送るイリナ。

すると、イリナに気づいた少女が飴あめ玉を差し出す。

「おめでとー、お姉ちゃん」

だが、イリナは受け取らず、ふたりをじろりと見て、冷たく言う。

「あなたたち、何で変な格好してるの？」

「変……」

少女は泣きそうな顔で飴あめ玉を引っ込める。ふたりは共和国の新年に欠かせない精霊──霜の精マロース・ジェドと雪娘・スネグーラチカに扮しているのだが、リリット国にはない風習だったため、イリナは知らなかった。

見かねたアーニャが割り込んで、少女に笑いかける。

「おめでとうございます、スネグーラチカちゃん！」

「あっ、おめでとーっ」

少女は飛び跳ねて飴玉をアーニャに渡すと、イリナに探るような視線を向ける。イリナはあやふやな感じで、挨あい拶さつする。

「……おめでとう、スネラ・グーチラ……？」

「スネグーラチカ！」

名前を間違えられてぷんぷんする少女に、イリナは頭を下げる。
「ごめんなさい、スネグーラチカちゃん」
「お姉ちゃんのお名前は？」
「イリナ・ルミネスクよ」
少女は飴玉をイリナに手渡す。
「おめでとう、イリナ・ルミネスクちゃん」
お祝いの仲間入りができて、イリナは胸がふわっと温かくなる。
しかし、もし自分が吸血鬼だと知られたら、きっと少女は怖がるだろう。だから、牙が見えないように気をつけて「ありがとう」と微ほほ笑えみかけた。
そしてイリナは、少女にとって自分が人間に見えているのだと考えたら、吸血鬼と人間の違いは何なのだろうと、少し複雑な気持ちになった。

飴玉を舌の上で転がしながら、イリナとアーニャは人工湖に向かう。
道すがら、お祈りに使う松まつ毬かさを探しつつ、イリナは何を祈るか考える。
……月へ行く？
しかし、今年中に実現する話ではない。
……来年まで無事に生きられますように？
そんなことを祈っても、委員会の決定事項など覆らない。
もう少し前向きなことはないのかとイリナは悩むが、考えがまとまらないうちに、人工湖に着いてしまった。湖の上空には、月がぽっかりと浮かんでいる。
いつもなら誰もいない時間帯だが、湖岸では酒盛りをしている若者たちがいる。かなり酔っているようで、笑い声が響いている。
ふたりは湖畔まで進んだところ、分厚い氷の張った湖面を見て、ピタ

リと足を止めた。
「すみません……凍ってるの忘れてました。松まつ毬かさが沈まないですね……」
　申し訳なさそうに、アーニャは眉まゆ毛げを八の字にする。
「氷が溶けたら沈むし、いいんじゃない……？」
　慰なぐさめの言葉をイリナがかけると、アーニャは嬉しそうに頷うなずく。
「そうですねっ！　では始めましょう！」
　アーニャは胸元で松毬を握にぎり、目を閉じて祈りを込めると──
「えいっ！」
　すぐに放り投げた。
　イリナは少し焦る。まだ願いを決めかねていた。
　一番叶えたいことは、何だろう。
　去年も一昨年も、イリナは宇宙を飛びたいと願った。
　でも、その夢は叶って。
　だったら、今年は。今年叶ってほしいことは。
「……決めた」
　イリナは松毬を握り締めて祈りを込め、宇宙に向けて放り投げる。

　レフの怪け我がが治って、宇宙飛行士に選ばれますように！

　松毬は月に重なるように放物線を描いて飛び、凍った湖面にこつんと落ちると、ころころと転がっていった。
「何を祈ったんですか？」
「え……？」
「ずいぶん迷って、すごく真剣な顔でしたけど」
　アーニャに問われたイリナは、目を逸そらして足下の霜柱をぐしゃぐ

しゃと踏みつぶす。
「何でもいいでしょ。というか、訊きく前に、あなたが先に言うべきじゃないの？」
「イリニャンさんと仲良くなれるといいなって、願いました」
　満面の笑みでアーニャは即答した。
　信じがたい回答に、イリナはぎょっとなる。
「……嘘うそでしょ？」
「ほんとですよ。宇宙の話とか、吸血鬼のこととか、たくさん話したいです」
　アーニャの真っ直ぐな瞳ひとみは、嘘を吐ついているとは思えない。
「……あなたって、正直ね。変わってるわ」
「嘘を吐いたら〔運送屋〕にお仕置きされるって、教育されましたから」
　冗談みたいなことを真顔で言うアーニャ。
「それで、イリニャンさんは何を祈ったんですか？　わたくし言いましたよ？」
「え、えっと……」
　焦ったイリナは、
「祖国万歳」
「はい？」
　口をついて出てきたのは、独房で見た『真実イースチナ』の見出しだった。
「祖国万歳よ。文句ある？」
「ないです……」
　凄すごみのあるイリナに圧倒されたのか、アーニャは追究をやめた。
　それにしても、とイリナは疑問に思う。
　レフもアーニャも、どうしてこんなに素直なんだろう。

人間に対して気を許してはならないと考えていたイリナだったが、彼や彼女と接していると、自分が間違っているような気持ちになる。

思い切って、レフのことを祈っていたと、言ってみる？

「……」

想像したら、恥ずかしくなって、頬ほおが火ほ照てった。

「あの、顔が赤いけど、大丈夫ですか？」

「なっ!?　なんでもない！」

イリナは両手を頬にあてると、湖に背を向け、雪で凍った道を早足で歩き出す。

「待ってください~。わっ」

アーニャは凍った雪で足を滑らせ、急ぎ足のイリナについてくるのが精いっぱい。

仲良くなりたい、か。

イリナは彼女の願いを、心の中で繰り返す。

以前だったら裏があると絶対に邪推しただろうに、むしろ、純粋に嬉しかった。

「追いついたっ」

アーニャがイリナの腕をぎゅっと掴つかんだ。

驚いてイリナが振り向くと、アーニャはふたつに結んだ髪を揺らして、にーっと笑う。

「良い年になるといいですね！」

彼女となら、仲良くなれるかもしれない。宇宙を飛んでから、イリナは自分の中の何かが変わってきたような、不思議な気がしていた。

「そうね。良い年になるといいわね」

イリナはアーニャに合わせて、ゆっくり歩くことにした。

ふたりの吐く白い息が一緒になって、星空に消えていった。

第三章　飛行士選抜試験

藍の瞳　Очи　индиго

一月一七日、候補生卒業試験の初日。

膝ひざの怪け我ががなんとか完治したレフは、訓練センターの会議室に、他の候補生たちと集合していた。

針を刺したら割れそうなほどに張り詰めた空気の中、ヴィクトール中将の前に整列した候補生は、レフを含めて一六名。補欠から復帰したレフは列の端に立ち、点呼も最後だ。

最初は二〇名いた候補生だが、この数か月で四名の脱落者が出ていた。

・候補生二号、遠心加速機の訓練後、全身に原因不明の内出血。不適格。
・候補生六号、プールでの高飛び込みで首を痛める。不適格。
・候補生一〇号、ヘルニアの手術で入院。不適格。
・候補生一四号、パラシュート降下訓練で着地失敗し、両足を複雑骨折。不適格。

身体からだを壊すほどの訓練を乗り越えた者だけが、卒業試験を受ける資格を手にした。

じつのところ、空軍兵を飛ばすよりも、開発者である科学者自身が飛んだほうが宇宙研究に直接つながるのだが、科学者は全会一致で空軍兵を推した。なぜなら、自分たちが極限の訓練に耐えるより、飛行士の資質を持つ者たちに最低限の科学知識を教えたほうが効率的だからだ。技術が発展すれば科学者が飛ぶ時代も来るだろうが、現状では非現実的な

話だった。
「──それでは同志諸君、試験の説明をする」
　ヴィクトール中将が厳粛な声で告つげる。
　いよいよだ。
　レフの背筋がピンと伸びる。いつもは余裕の表情をしているミハイルやローザも、真剣そのものの眼まな差ざしだ。
「諸君の中から『六名』を卒業生として認定し、宇宙飛行士の資格を与え、『ミェチタ計画』の正式な宇宙飛行士として備えてもらう。また、六名のうち上位三名を、春に予定されている有人飛行の搭乗者候補として選定。残り三名は予備人員とする」
　つまり、ここで上位三名に入らなければ、いつ宇宙を飛べるのかはわからないということだ。計画次第では、数年後かもしれない。
「なお、六名という人数は、連合王国の『七人の飛行士ヘルメスセブン』に対抗している。名付けて『夢の六人ミエチタ・シエスチ』。少数で勝つところに意義があるという委員会の意向だ」
　ミハイルが小馬鹿にしたように鼻を鳴らすのを、レフは聞いた。レフも意地の張り合いにしか思えなかったのだが、そんなことは口にできない。
　このように、共和国が連合王国に過剰な対抗意識を燃やすのには、訳があった。
　去る一二月一九日、連合王国は無人宇宙飛行に成功すると、近々予定している有人飛行の搭乗候補者として、『七人の飛行士ヘルメスセブン』の中から三名を発表していた。
　連合王国は共和国と違って情報をすべて公開しているため、レフも彼らの顔と名前を知ることができた。彼らもレフたちと同じ軍人で、レフよりも少し年上だった。
　レフは彼らに対して競争心などなく、むしろ情報を共有したり、宇宙

について語り合いたいと考えていた。
　国は違えど、同志だ。
　無論、共和国の秘密主義が変わらない限り、そんな願いは叶うわけもないのだが。
　説明を続けていたヴィクトール中将が、拳こぶしを振りかざす。
「史上初の宇宙飛行士は、祖国を背負うだけでなく、歴史に残る英雄としてふさわしい人物でなければいけない！　最大の覚悟で、試験に臨むように！」
「はっ！」
　レフたちはいっせいに敬礼した。
　宇宙飛行士の座を巡り、二日間に渡る試験が開始される。

　試験科目は、これまで受けた訓練の総復習となる。
　科学理論や技術などの筆記、外国語、各種体力試験、そして特殊装置を使った訓練に、パラシュート降下。試験は減点方式で、各科目に高い基準が定められている。すべての試験にヴィクトール中将が同席し、各人を客観的に評価していく。
　候補生たちは、全国三〇〇〇人の軍人から選抜された優秀な者ばかりだったが、その中でもやはり差は付いていた。
　その差は技能や体力面ではなく、精神面に顕著だった。
　宇宙に憧あこがれて候補生になったものの、『初の飛行士』という重責に堪え兼かねて、選ばれないように敢えて手を抜く者。情熱が尽きてしまい、クビにならないようにただ業務としてこなしているだけの者もいた。
　レフはこれまでの訓練で、飛び抜けた成績を残す科目はなかったが、どの科目も四番手以内には入っていた。怪け我が明けで体力が落ちているが、他で十分に挽ばん回かいは可能だ。

そして、あらゆる科目で一、二を争うのは、ミハイルとローザ。

「さあ、次の試験に移ろう」

ミハイルはリーダーを任されたわけではないのだが、率先して候補生をまとめている。そこにはヴィクトール中将へのアピールという計算高さも感じられるが、尊大になりがちな性格を除けば、彼は非の打ち所がない人物だった。

かたや、ローザは群れずに、ただ淡々と完璧にこなしていく。誰に対しても媚こびを売ることはなく、荒野に咲いた気高き白しろ薔ば薇らのように、孤高を貫いている。

このふたりは各試験でまったく減点なしで、大怪け我がでもしない限り、選ばれるのは間違いなかった。

他の候補生は、もはや三番手を争っている状況だ。

そうなると、己の限界を超えて無茶をする者も出てくる。

「──医者を呼べ！」

外国語試験を失敗した候補生のひとりは、熱気室で無理をした結果、重度の熱中症で入院措置となってしまった。

「おい、大丈夫か!?」

担架で運ばれていく彼にレフが声をかけると、弱々しく、恨みがましく答える。

「……みんな、犬みたいに、燃えてしまえ……」

「えっ……」

あまりの呪じゆ詛そに、レフは呆ぼう然ぜんと立ち尽くす。

候補生たちのあいだには、和気あいあいとした雰囲気はなくなり、殺さつ伐ばつとしてくる。全員がロケットに乗れるわけではないので、争うのは仕方ない。綺き麗れいごとを言っていられないのはレフもわかっていた。だが、レフはそういう重苦しい空気が嫌いだった。飛行士の座を争う敵ではなく、宇宙を目指す仲間でありたかった。

だからレフは皆に、積極的に話しかける。
準備運動のランニングのスタート前、レフは周りの候補生に笑いかける。
「次の科目で一位を取った人が、皆の宇宙食を貰もらえるってどう？今夜は『塩の効いた肉ゼリー』らしいぜ。あ、誰も一位になりたくないか」
くだらない冗談を言うレフを見て、候補生は呆あきれたように答える。
「そんなことより、お前、靴くつ紐ひもほどけてるぞ」
「あっ……！」
全然気づいていなかったレフは、苦笑しながら紐を結び直す。
「いやぁ、俺、紐結ぶの苦手なんだよね」
「おいおい、その結び方だと、紐が縦になる」
「えっ……あはは！」
「お前とは争ってる気にならないよ……」
笑って誤ご魔ま化かすレフを、皆はしょうがないなという目で見る。
レフは自然と周りの人を和なごませていた。
とはいえ、笑っている場合ではなかった。
結局、体力試験では休み明けが響いて記録を落とし、大きく減点されてしまっていた。怪我が完治したとはいえ、二週間も走り込みができなかったのは想像以上に痛手だった。

試験一日目が終わり、候補生たちは共同宿舎の食堂で夕飯を摂る。
雑談は聞こえず、食器の音と石油ストーブの作動音だけが静かに響いている。
ミハイルとローザはいつもどおり食べているが、大多数の候補生は食が進んでいない。レフも同様で、宇宙食のチューブを握にぎりながら、

溜ため息いき交じりに今日一日の結果を思い返す。
　自己採点では、おそらく五番手くらいだ。
　まずい宇宙食がさらにまずくなる。
「……まあ、明日全力で頑張れば大丈夫さ」
　レフはぼそりと、独りごちた。
　もともと補欠だったのだから、落ちたところで失うものなどない。
　ただ、イリナに落選を報告するのは避けたかった。
　独房で別れて以来、もう一か月もレフは彼女と会っていない。以前聞いた予定に変更がなければ、そろそろサングラードの軍科学病院へ移送される時期だった。
　彼女が去ってしまう前に、良い報告をしたい。
「よしっ……！」
　イリナも頑張ったんだ、俺だって。
　気合いを入れ直し、まずい宇宙食を一気に飲み干す。

　試験二日目。宇宙を目指す仲間でありたいと願ったレフの思いもむなしく、衝突が起きた。
「一番手になりたくないなら田舎に帰りなさいよ！」
　グループ対抗のバスケットボールでわざと失敗を繰り返した候補生を、ローザが怒鳴りつけた。
　ローザがムキになるのも当然だった。この試験で人生が決まるのだから、足を引っ張られるのは迷惑甚はなはだしい。チームメイトの苛いら立だちを代弁したといっても過言ではない。
　試験監督であるヴィクトール中将は、腕組みをして無言。言い合いの喧けん嘩かが評点にどう影響するのかは、レフたちにはわからない。ミハイルは首を突っ込まずに、遠目に様子を窺うかがっている。

　ローザは険しい顔つきでコートの外を指差す。
「出てって。試合が止まってるんだけど」
　言われた候補生は、じろりと睨にらみつける。
「女が生意気言ってんなよ」
　その一言は、ローザを激高させるのに十分だった。
「女だから何よ？」
　ローザは怒りに任せて、候補生の肩をドンと突く。
　止めなければと、レフは慌あわてて仲裁に割って入る。
「どっちもやめろよ！」
　そしてレフは、不愉快そうな候補生を冷静に諭さとす。
「ローザの言うとおりだ。宙そらを飛ぶ覚悟がないなら、この場にいるべきじゃない」
　候補生は露骨に舌打ちする。
「偉そうに。吸血鬼のお守りをしてチーフに贔ひい屓きされてるだけじゃねえか」
「おい―」
　レフが反論しようとしたとき。
「そこまでだ！」
　ヴィクトール中将が怒鳴り、候補生に向けて、首を掻かっ切るような仕草をした。
「宿舎へ戻って荷物をまとめろ」
　解雇を告つげられた候補生は悔しげにバスケットボールを蹴けり飛ばし、だが、どことなくホッとした表情を浮かべて、コートを後にする。
　贔屓とけなされて胸むな糞くその悪いレフに、ローザが棘とげのある声をかける。
「覚悟とか言ってたけど、いつもへらへら笑ってるあなたに、そんなものあるの？」

「ある。宇宙への想いなら、誰にも負けない」
　レフはきっぱり言い放ち、唇を引き結んだ。

　陽が落ちて気温が氷点下になった頃、二日間に渡って行われた試験の最終科目が始まる。
　七〇〇〇メートルの高空からのパラシュート降下だ。
　黒い雪雲が分厚い絨じゆう毯たんのように横たわり、霜の精マロースの強風が指先まで凍らせる。
　さらに視界は暗く、降下には最悪の天候だった。
　飛び降りた候補生たちは強風に流され、目標の着地点から遠く離れて木の上に落ちたり、沼に落ちそうになったり、ひどい有様だった。ミハイルやローザでさえも基準距離より離れたところに着地し、初めて減点を受けた。
　そして、最後にレフの順番となる。
　降下口からは冷気が吹き込み、本能的な恐怖を煽あおる暗くら闇やみが広がっている。
　だが、レフには恐怖を吹き飛ばすほどの自信があった。この程度の降下など、イリナとの特訓で何回も経験があったからだ。
　高所恐怖症で腰を抜かしていたイリナが、たった二か月の特訓で、最後には猛吹雪の中を見事に帰還したのだ。
　彼女にできて、自分にできないわけがない。
　やらなければならない。
　そのために生きてきたのだから。
　贔ひい屓きなどとは言わせない。ここで成功しなければ、彼女の顔に泥を塗ることになる。
　飛び出しの姿勢を取るレフ。腕を交差させて両肩を強く掴つかむ。
「……絶対に、決める」

降下口の先を睨にらみ、力強く叫ぶ。
「行きます！　三、二、一、〇！」
レフは夜の闇やみに身体からだを投げ出す。
眼下に広がる暗黒の中、地上の水鏡に月がきらりと映った。

緋の瞳　Очи　алый

生体医学研究所を出てきたイリナとアーニャを、粉雪交じりの冷たい夜風が叩たたく。
アーニャはぶるっと震え、毛皮の外がい套とうの前をきゅっと締める。
「今夜はとくに冷えますね……」
「そうね……」
消え入りそうな声で返したイリナは、憂ゆう鬱うつに沈み込んでいる。
つい先ほど、研究所の所長から重大な通告をされたのだ。
「―サングラード軍科学病院への移送が、二二日に決まった」
今日が一八日なので、四日後。あまりにも急な話だ。
しかし、共和国では、国家からの命令は絶対的な強制力を持ち、ある日いきなり突きつけられる。背後から水をかけられるようなもので、身を守るすべも、相談の余地もない。
移送自体は告つげられていたことだが、日付が決まると、イリナは言い知れぬ不安に襲われた。アーニャが同行するといえど、レフと遠く離れるという淋しさが胸に押し寄せ、うまく心の整理がつかない。
イリナが浮かない顔をしていると、アーニャが「ごめんなさい」と申し訳なさそうに頭を下げた。

「え？」
「有人飛行後にどうなるのか、何も教えてくれないので、不安ですよね……。本当に未定なのかもしれないですけど……わたくし、担当として不甲斐ないです。何も協力してあげられないのかって……」
　そんな気に病まなくてもと思いつつ、イリナは協力してほしいことならあった。レフに『技師として採用される』と嘘うそを吐ついている件に、話を合わせてほしい。
「詮せん索さくしてくるから、つい……。余計な心配してほしくないのに」
　するとアーニャは、すべて心得たという感じに、しっかり頷うなずく。
「わかりました。もしレフさんに訊きかれたら、話を合わせます」
「ありがとう」
　イリナは、月明かりのない、薄暗い街並みを眺める。
「こことも、お別れなのね……」
　たった三か月しか住んでいないのに、第二の故郷のように感じてしまう。そう思えるのも、時間では計れない、あまりにも濃密な体験をしたから。
　宇宙へ行くために必死で頑張った日々は、頭にも身体からだにも刻まれていた。
　レフと訓練をしていたとき、毎日歩いた並木道に差しかかる。この道を真っ直ぐ行った突き当たりに、炭酸水の自動販売機がある。彼はいつも訓練後に炭酸水を一杯飲んでいた。イリナが欲しそうな顔をすると「飲むか？」と薦めてきて、最初は無愛想に断っていたが、血の絆きずなを結んでからは、時折貰もらうようになった。自動販売機に備え付けのコップはひとつしかなく、軽く洗って交互に使うのが、ちょっと気まずいような、恥ずかしいような感じだった。

「……ねえ、アーニャ。そういえば、今日って卒業試験だったわよね？」
　イリナは、今思い出したように尋たずねたが、じつは一日中気になっていた。
「はい。たしかそうです」
　あまり興味なさそうなアーニャ。
「結果って、もう出たのかしら」
「明日の夕方発表だと、上長が言ってました」
「明日……」
「結果、知りたいですか？」
「そうね……私のあとに飛ぶのが誰か、気にはなるわね」
　興味ないふりをしたが、レフが選ばれるのか、祈るような気持ちだ。
　早くも胸がどきどきし始める。
　そして、ふと道の先に目を向けたところ。
　どきん。
　心臓が飛び出そうになった。
　候補生たち数人が自動販売機の前にいるのだが、その中に、レフがいる。
「！……」
　思わずイリナは足を止める。
「どうしたんですか？」
　アーニャが不思議そうに首を傾げる。人間と違って夜目の利くイリナだから、暗くら闇やみの中にいる彼らがはっきり見える。アーニャが気づいていないように、レフからもイリナは見えていない。
　試験の手応えが気になるし、移送についても話したい。
　しかし、イリナは足が雪に埋もれたように動けなかった。
　レフは炭酸水を飲みながら仲間と談笑し、先に帰ろうとするローザに

も笑顔で手を振る。
　楽しそうだし、試験も上々だったのだろう。
　ホッとする一方で。
　なんであの女に笑顔を向けるの。
　嫉しつ妬とめいた感情が胸を撫なでる。
　レフが人間と仲良くしているのを目の当たりにして、彼のいる世界と自分のいる世界は、透明な壁で隔てられている気がした。宇宙から見た地球に境界線などなかったけれど、現実は違うのだ。
　炭酸水を飲み終えたレフは、仲間と街がい燈とうの灯った通りへ去っていく。
「……」
　イリナが立ちすくんでいると、隣でじーっと目を凝らしていたアーニャが、あっと小さな声をあげた。
「もしかして、レフさんですか？」
「！」
　イリナは悲鳴をあげそうになった。
「ば、ばか言わないで！　炭酸水が飲みたいと思って見てただけよ！」
「ふーん。そうですか～」
　なにやら察した雰囲気のアーニャは、イリナに軽く肩をぶつける。
「っ、なにするの」
「いいえ。炭酸水飲みましょう。担当としておごります」
　さっきまで寒さに縮ちぢこまっていたアーニャだったが、やけに元気に歩き出す。
　そして、明け方まで続く検査のあいだ、ずっとにやにやした目でイリナを見ていた。

「―ふぅ……疲れた……」

　一日の業務を終え、シャワー室で身体からだを流したイリナが独房に戻ると、机の上に置いておいた本をアーニャがパラパラと捲めくっていた。
「ああっ！　ちょっと！」
　イリナは髪を拭いていたタオルを投げ捨て、アーニャに駆け寄る。
「勝手に触らないでよ！」
「こんなの描いてたんですね？」
　悪気なさそうにひょいと顔を上げたアーニャは、眉まゆを上げて、本の端を指差す。
　そこには、鉛えん筆ぴつで落書きしたような、丸と三角形の絵が描いてある。イリナは頁の端にパラパラ漫画を描いていたのだ。
　見られてしまっては、否定できない。
　イリナは開き直る。
「暇ひまだったのよ。その本、昔の思想家が書いたものだか知らないけど、つまんないし。べつに落書きくらい問題ないでしょ？」
「落書きはいいですけど……」
　アーニャがイリナの目の前で、頁を捲めくる。
「なんで、人にん参じんがパンケーキに近づいていくんですか？」
「えっ？」
「人参がパンケーキに向かって、ずずずーって……」
「違う！」
　牙きばを剥むくイリナ。
「ロケットが月に飛んでるのっ！」
「えっ！　ロケ、え……？」
　本を手にしたまま固まるアーニャ。
　どう見ても、人参とパンケーキだった。
　じつはイリナ自身も、ロケットには見えないなと思っていた。

だが、恥ずかしいから認めない。
うんざりしたように肩をすくめてみせるイリナ。
「人間と吸血鬼は、美的感覚が違うのよね」
アーニャは首を横にぶんぶん振る。
「わたくしの研究によれば、そんなデータはありませ──」
「うるさいの！」
ドン！
イリナは鉛筆ごと掌を机に叩たたきつける。
「描いてみなさいよ！」
「御意！」
アーニャは鉛筆を手にすると、本の余白にさらさらっと描く。
その絵は、設計局で使えそうなほど精巧だった。
「ふ、ふーん。大したことないわね」
イリナは負けおしみを吐いて、ぽいっと本を放り投げる。そして床に落ちているタオルを拾おうと腰をかがめたところ、
「──また、宇宙を飛びたいですか？」
「え？」
声を掛けられて振り向くと、アーニャが本を拾っていた。
「お月様……行けるといいですね」
「……」
イリナは答えず、タオルを頭から被かぶると、電燈の下に目をやる。
首飾りの宝石ルーンヌイ・カーミエニが、静かに青い光を湛たたえている。

──月へ持って行くのは君だから。

打ち上げ直前にレフがかけてくれた優しい言葉を、イリナはずっと信

じている。
　いつかもう一度飛べる日が来ることを、夢見て。

　黒竜の瞳　Очи　Цирнитра

　サングラード市の中央に位置する、長大な城壁に囲まれた『城塞区画クレムリ』。
　赤地に黒竜が描かれた国旗がたなびき、旧帝国時代から残る荘厳な大宮殿がどっしりと構え、豪華絢けん爛らんな聖堂や宝物庫が建ち並ぶ。
　その一角にある閣僚会議館で、内容非公開の中央委員会が極秘裏に開かれていた。
　最高指導者であるフョードル・ゲルギエフ第一書記も参加する今会議の議題は、「連合王国の宇宙開発に関する対応策」。
　諜ちよう報ほうレポートにより、連合王国は春から夏にかけて有人飛行を計画していると判明。負けるわけにはいかない共和国は、打ち上げを急いでいた。
　モジャイスキー博士が起立し、報告をする。
「現在、実験体イリナ・ルミネスクこと『N44』の体調、精神ともに正常。今後、さらに精密な検査を行う予定です」
「そうですか、そうですか！」
　大げさに何度も頷うなずくゲルギエフ。中肉中背の平均的な体形で、軍人のようにがっしりしているわけではないが、愛あい嬌きようのある笑顔を振りまき、身振り手振りが派手でうるさく、なおかつ声も陽気で大きいため、強烈な存在感がある。一昨年に連合王国を訪問したときには「おしゃべり向日葵ひまわり」と陰で嘲笑されたほどだ。
　そしてゲルギエフは、コローヴィンを銃撃するようにビシッと指す。

「同志チーフよ！　製品の改良は進んでいますかな!?」
「順調にいけば、三月に最終試験の予定です」
　不眠不休で作業するコローヴィンたち技師団は、イリナの成功が原動力となっている。公表はできないが、士気を高めるには十分だった。
「では四月に本番！　異論はありませんな！」
　断定的に進めるゲルギエフだが、それには理由がある。恐怖政治を行っていた前政権を打倒して最高指導者の地位についたものの、政府や〔運送屋〕の中には彼のやり方を快こころよく思わない残党が多数おり、危険を冒してでも強引に進めないと埒らちがあかなかったのだ。
　打ち上げについては異議もなく、議題は次へ移る。
「有人宇宙飛行が成功したら、実験体をどうすべきか？」
「処刑である」
　間髪を容れずに発言したのは、〔運送屋〕の副議長。この男こそ、件くだんの残党の代表格である。イリナの打ち上げに爆薬搭載を進言した人物であり、大粛しゆく清せいの思考を引きずる冷酷な人間だ。
　陰険な目つきをした〔運送屋〕の副議長は、陽気なゲルギエフと正反対で、感情を排した機械的な冷たさで語る。
「人類初の有人宇宙飛行が成功するまでは、宇宙飛行の後遺症を調べる必要があるのは承知している。だが、成功後に生かしておく利点がない。また、開発現場に諜ちよう報ほう員が紛れ込んでいるという情報も届いている。つまり、実験体は用済みになり次第、病死でも事故死でもいいので、早めに廃棄処分したほうがよい」
　残党の委員たちと、連邦最高会議の幹部が、起立して拍手する。
　脅威は連合王国の諜報員だけではなかった。諸外国からの特派員が宇宙飛行に関するスクープを狙い、サングラード市内を嗅かぎまわっている。宇宙開発計画は国家機密だが、関係者は何万人といるため、情報漏ろう洩えいは避けられない。今は隠せている『ミェチタ計画』が明るみ

に出れば、芋いもづる式に『ノスフェラトゥ計画』のことが表に出る恐れも十分あった。
　だが、ゲルギエフは処刑の「保留」を提案する。
「打ち上げまで時間はあります。今、安易に決定すべきことではないでしょう！　決定事項は覆りませんからな！」
　かつて、実験犬マールイが死んだとき、ゲルギエフは大いに悲しんだように、決して冷酷無情な人間ではない。そんな彼が、成功確率が極めて低かった『ノスフェラトゥ計画』を強行したのは、「指導者である自分にとって損か得か？」という合理的な判断だった。つまり、イリナについても利用価値が見いだせれば生かしてもよいと考えており、「邪魔者は消す」という思考停止したようなやり方には反対だった。前政権が倒れたのも、邪魔者を消しすぎて憎しみを生んだことも多分にあったからだ。
　無論、ゲルギエフが「不要」と判断すれば、容赦なく捨てるのだが。
　また、委員会参加者の多くは、内心では処刑に反対していた。イリナに同情している者は少なくない。事実、打ち上げに成功したときには種族の壁を越えて喜んだのだ。
　だが、そんなことを口に出すものは者はいない。
　中央委員会では、私情は不要。
『すべては祖国の繁栄のために』
　この考えに従うのみだ。
　宇宙開発の第一人者であるコローヴィンでさえも、イリナの未来に関する決定権はない。だが、情のある彼は、命を張ってくれたイリナを擁護する。
「彼女は協力的で、献身的だ。私は彼女を現場の一員として認めています」
　しかし、感情論は〔運送屋〕の副議長によって斬り捨てられる。

「関係ない。情報が漏もれてからでは遅い。『Ｎ44』が機密をもって亡命したらどうする。諜ちよう報ほう員に拉ら致ちされたらどうする」
　イリナの処遇について、実験犬や戦争捕虜を例に挙げて激論が交わされたが、結局折り合いがつかず、閉幕の時間が訪れる。
　結論は「保留」。
　イリナの命は、国家上層部に握にぎられている。

　執務室に戻ったゲルギエフは、黒のスーツを着た長ちよう身しん痩そう躯くの女性と紅茶を飲みながら、委員会での議題について改めて検討する。
「まったく、時代遅れの残党どもが。一に粛しゆく清せい、二に粛清。粛清続けて二〇〇〇万だ。どれだけ人的資源を無駄にするつもりだ」
　ゲルギエフは憎々しげに苺の砂糖煮ヴアレニエをスプーンで掬すくい、しゃぶりつくように口に入れると、熱々の濃縮紅茶を流し込む。
　かたや、対面に腰かけている女性は、紅茶をいっさい飲まず、苺の砂糖煮だけを上品に食べる。苺を口に含むたび、深緑色の瞳ひとみが爛らん々らんと輝く。
「〔運送屋〕を監獄へ運送する組織でも作ったら？　んー、甘くて美お味いしい」
　胸やけしそうな食べ方だが、ゲルギエフはとくに反応しない。彼女と八年間も行動をともにすれば、大抵のことでは驚かなくなっていた。
　繊細な金髪を後ろで束ねた彼女は、弱冠二九歳にして最高指導者の腹心を務める文章担当秘書官、リュドミラ・ハルロヴァ。
　旧貴族階級の家柄に生まれた彼女は、一八歳のときに連合王国の大学に留学。社会政治学を修め、帰国後に党の連絡部に所属した。それがきっかけで、当時はただの党員だったゲルギエフの活動を手伝うように

なる。ゲルギエフが第一書記に就任したあとはスピーチライター兼アドバイザーとして携たずさわり、『ノスフェラトゥ計画』の発案にも関与する。最高指導者に遠慮なく意見できるのは、彼女以外には数えるほどしかいない。

　ゲルギエフはテーブルの上の地球儀をぐるりと回す。

「我が祖国を、世界一の大国にするには……どうすべきか」

　ツィルニトラ共和国は、半世紀前は貧乏な発展途上国であり、先進諸国に搾取されていた。そんな弱小国が改革を重ね、今や人類史上初の偉業を達成しようとしている。これを機に絶対的な王座を手に入れたいゲルギエフだったが、果たして有人宇宙飛行の成功だけで願いが叶うのか、半信半疑だった。

「『ミェチタ計画』が核兵器にも勝る武器であることは、間違いないと思うのだがね」

「あははっ。おかしい」

　悩むゲルギエフを、リュドミラは一笑する。

「ん？　名案でもあるのか？」

「あなたは、革命的英雄になりたいんでしょ？」

「勿もち論ろんだ」

「私もよ。このつまらない世界に、革命を起こしたいの。連合王国も〔運送屋〕も、全部いっぺんに食べちゃうような革命。その武器って、『N44』じゃないの？」

　リュドミラは、薄い唇についた糖蜜を、舌の先でぺろりと美お味いしそうに舐なめる。

「吸血鬼、イリナ・ルミネスク。毒にも薬にもなる絶品の素材を、どう料理するのか……じっくり考えたらいかが？」

第四章　月よりも遠く離れて

藍の瞳　Очи　индиго

一月一九日、夕刻。

候補生たちは通常訓練を終えたあと、訓練センターの会議室に招集された。

卒業試験の結果発表──『夢の六人ミエチタ・シエスチ』が選ばれるのだ。

入院した一名と除名された一名を除く、合計一四名の候補生が整列する。昨晩、レフは発表が気に懸かり、夜中に何度も目を覚ました。それはレフだけではなく、全員がそうだったが。

機密事項の書状を手にしたヴィクトール中将が、眉まゆのあいだに皺しわを寄せる。

「『夢の六名』のうち、まず上位三名を発表する。この三名を特別資質者として、史上初の宇宙飛行士の選考対象とする」

余計な前置きなどない。

室内の空気がピリッと引き締まる。

レフは姿勢を正し、息を止める。

ヴィクトール中将は候補生たちをギロリと見回すと、勿体つけるように、ゆっくりと口を開いた。

「ミハイル・ヤシン中尉」

「はい」

ミハイルは、呼ばれて当然というような顔つきで、一歩前に出る。

候補生たちは黙って次の名前を待つ。

「ローザ・プレヴィツカヤ中尉」

「光栄です」

微び笑しようを浮かべるローザは一歩進むと、隣に立つミハイルに挑戦的な視線を投げた。その態度に激しい競争心をレフは感じる。

このふたりの選出は、然しかるべき結果。

重要なのは次だ。

「では、最後のひとりを告つげる」

候補生たちは、それぞれの心持ちで宣告を待つ。

顔が緊張で強こわ張ばる者。自信なさそうにうつむく者。胸を張る者。

レフはヴィクトール中将の目を、誰よりも真っ直ぐに見据える。

最終試験のパラシュート降下は、完璧にこなした。全力は出し尽くした。どんな結果だろうと、正面から受け止めるつもりだ。

そして、ヴィクトール中将は、ひとつ咳せき払ばらいをして、レフと目を合わせた。

「レフ・レプス中尉」

「え!?　あ、はいっ！」

一瞬信じられず、レフは声が裏返った。

落選した候補生たちは、がっくりと肩を落とし、弱々しい溜ため息いきを漏もらす。

続いてヴィクトール中将は予備人員の三名を発表していくが、興奮しているレフの耳には入ってこない。夢の成じよう就じゆに一歩近づき、次々と空想が頭に浮かぶ。

宇宙から見る地球は？

イリナは青いヴェールに包まれていると言っていた。

打ち上げられる瞬間は？

かなり負荷がかかるみたいだ。

無重力は？

酔ったみたいに、ふわふわと──

「おい、レフ！」
「っ！」
　ヴィクトール中将に怒鳴られたレフは、バネ仕掛けの人形のようにビクンと跳ねて、慌あわてて敬礼する。
「申し訳ありませんっ！　なんでしょうか!?」
　レフがぼうっとしている間に、残りの三名も発表されていた。仲間から失笑が漏れる。見るからに苛いら立だっているヴィクトール中将は、わざとらしく大きな溜息を吐つき、話を再開する。
「お前たちは、一般国民には秘密の存在だ。仮にミハイルが宇宙飛行士に選ばれても、宇宙から帰還するまでは単なる空軍中尉として振る舞え。そして、ミハイルの名前が世間に公表されても、他の者たちは『飛行士第二号』『第三号』と呼ばれる」
　連合王国の情報公開に比べると、頑かたくなすぎるほどに秘密主義だった。レフは有名になりたいわけではないが、陰でこそこそせずに堂々としたい気持ちは少なからずあった。
「では、最後に。人生に関わる大事なことを伝える」
　ヴィクトール中将は、ひときわ厳しい顔つきで言う。
「『夢の六人ミエチタ・シエスチ』は、当面、飲酒は禁止だ」
「えっ？」
　レフだけでなく、終始冷静だったミハイルも驚きの声をあげた。
　禁酒の目的は、健康管理および自制心の向上ということだったが、『人生ジーズニ』という意味を持つ蒸留酒ジーズニの規制は、とても非情である。とくに今のような厳寒期を乗り越えるには、なくてはならないものだった。
「乾杯は炭酸水でやれよ」
　ヴィクトール中将は真顔でそう告つげると「今後の訓練については明日説明する。今日は解散」と言い残し、部屋を出ていった。

空気が緩ゆるんで緊張から解放されると、皆は抑えていた気持ちが溢あふれ出した。悔し涙をぬぐう落選者を、べつの落選者が励ます。予備人員の三名が、抱き合い、握手を交わす。

レフはミハイルとローザに「頑張ろうぜ」と握手を求める。

だが、ふたりは腕を組んだまま。

ミハイルはつれなく言う。

「歴史に残るのは『第一号』だけだ。それ以降は忘れられる」

慣れあう気はないという強い意思をぶつけられるレフ。

「それは、わかってるけど。名を残すことは、そこまで大事なのか？」

史上初めて飛んだイリナは、褒ほめ称えられることなく、独房に隔離されて、密ひそかに検査を続けている。ここで彼女の名を出せば非難されるのはわかりきっているので言わないが、レフは想いをぶつけ返す。

「名誉や名声を求めることが悪いとは思わない。でも、夢を追う同志として、宇宙への道を一緒に走りたい」

レフは皆を見回し、同意を求める。

だが。

「あなた、『舌の上では蜂はち蜜みつ、心の中は氷』じゃないの？」

ローザにも冷ややかな視線を向けられた。共和国のことわざで、『口では聞こえの良いことを言うが、腹の中は真っ黒』という意味だ。

レフは「まさか」と手を振って否定する。
「勿もち論ろん、第一号に選ばれたい気持ちはある。でも……俺はただ、ぎすぎすしたりせずに、宇宙を目指したいだけだ。宇宙飛行は、ここにいる全員の、いや、全世界市民の夢だろう」
「立派ね」
皆、白い目をレフに向けて、会議室を出ていく。
ぽつんと取り残されるレフ。
「……いいさ。俺は俺だ」
とにかく、今は一刻も早く、イリナに結果を伝えたかった。

翌朝。星々が薄く消え始めた、灰色の夜明け。
汗も鼻水も凍るような極寒の中、生体医学研究所の別棟に近い松林を、レフは訓練着姿でランニングしている。独房には入れないため、イリナが検査から帰ってくるのを待ち伏せることにしたのだ。しかし、建物の前で待っていると守衛に不審がられるので、トレーニングを装う。
とはいえ、すでに四周しているので、不審に思われてもおかしくない。
「ふぅ……」
走り疲れたレフは、雪の積もった松にもたれかかる。
そもそも、イリナがまだ独房にいるのかわからなかった。いつの間にか移送されていることも十分に考えられる。
腕時計を確認すると、午前五時半。あと三〇分もすれば、飛行士としての一日が始まってしまう。
「……今日は帰ろうか……」
諦あきらめて顔を上げたところ。
「あっ！」
林道をイリナとアーニャがやって来るのが見えた。

「おーい！」
　レフが手を振りながら駆け寄ると、ふたりに訝いぶかしげな顔をされた。
「……何してるの」
　レフは「ふふん」と得意げに笑うと、かじかむ手でＶサインを作る。
「卒業試験合格して、最終候補の三人に残った！　誰よりも先に、イリナに伝えたくて」
「えっ!?　ほんと！　おめ──」
　嬉しそうに口を大きく開き、飛び跳ねて拍手しかけたイリナだったが、ふっと無理やり無表情を作るように口を閉ざした。そして、拍手せずに、偉そうに腕組みする。
「報告ご苦労さま。それで？」
「今、拍手──」
「してない」
　笑いを堪こらえたようなアーニャが、レフの腕をつんと突つく。
「イリニャンさん、『試験の結果どうだったかな？』って何回も気にしてたんですよ？　選ばれるといいなって」
「え？」
　予想外の言葉にレフは目を丸くする。
「はぁぁ!?」
　早朝の静寂をイリナの悲鳴が破る。
「いい加減なこと言わないでくれる!?　全然気にしてないからっ！　幻聴でしょ！」
　イリナの大声が松林に響き、樹氷を揺らす。
「アーニャこそ頭の検査してもらったほうがいいんじゃないのっ!?」
　ドンッ。イリナが地団太を踏んだ途端──

　松に積もっていた雪や氷が、どさどさっと大量に彼女の上に落ちる。
「ひぁあっ!?」
　びっくりしたイリナは飛び退き、凍った地面で足をつるっと滑らせ、雪泥のぬかるみに尻もちをつく。
「痛ったぁ……！」
　目を白黒させるイリナ。
「な、なに……」
　とどめを刺すように、落ちてきた松まつ毬かさがイリナの頭に直撃する。
「ひっ……!?」
　ころりと転がる松毬。
　呆ぼう然ぜんとするレフとアーニャ。
　尻もちをついたまま放心するイリナに、レフは手を差し出す。
「大丈夫か……？」
　だがイリナは手を取らず、周囲をきょろきょろ確認する。
「……」
　しばらくすると、状況を理解したのか顔を真っ赤にして、レフの差し出した手を無視して立ち上がった。そして、手に付いた泥を服でぬぐいながら、何事もなかったかのように振る舞う。
「まあ、他の人間が飛行士になるくらいなら、レフがいいとは思うけどね……」
　まったく素直じゃない彼女だが、レフは自分の試験を気にしてくれていたのだと思うと、凍えた身体からだが少し温かくなる。
　動揺が少し落ち着いたようなイリナは、ぬかるみで濡ぬれたズボンの尻部を指でつまみながら、レフに尋たずねる。
「それで、いつ飛ぶの？」
「いや……決まったわけじゃなくて――」

時期は未定で、競争相手にミハイルとローザがいることを教える。
「あいつらか……」
不愉快そうに呟いたイリナは、何か言いたげにレフの目をじっと見つめる。昇り始めた朝日が、彼女の瞳ひとみを緋ひ色いろに透かす。
「なに？」
「……ううん。負けないように、せいぜい頑張るのね」
寂しげに瞳を揺らして、イリナはレフの前から歩き去る。
「いいんですか？　このままお別れで」
アーニャに呼びかけられると、彼女はぴたっと足を止めた。
「もう、二度と会えないかもしれないんですよ」
どきりとするようなことを言われたイリナだが、大きく反応せず、うつむいて、黙っている。嫌な予感に苛さいなまれたレフは、アーニャに確認する。
「二度と……って？」
「サングラードへの移送ですが、一月二二日に決まりました」
「え、明後日じゃないか……？」
移送されるのはわかっていたが、急に訪れた別れに、レフの胸はぎゅっと締め付けられる。
「いつまであっちにいるんだ？」
「未定です」
レフはアーニャから、彼女が知っている限りの詳細を訊きく。だが、街を出る以外の情報はない。技師になる件を訊きたかったが、『口外厳禁』の秘密を他者に確認するのはまずい。イリナは会話に入らず、雪泥まみれの松まつ毬かさをじっと見つめている。ここで「行くな」と引き留めたところで、当然、決定事項は覆らない。
暗く別れたくなかったレフは、イリナに歩み寄ると、肩をぽんと叩たたく。

「明日、君の送別会をしよう」
　明日は祝日の『共和国軍の日』で、国の機関はすべて休みだった。勿もち論ろん、『ライカ44』も例外ではない。
　ゆっくりとイリナは顔を上げ、伏し目がちに答える。
「……送別会とか、そういうの、いらないけど……。あなたが試験に合格したお祝いなら、してあげてもいいわよ……？」
　はにかみながら、小首を傾げるイリナ。
「俺の？」
　意外な提案にレフは狼狽うろたえる。するとイリナは助けを求めるようにアーニャに声をかける。
「ね、ねえ、アーニャ？」
　話を振られたアーニャは、首をぶんぶんと横に振る。
「すみません。わたくしは、サングラードへ記念パレードを見に行く予定なので、おふたりでどうぞ」
「えっ……ちょ、あなた、どういうこと!?　ついさっき、『一緒にライカ最後の夜を楽しみましょう』って騒いでたじゃない!?」
　あたふたするイリナを見て、にやにやするアーニャ。
「幻聴じゃないですか？　おふたりでどうぞ！」
「で、でも、翌日移送なのに、サングラード行ってたら、戻って来れないでしょ……？」
「いいえ。パレードは昼間に終わるので、すぐ帰途につけば、夜遅くなりますが戻れます」
「えぇ……」
　イリナはレフに視線を向け、どうしようという風に目を泳がす。
「俺は、構わないけど……」
「え……？」
「はい決定！　じゃあイリニャンさん、寒いから早く帰りましょう」

　アーニャは右手でイリナを引っ張り、左手をレフにひらひらと振る。
「ではレフさん、よろしくお願いしますね～」
「おい待て。待ち合わせも何も決めてないぞ」
　レフが引き留めようとしても、アーニャはイリナを引きずっていく。
「明日、午後六時に、この松の下で！　あとはお任せしますっ！」
「ねえアーニャ！　何であなたが勝手に決めてるのよ！」
「わたくし、担当官なので」
　ふたりは嵐のように去っていく。
　なんだかんだで、去り際に見えたイリナの横顔は、少し照れながらも、嬉しそうだった。
　彼女が街を去る前に、一緒に過ごせる。そのことが、レフは嬉しくもあり、淋しくもあった。

　待ち合わせの時間から一〇分早く、レフは松林にやってきた。
　霜の精マロースも祝日なのか北風は緩ゆるみ、樹氷は少し溶けてぽつりぽつりと雫しずくを落とす。それでも十分に寒いので、分厚い外がい套とうを着こんでいる。
　レフ以外の飛行士はアーニャと同じく、サングラードへ記念パレードを見に行っている。自由参加なので行かなくても問題ないのだが、軍の行事よりもイリナを優先したと知られたら、おそらく軽けい蔑べつの眼まな差ざしで見られるだろう。
　それでも今日は、彼女に会いたかった。
　街の中央にある教会が、午後六時を告つげる鐘を高らかに鳴らす。
　すると、ほぼ同時に、木陰からイリナがひょっこり顔を出した。以前ジャズバーへ行ったときと同じポンチョを着ていて、首飾りをかけ、民族衣装の巾着袋を持っている。

　レフは軽く手をあげ、挨あい拶さつする。
「やあ」
「おはよ……」
「あっ、おはよう」
　さっそく生活時間のズレを感じるレフだが、イリナに合わせる。
　久しぶりにふたりきりで会うと、妙に緊張してしまう。
「……さて、どうしようか」
「あなたに任せるって話じゃなかった……？」
「とりあえず、ジャズバー行かない？」
　酒は飲めないが、音楽でも聴きながら募る話をしようとレフは思っていた。
「いいわね。私も行きたいと思ってたの」
　イリナは可か愛わいらしい牙きばをちらりと見せた。

　街に人影はまばらで、休みの店も多い。いつもなら家々の煙突から煙が立ち昇る時間帯だが、その数も少ない。皆、パレードの見物に行っているようだ。
　白しら樺かば並木を物憂げに眺めながら歩くイリナに、レフは明るく声をかける。
「元気だったか？」
「検査では異常なしよ。ところで、あなたこそ、膝ひざは大丈夫なの……？」
「完全に治ったよ」
　レフが膝をポンと叩たたくと、イリナは「よかった」と微ほほ笑えんだ。
　彼女は以前と変わらない様子で、レフはホッとする。だいたい偉そうに上から目線だが、時折、隠しきれない優しさが顔を覗のぞかせる。

　そして、心配だったサングラードへの移送も、新担当のアーニャとすっかり仲良くなっているようだったので安心した。勿もち論ろん、不安がないと言えば嘘うそになるが、検査について根掘り葉掘りイリナに尋たずねても嫌な気分にさせるだけだろう。
　今日は、今まで会えなかった分、楽しく過ごそうとレフは決めている。

　ジャズバーに行ってみると、臨時休業だった。
「計画性がないわね。本当に私を送り出す気あるの？」
　ムッと口をとがらせるイリナ。
「ごめん……」
　と、レフは謝ったが、ふと気づく。
「ちょっと待て。今日は送別会じゃなくて、君が俺のお祝いをするって話じゃなかった？」
「え？」
「『送別会しよう』って提案したら、君がイヤだって……」
「ごちゃごちゃうるさいの！　お祝いなんて、そのっ……言ったかもしれないけどっ……！」
　イリナは手にしている巾着袋に八つ当たりするように、口を縛っている紐ひもをぎゅうぎゅう力強く締める。
「そんなに固く締めたら、解けなくなるぞ……」
「知らないっ……」
　イリナは、巾着袋を腰の後ろに回して隠し、唇をきゅっと結んだ。
「……ええと、他の店を探そう」
　黙り込んでしまったイリナを連れて居住区を歩いていると、映画館の看板が見えてきた。
『大宇宙航海』という題名の空想科学映画だ。

　看板には宇宙船の絵が描いてあり、煽あおり文句は──
《いざ、月へ！　人類の夢をのせて暗黒の大宇宙を行く！》
「えっ!?　ねえ!?　何これ!?」
　静かだったイリナが看板に飛びついた。
「いつ誰が月に行ったの!?　嘘うそでしょ!?」
「嘘だけど……」
「嘘なの!?」
　混乱して目を白黒させるイリナ。テレビすらない山奥で育ったため、映画を知らないようだ。レフはイリナに映画がどういうものか簡単に説明する。
「観てみたい」
　イリナは看板の宇宙船を好奇の目で眺める。レフは、イリナが特撮にどういう反応をするのか、想像しただけで楽しくなった。
「じゃあ観ようか。面白そうだし」
　レフはすでに観ていたが、観ていないふりをする。
　ふたり分の入場料を払い、白しら樺かばジュースとポップコーンを買って、場内に入る。
　ちょうど、あと五分で上映開始。
　客はレフたち以外に誰もおらず、貸し切りだ。
「真ん中が見やすいと思うけど、好きなところに座ったら」
　レフが中央付近に座ると、イリナは迷ったそぶりを見せ、場内を観察しながらぐるっと一周し、ウロウロしつつ、結局レフの真横にちょこんと座った。
「ここからが一番観やすい気がするの。たまたま、あなたが隣にいただけ」
「ん？　ああ、わかってるよ」
　いちいち言い訳しないでもいいのにと、レフは苦笑する。

照明が落ちて上映開始のブザーがけたたましく鳴ると、イリナはビクッと身体からだを揺らした。
「な、なに!?　敵襲!?」
「落ち着け。始まるから」
ファンファーレと共にスクリーンに宇宙船が映し出される。
「わぁっ!?」
イリナは立ち上がり、前の席の背をつかんで身を乗り出す。
「え、すごい。この宇宙船、本物？　飛んでるよ!?」
予想以上の反応に、レフは笑いを堪こらえるので必死だ。
最前列まで走ってスクリーンに触れ、最後列まで走って映写機を覗のぞき込む。
「眩まぶしいっ！」
スクリーンがイリナの影で真っ暗になるが、おかまいなし。
客がいなくてよかったとレフは心から思った。
ひとしきり騒いだイリナはレフの隣に戻り、ようやく映画を見始める。
映画の内容は──
『共和国の宇宙船が初の有人月探検に向かったところ、遭難した連合王国の宇宙船を発見。救出するが、そのせいで燃料が切れてしまう。果たして無事に帰還できるのか？』
ようするに、連合王国よりも優れた祖国を描くという、国威発揚映画だった。
スクリーンの中では、共和国の科学者と飛行士が宇宙空間で宇宙船を組み立て、月に出発する。そして、共和国の優れた科学力で難なく月に着陸し、月面が映し出されるが、山や崖がけばかりで凹凸が激しい。
「月って、こんなにデコボコなの？」
「制作者の想像だよ。実際に見た人はいないから」

　真剣に見入るイリナは、レフに質問を投げかける。
「あの真っ赤な星が、火星？」
「ああ、そうだね」
「太陽みたい。本当にこんなふうなのかな……」
　ポップコーンの箱を握にぎり締めているイリナの瞳ひとみはきらきら輝き、子どものように純粋で、そんな彼女を見ていると、レフは忘れていた感情を思い出す。初めて天体図鑑を見たとき、どきどきしたことや、自分で考えたロケットを絵に描いて、宇宙旅行をしたこと。そして初めて映画を観たときの高揚感。
　そんな空想の世界が、現実になろうとしている。
「―ああ！　ぶつかるっ！」
　宇宙船の危機に驚いたイリナが両手を上げた拍ひよう子しに、ポップコーンを派手にまき散らした。
「あっ!?　ごめんなさい！」
「あはは。拾っておくから観てていいよ」
　レフはイリナから箱を受け取り、ポップコーンを拾い集める。
　イリナは映画の登場人物になってしまったかのように、熱くなっている。
「え、燃料なくなっちゃったの？　大丈夫かな……？」
　宇宙飛行士たちの無事を祈り、イリナは胸の前で手を合わせる。
「頑張って…！　もうすぐだよ！」
　作り物の映画とはいえ、イリナが人間を応援していることが不思議だった。宇宙を探索するという壮大な夢に、種族も何も関係ないのだろう。
　映画の中では、共和国の飛行士が地球に帰還し、世界中の人から拍手喝かつ采さいだ。
「やったぁ！　よかったね！」

ぱちぱちと、イリナの拍手が場内に響く。レフは喜ぶ彼女を見ていると、君は映画になってもおかしくない偉業を成し遂げたんだという気持ちがふつふつと湧く。しかし、彼女を祝福したのはたった三〇人程度で、〔運送屋〕などは冷たい顔をしていた。史上初の宇宙飛行士である彼女を公にできないことが、レフは歯は痒がゆかった。

映画館を出ると、すっかり夜になっていた。

イリナは興奮冷めやらぬ様子でレフに話しかける。

「ねえレフ。火星の生命体って、どういう形だと思う？」

「バクテリアって言われてるけど、想像もつかないよな」

著名な科学者たちが数々のデータを分析した結果、火星には生物がいるだろうという説が濃厚だった。さらに、火星の軌道を回る巨大な岩石『不安ポボス』と『恐怖デイモス』は、一〇〇年前には存在しなかったことが発覚し、火星で暮らす知的生命体が打ち上げた人工衛星だという話が学会を騒がせている。

それをいつか自分が確認できればと、レフもまた宇宙を旅する未来を想像し、気分が高まっていた。

人の少ない街をぶらぶらと歩きながら、ふたりは宇宙談議に花を咲かせる。

「宇宙の旅って、いつの日か、さっきの映画みたいにできるのかな」

有人宇宙飛行が実現すれば、将来的には惑星間旅行を目指すだろうと言われている。旅行中の食糧問題を解決するため、「宇宙船に山や羊ぎを乗せて、飼育しながら長期飛行をしてみてはどうか」という科学者の意見もある。

「すごいこと考えるよな。理論上は可能なんだろうけど」

「本気なの？」

イリナが信じられないといった表情を見せる。

「排はい泄せつ物を緑藻類に食べさせて、緑藻類を山や羊ぎに食べさせて、人間が山羊の乳を飲んで……みたいな循環方式らしい」
　レフも、自分で言っていることが信じられなかった。
「人間ってほんと変なことばかり思いつくのね」
「でも、そんな人間の考えた炭酸水は大好きだろ？」
　いつも炭酸水を買っていた自動販売機が街角に見える。
「初めて君に飲ませたとき、コップ落としてびっくりしてたっけ。じゅわじゅわ痺しびれりゅうっ……って！」
　レフは当時のイリナを真ま似ねして、舌をベーッと出して喉のどをかきむしる。
「うるさい！　覚えてない！」
　イリナは足早に歩いていく。ちょっとからかったつもりが、怒らせてしまったようだ。
「ご、ごめん。そんな怒るなよ」
「……人間の仲間とは、仲良くやってるんでしょ？　……あの女とも」
　妙にムッとした表情で、イリナは言った。
　イリナがそういう風に言うのは、ローザしかいない。
「ローザのことか？　なんだよいきなり？」
「一緒に訓練してるんでしょ」
「そりゃ、仲間だからな」
「一緒にここで炭酸水飲んで？」
「飲むけど……？」
　イリナはじっとりとした横目でレフを見る。
「……パラシュートで、仲良く手をつないでタンデム降下してるのね」
「は？　それはしてないけど……どうして？」
「……どうもしない」
　つんと目を逸そらすイリナ。

なぜ急にローザの名を出すのか疑問だったが、突っ込むと余計に怒らせてしまいそうな空気をイリナは醸かもし出している。ローザと仲が良いかといえば、むしろ壁を作られているのだが。

気分を変えて、夕飯の話に切り替える。

食事をどうするか、レフは丸一日悩んだ。

送別会によく使う高級レストランに入っても、味覚のないイリナには嬉しくないだろうし、レフは自分だけ美お味いしいものを食べるという気まずさに襲われる。

他にも考えたのだが、店ではなく、湖畔で夜空を眺めながら、ふたりで静かに過ごしたいと思った。屋外は寒いが、人間に囲まれる店よりもイリナにとっては居い心ごこ地ちがいいはずだ。

そこでレフは、鞄かばんに軽食を詰めてきた。牛乳瓶びんとライ麦パン、餞せん別べつに、街で手に入る一番高いチョコレート。餞別には可か愛わいい服飾品を贈ろうか真剣に考えたが、悩んだ挙句、恋人に贈るんじゃないんだからと判断して、差し障さわりのない食べ物になった。

「夕飯、ピクニックってわけでもないんだけど、食べ物持ってきてるんだ。湖畔にテーブルとベンチがあるから、そこで食べない？」

「……あ。うん、いいわよ」

店がいいと言われることもなく、まずはホッとした。

湖に着くと、午後九時を過ぎていた。映画で時間を使ったこともあり、共同宿舎の門限である午後一〇時まであまり時間がない。そしてレフは、できればパレード見物に行った仲間たちよりも先に部屋に戻りたかった。以前とは立場が違い、ふたりで夜を明かせないのだ。

そのことをイリナに伝えると、つまらなそうに「わかった……」と呟いた。

「じゃあ、さっそく食べよう」

　薄暗い街がい燈とうの下、ベンチに隣り合わせに座る。レフが木製のテーブルに食べ物を並べる傍かたわらで、イリナは巾着袋をいじり、何やらもじもじしている。
「ん……？」
　よく見ると、イリナは巾着袋を開けようとしているのだが、紐ひもをきつく締めすぎて解けなくなっているようだ。
「だから開かなくなるって言ったのに」
「開くわよ」
　イリナは必死で格闘するが、力を入れすぎて爪が剥はがれそうになる。
「痛っ……！」
「ちょっと貸して。紐の解き方にはコツがあるんだよ。航空学校で習うんだ」
「……」
　イリナはしばらく自力で解こうとしていたが、ついに降参し、レフにそっぽを向きながら無言で差し出す。
　受け取ったレフは紐をねじり、軽々と解く。
「ほら」
　そして巾着袋を返すが、イリナは受け取ろうとしない。
「どうした？」
「……開けて、中、見て……」
　イリナは目を逸そらしたまま、恥ずかしそうにぽそぽそ言う。
　言われるがままにレフは巾着袋を開くと、プラスチック容器に入った肉の煮凝りホロデーツがあった。
「あ……」
　レフはテーブルに容器を置き、蓋ふたを開けてまじまじと見る。
「これ、君が作ったの？」

　頬ほおをぽっと染めて、頷うなずくイリナ。
「共和国のお祝いの料理って、アーニャが言ってたから」
「ありがとう！」
「な、なんでもいいから、さっさと食べなさいよ」
　イリナは照れ隠しをするように、また巾着袋の紐ひもをぎゅうぎゅうに締めた。
　送別会と祝賀会を兼かねたにしては質素な料理が、テーブルに並ぶ。ライ麦パンは堅く、肉の煮凝りもすっかり冷えている。
　それでも、イリナの手料理があることがレフは嬉しかった。
「じゃあ、いただきます」
　レフはさっそく肉の煮凝りを食べる。
「おっ、美う味い」
　アイスのように冷たいが、味付けは申し分なかった。
　じっと見つめていたイリナは、ほっと息を漏もらす。
「ほんと？　よかった。私には味がわからないから、心配だったの」
「そういえば、そうだよな……味付け、どうしたんだ」
　イリナは自分の手料理をひと口食べると、アーニャにつきっきりで手伝ってもらって、お腹がいっぱいになるくらい何度も味見してもらって、ようやく作れたのだと話した。
　それを聞いたレフは、同じ肉の煮凝りを食べているのに、違うものを食べているような気がして、何か切なさのようなものを感じた。
「このちょこれーと、すっごく良い香り」
　目の前で美味しそうにチョコレートを舐なめる、人間とは少しだけ違う女の子。史上初めて宇宙を飛んだというのに偉ぶることもなく、料理を作るのにも苦労するような彼女を受け入れてくれる世界は、宇宙のどこにあるのだろう。
　牛乳を飲むイリナの喉のどが、こくこくと上下する。

レフは歯が折れそうなほどに凍ったライ麦パンを齧かじりながら、何を話そうと考える。だが、話したいことが多すぎて、何から話していいのかわからない。

ほとんど会話もないままパンや煮凝りを食べ終え、ひとつ残ったチョコレートをふたりで分けて食べる。口の中に、濃厚な匂いと甘さがふわりと広がる。

寒々しく星が輝く夜空に、青緑色の幻想的なオーロラがぼんやりと浮き上がる。

イリナは思いを馳せるように、静かに目を閉じる。

「オーロラ……宇宙からも見えたの。地球を覆おおうカーテンみたいだった……」

肌を凍らせるような夜風にイリナの黒い髪がなびく。

冴さえ冴ざえとした月光を受けて、首飾りの宝石ルーンヌイ・カーミエニが青く透明に輝く。

舌にのせていたチョコレートは小さくなって溶けていき、かすかな甘みを残して消えた。

月は天高く上がり、刻一刻と別れのときが近づく。

何でもいいから話そうとレフがイリナに声をかけようとしたとき、イリナがすっと目を開けて、小さく口を開いた。

「あの……」

「ん？」

「……私の、病院の検査が終わったあとのこと……」

「うん。設計局だろ？」

「……えっと」

イリナは言い澱よどみ、視線を落として、凍った湖面に転がっている松まつ毬かさをじっと見つめる。

「……私が設計に関わったロケットで、あなたが月へ飛んだら、素敵

ね」
「そうだな……」
　夜空を見上げたレフだが、ふと、うつむいているイリナが気になって、尋たずねる。
「……設計局って、本当だよな？」
　ハッと、イリナは顔を上げた。
「あ、いや、君を疑ってるわけじゃなくて、共和国の上層部は、『舌の上は蜂はち蜜みつ』っていう、甘い嘘うそを吐つく伝統があるからさ」
　苦笑交じりにレフが言うと、イリナは真っ直ぐにレフを見据える。
「本当よ」
「ならいいんだ。ごめん」
「私のことはいいから、あなたは絶対、一番最初の宇宙飛行士になりなさいよ」
「もちろん。血を吸われて木ミ乃イ伊ラになるのはゴメンだ」
「うん……」
　会話が途切れ、再び沈黙が落ちる。
　だが、レフは話す内容に詰まったわけではない。
　自分の発した言葉で、突如、信じがたい願望が沸き上がり、肌がぞわっと粟あわ立った。
　──イリナに血を吸われたい。
　頭では理解できないが、本能が求めている。
　別れる前に、最後にもう一度だけ、あの甘美な痛みを味わいたい。
　だが、そんなことを言えるわけがない。この前は、体調不良という事情があったから、血を与えたのだ。
　イリナを横目に盗み見る。濡ぬれている柔らかそうな唇から、わずかに牙きばが覗のぞいている。
　──腕ではなくて、首筋を噛かんでほしい。

どくどくと鼓動が高鳴り、心臓が血を全身に送る。身体からだも頭も火ほ照てり、ぼんやりとイリナの整った横顔に見み惚とれていると、イリナがふっと振り向いた。

「！」

緋ひ色いろに染まった瞳ひとみと視線がぶつかり、思わず目を逸そらす。

イリナも慌あわてたように、目を逸らした。

もうこの先会えないかもしれないなら、言ってしまおうか。

そう思ったときには、彼女の名を声に出していた。

「イリナ……」

呼びかけられた彼女は、妖しく潤うるんだ瞳をレフに向ける。頬ほおは朱しゆに染まり、いつもの彼女よりも大人びて見える。

目を逸らすことなく、見つめ合う。

レフの視線が、イリナの可か愛わいらしい口元に落ちる。

イリナは少しだけ口を開き、桃色の舌で、牙をちろっと舐なめる。

白く輝く息が漏もれる。

レフの全身の血管が脈動する。

いいのか。本当に。

イリナに向き直り、彼女の瞳に吸い込まれるように、少しだけ、身体を寄せる。その拍ひよう子しに、ベンチに置いていた彼女の手に、レフの指先が少し触れた。イリナはぴくっと身体を揺する。

「……イリナ、もう一度……」

これ以上口にしたら、引き返せなくなる気がする。

だが、もう――

そのとき、イリナの瞳がハッと大きく開かれ、動揺が走った。表情からは艶つやめかしさが一瞬にして消えている。

イリナは素早く立ち上がり、闇やみの向こうを見たまま言う。

「あなたの仲間が来るわ……」
「え？」
　レフも慌てて立ち上がるが、暗くて何も見えない。夜目の利くイリナだから確認できるのだろう。
「私と一緒にいるの、見られたくないでしょ」
　イリナの瞳が、儚はかなげに揺れる。
「ごめんなさい、吸血鬼で……」
　いつも気高く振る舞っていたイリナが吐露した苦しみが、レフの胸を突いた。
「君は何も悪くない。誇っていいんだ」
「でも……」
　今にも泣きそうなイリナを見て、レフは気持ちを抑えきれなかった。イリナの肩に手を回し、そのまま抱き寄せる。
「あっ……」
　ビクッとしたイリナだが、すぐに身を預けるようにレフの胸元をぎゅっと掴つかんだ。雪原で宇宙服の上から抱き締めたときより、彼女の線の細さがはっきりとわかる。レフは、たったひとりで闘う彼女に何もしてやれないことが、ただ悔しい。
「だめ、来る……」
　飛び退くようにイリナは身体からだを離すと、潤うるんだ瞳ひとみでレフを見つめる。
「私は大丈夫だから、頑張ってね。あなたが宇宙飛行士になったら、また、会おうね……」
「ああ、約束する。君も、頑張れよ」
　レフは真っ直ぐに見つめ返し、別れの哀しみを抑えて微ほほ笑えむ。
「うん……じゃあ、またね」
　涙を堪こらえるような震える声でイリナは言うと、巾着袋を取り、音

もなく走り去った。
　しばらくすると、仲間たちの声が後ろから聞こえてきた。
「あれ、レフ……何してるんだ？」
　レフは振り向いて、何事もなかったように応じる。
「いやぁ、店がどこも開いてなくて……一緒にパレード見に行けばよかったよ」
　イリナを抱き締めた柔らかな感触が、レフの身体からだにずっと残っていた。

緋の瞳　Очи　индиго

サングラードの二月の空は、薄墨を塗りこめたように重い。

市の中央にある『城塞区画ネグリン』の近く、九階建ての巨大な白亜の建物──国立軍科学病院にイリナが検査入院して、二週間が経った。

病院の最上階、要人が極秘入院に使う立派な部屋にイリナは入っている。テレビや冷蔵庫、空調機器を完備。寝台代わりの棺かん桶おけも真新しい最上級品。狭苦しい独房と比べれば天と地の差だ。これらはストレスを与えないための配慮なのだが、イリナの身体には生体データの計測パッドが貼り付けられ、扉の外では〔運送屋〕が警護しており、籠かごの中の鳥であることには違いない。

検査自体は『ライカ44』と大きく変わらず、詳細な健康診断を毎日続けている。検査担当官たちからは「イリナ」ではなく「Ｎ44」と呼ばれ、完全に実験体扱いだった。

検査中、アーニャは肩身を狭くしている。彼女は科学者として呼ばれたのではなく、単なる帯同者扱いだった。それでも、イリナにとっては、精神安定剤のような大切な存在だ。

移送の前夜、レフと別れたイリナはひとりで独房に戻ると、不安が爆発して号泣してしまった。彼のために『技師になる』という嘘うそを吐つきとおしたが、心は悲鳴をあげていた。

──もし、私が廃棄処分されるって決まったら、助けて。

──私を連れて、他の国に亡命して。

──ロケットを乗っ取って、月に連れてって。

だが、そんなことを言っても困らせるだけだと思い、イリナは言葉を飲んだ。

もう二度と会えないかと思うと胸が張り裂けそうで、彼に触れたくなって、抱きしめてほしくて、そして、彼の血を吸いたくなってしまった。手と手が触れたとき、ぞくっとなり、全身の細胞に染み渡っていた彼の血が、どうしようもなく彼を求めた。

あのとき、もしかしたら、レフも受け入れてくれようとしていたのかもしれない。

イリナはそう感じたが、候補生たちの姿が視界に入った途端、夢から醒さめるように、現実に引きもどされた。そして、自分が吸血鬼であることに罪悪感を覚え、「ごめんなさい」などという思いもよらぬ言葉が口をついて出た。彼が抱き締めてくれたのは、たぶん、自分があまりにも憐れな顔をしていたからだ。

でも、きっとレフは、自分が設計局で働くのだと思っている。それで良かったのだと、自分を慰なぐさめるしかなかった。

そして、日付けが変わる前にパレード見物から戻ってきたアーニャの前で、イリナは「肉の煮凝りホロデーツ、美お味いしいって褒ほめられたわ。ありがとう」と得意げに微ほほ笑えんでみせた。だが、目が泣き腫はれて真っ赤だったので、泣いていたと気づかれたに違いなかった。

だがアーニャは「お役に立ててなによりです」とにっこりすると、パレード見物の土産話を始めて、レフとの別れについては、いっさい訊きいてこなかった。

彼女の優しい気遣いに、イリナはただ感謝している。泣き虫を高所恐怖症のように克服したいなと、強く思いながら。

時計塔が午後五時の鐘を鳴らすと、イリナはアーニャと日課の散歩に出る。

一日で唯一の外出とはいえ、健康維持のためであり、自由はない。コースは「『城塞区画ネグリン』の外周」と定められ、私服に身を包ん

だ〔運送屋〕が目を光らせている。
　また、イリナの服装も病院が用意したものに決められていた。国営百貨店で購入できる毛皮の外がい套とうに、格子柄のワンピース。これには「一般国民」として街に溶け込ませる意図がある。共和国の人間に仕立てられることがイリナは嫌だったが、下着だけで生活するわけにもいかないので、仕方なく着ている。
　そんな透明の首輪をつけられた状況下、イリナとアーニャは、『美しの大広場』を横断する。
　二〇万人を収容可能な大広場は、市民や観光客が行き交っている。
　無線鉄塔の拡声器からは、耳障ざわりな国威発揚の放送が流れる。
　建国者の遺体が安置された石造りの霊れい廟びようが、誇らしげに鎮座する。
　歴史博物館は国旗をはためかせて祖国を誇る。
　街は『ライカ44』よりも華やかで開放的だが、イリナにとっては息苦しかった。
　広場を抜けると、石炭の匂いが漂う、蒸気船が煙をあげて走る運河に出る。
　樅もみの木の葉が風にそよぎ、水面を鴨がゆったりと泳ぐ。
　イリナはここの風景が、サングラードのなかで唯一気に入っていた。
「ふぅ……」
　川岸のベンチに腰かけて一休みすると、アーニャが病院内で聞きかじったという話を始める。
「連合王国は実験飛行で、人間の代わりにチンパンジーを打ち上げたそうです」
　一月三〇日、連合王国の有人飛行計画『プロジェクト・ヘルメス』の一環として、実験番号「＃65」のチンパンジーがロケットで打ち上げられた。機器の不具合で死の危険にさらされながらも、無事に帰還。チン

パンジーには「ＳＡＭ」という人間名が与えられ、世界中から称賛された。チンパンジーは犬よりも遥はるかに人間に近いが、当然「動物」の括くくりなので、「史上初の宇宙飛行士」と報道する機関はひとつもない。

　イリナと同じ実験飛行をしたのがチンパンジーで、公表されて称賛を浴びている。

　イリナは「Ｎ44」と呼ばれるのに、チンパンジーは名前で呼ばれる。

　その事実にイリナは複雑な思いを抱くが、自分をチンパンジーと比べていることに気づいて、胸がちくっと痛んだ。

　情けない気持ちをアーニャに悟られないように、イリナは普通に話をする。

「あっちは、『新血種族ダンピール』を実験に使ったりしないのね？」

「イリニャンさんは、あちらの内情を全然知らないんですか」

　世間から隔絶されて生きてきたイリナは、社会情勢について疎い。

「そういう血筋がいるのは知ってるけど。その程度」

「共和国とは違いますからね。もし実験に使ったら、新血種族が暴動を起こすと思いますよ」

　──人間と吸血鬼ノスフエラトウの血が流れる『新血種族』。共和国連邦内には存在しないこの種族は、連合王国で独自の繁栄を遂げていた。共和国の純血種とは歴史的に関係が断絶しているため、イリナとはまったくつながりはない。

　一六世紀半ば、教会によって吸血鬼が「黒死病の原因」として迫害されたとき、一〇〇名ほどの吸血鬼が船で逃亡を図り、アーナック大陸へ渡った。そして、異なる宗教を信じていた現地の人間と結ばれ、子を産んだ。

　代を重ねるごとに耐寒性や日光に弱いなどの特性は薄れたが、尖とがった耳、鋭するどい牙きば、赤い目という外見的特徴は残った。

だが、アーナック大陸が理想郷だったわけではなく、数で勝るアーナック人が新血種族を『汚れた血』と腐し、奴隷扱いした。

こうして数百年に亘わたり虐しいたげられてきた新血種族だったが、居住地を拡大して力を持ち始めるとアーナック人とのあいだに対立が生まれ、幾度となく抗争が繰り返された。

そして、近年はさらに関係が悪化し、市民同士の小競り合いが常態化していた。

今年の頭、新年を祝おうとした新血種族の学生三名が酒場に「入店拒否」された。抗議のために彼らが店先に座り込んだところ、店内にいた酔客に集団で暴行を受け、死亡。これをきっかけに各地で衝突が起き、王国内で大きな問題に発展していた。

「アーナックの宇宙開発の現場に、多少は新血種族がいるみたいですが、『七人の飛行士』に選ばれていないように、扱いは低いみたいです」

「そうなのね……」

ふと、イリナは考える。

もし連合王国で生まれていたらどうなっていただろう？

間違いなく宇宙には行けなかっただろうし、レフに会うこともなかっただろう。

―レフ。

忘れようとしても、ことあるごとに思い出して、一緒に過ごした季節が脳裏を駆け巡る。訓練は順調だろうかと想像し、嘘うそを吐ついて騙だましたことに少しの罪悪感を覚える。

「……」

イリナは泣きそうになり、顔を少し上に向ける。

運河の上空、薄れゆく夕闇やみに、淡い月が見えた。

「っ……」

イリナは、反射的に目を逸そらす。

月を見ると息が詰まり、胸がかきむしられる。

大事にしていた首飾りは、身に着けると首が絞められるように苦しくなって、病室の棚に隠した。

イリナはいつしか、月の詩を詠うたわなくなっていた。

第五章　冷たい春

藍の瞳　Очи　индиго

「史上初の宇宙飛行士に抜擢されるのは誰か？」

『ミェチタ計画』に関わる者のあいだで、毎日のように話題になっていた。

そして、二月二〇日現在。

レフ、ミハイル、ローザの三名は特別課程で訓練を受けているが、選考方法はいっさい知らされておらず、いつ、どこで、どのように発表されるかも教えられていなかった。

さらに、打ち上げ日時も「春」としか伝えられていない。

五里霧中の状況で、レフは真ま面じ目めに訓練を続けている。

休憩時間や寝る前に思い出すのは、イリナとの別れだった。

時間が経って冷静になると、血を吸われたいと思った自分に驚き、首筋を噛かんでほしいと口にしなくて本当に良かったと思う。なにより、勢いで抱き締めてしまったが、嫌われなかっただろうか。思い出すだけで、手のひらに汗が滲み出る。

そんなことを考えつつも、彼女が検査を頑張り、技師を目指しているのだから、自分も負けられないぞと気合いを入れる。今はミハイルとローザに次ぐ三番手の評価だが、「宇宙飛行士になって再会しよう」という彼女の言葉を胸に刻み、ひたむきに宇宙を目指す。

強力なライバルであるミハイルは、すべての訓練科目を完璧にこなし、リーダーシップを発揮して、自身の優秀さをヴィクトール中将に見せつける。彼が選ばれたとしても、誰も文句を言えない雰囲気を作り出していた。じつのところ、ヴィクトール中将が決定権を持っているかは

不明だったが、他にアピールする相手がいないのだ。
　一方で、キャビンに重量制限のある現状では、体重が軽いローザが有利だという声も聞こえた。彼女には『サングラードの白しろ薔ば薇ら』という異名があるように、人を惹ひきつける美び貌ぼうと華麗さもあった。
　しかし、「女性が史上初として選ばれることはありえない」とも噂うわさされている。
　共和国は『男女平等』を掲げ、他国に比べれば女性の地位は高かったが、それでも男性中心の軍部で第一号に選ばれるのは考えにくい。
　その不平等さについてはローザも重々承知のはずだが、ヴィクトール中将に対して媚びるような真ま似ねはしない。彼女は周囲を拒絶すらするように、厳しく身を持する。食事のときでもピリピリしており、イリナと同じくらい誰に対しても強気で接するが、イリナと違う点は、まったく隙すきを見せないところだった。
「美人だけど、恋人にはできないタイプだよな……」
　予備人員のひとりがつぶやくと、
「何か言った？」
　ローザが氷の視線を突き刺してきた。
　そのように、ふたりが一位の座を争って躍起になる一方で、レフは補欠のときと同じように笑顔を絶やさず、張り切って訓練をこなし、予備人員に向けてくだらない冗談を飛ばす。
「レフは全然変わらないな……」
　落選時はレフを妬ねたんでいた彼らも、わけ隔てない態度や頑張りを見て、次第に応援し始めていた。

　飛行計画の訓練時、レフたち三名の前に、『ノスフェラトゥ計画』の航行日誌が差し出された。タイプライターで打ち直した報告書ではな

く、飛行中にイリナが記した直筆の日誌の複写品だ。
　レフは宝物に触れるように、そっと開く。
「あ……」
　右上がりの丸っこい文字を見ると、イリナの教師役を務めた座学が思い出された。教師役といっても、彼女がレフに質問してくることは皆無で、彼女は黙って本を読み、ノートにせっせと書き写していた。
　会えないほど遠く離れても、心の片隅にはいつもイリナがいて、今では逆に、彼女が宇宙開発に先せん鞭べんをつけた先生の立場になっていた。
　レフは航行日誌に目を通すが、これまでにイリナから訊きいた話と同じで、とくに新しい発見はなかった。
　だが、他のふたりには新鮮なようだ。
　ミハイルは顎あごに手を当て、真剣に頷うなずきながら熟読する。ローザは不愉快そうに眉み間けんに皺しわを寄せ、溜ため息いき混じりながらもじっくり読みふける。
　そして、この日誌は、訓練に大きな影響を及ぼすことになった。
　イリナは無重力空間に到達する前に気を失ってしまったが、本番に搭乗する飛行士は、最初から最後まで意識を保たもたなければならない。計測データによれば、ロケット上昇時の脈拍は異常値を示しており、小さな身体からだに相当な負荷がかかったと予想された。
　その負荷について、イリナはこのように中央委員会で発言していた。
『サガレヴィッチの訓練は最悪だったけど、役に立ってたんじゃないかしら』
　ゆえに、訓練ではこれまで以上に負荷をかけ、身体を虐いじめ抜くことが決定された。強化訓練には軍医が付き添い、細心の注意が払われるが、もはや異常な内容だった。
「時速一〇〇キロが出る特殊な装置に座り、石の壁に激突する」

「え？」
　レフは耳を疑ったが、その衝撃は打ち上げ時にかかる力に等しいということで、本当に実行された。
「ぐぅっ！」
　加速で目がぎゅっと押され、頬ほおや耳、顔全体が潰つぶれる。壁に衝突した瞬間、席から身体からだが瞬間的に飛び、骨が砕けるような衝撃が走る。
　ローザの美しい顔も醜く歪ゆがむ。
「っ……！」
　男性に比べて華きや奢しやな彼女にとっては拷ごう問もんだが、それでも必死に耐える。
　このような危険すぎる訓練は、勿もち論ろん、検証もなしにいきなり飛行士にやらせたわけではない。
　レフたちとは別に、軍人から選ばれた数十名の『貢献者テスター』と呼ばれる人々がいた。
　彼らは「宇宙開発に参加できる」という甘い言葉で勧誘され、医療研究所で秘密裏に実験台となっていた。何百種類もの実験で人間の限界に挑戦させられ、身体を壊す者も多くいたが、祖国のために身を捧ささげていた。
　レフは『貢献者』の存在を知ったときには心を痛めたが、彼らの情熱を背負うことも飛行士の役目だと思い至った。
　この衝突訓練以外にも、人体実験のような訓練を次々とこなす。
『無重力エレベーター』。高層階からエレベーターを落下させ、特殊なクッションで受け止める。たった数秒間浮くために、とんでもなく大がかりな仕掛けが作られた。
『騒音風呂』。巨大なスピーカーを備えた密室に閉じ込められ、録音したロケットの発射音を数百倍に大きくし、耳を手で押さえても防げない

騒音地じ獄ごくに一時間浸かる。
　何の役に立つのだろうと疑問を抱いても、レフは笑顔で乗り越える。
「いやぁ……鍛えられた気がするよ」
　だが、ミハイルは違った。
「馬鹿げている」
　訓練をこなしたあと、現場の担当技師に文句をこぼす。
　ミハイルの意見は正論だ。意味不明な訓練で身体や精神を壊せば元も子もないのだが、それを恐れて加減すれば『勇気なし』と減点される可能性がある。
「実験体は気を失ったかもしれないが、俺は平気だ」
　自信過剰とも言えるミハイルの高圧的な態度は、家柄の良いエリート特有のものだった。辺へん鄙ぴな農村育ちのレフは、彼のような人間があまり得意ではなかったが、「そう言わずに頑張ろう」と前向きに声をかける。
　皆がぐったりして食欲がないときも、レフは冗談を言って和なごませる。
「痩やせたい人に体験させてみたらどうかな？　行列ができるかもよ？　あはは」
　現場の技師たちは、レフの笑顔にホッとした様子を見せていた。彼らも飛行士と同じく未知への挑戦者であり、すべてが探り探りなのだ。
　一方で、楽天家なレフに対して呆あきれるミハイル。
「よく笑っていられるな……」
「宇宙に行けるかと思うと、わくわくするんだ」
「君が飛べるといつ決まったんだ」
　冷めた顔でミハイルがばっさり斬きる。
「うっ……でも、想像するのは自由だろ？」
　ローザはふたりの会話に加わらず、技師と言葉を交わすこともなく、

壁に身体からだを預けて、溜ため息いき交じりに腕を組んでいる。

三月に入ると、レフたち三名の訓練は、より宇宙飛行に特化した。

これまではジャージで行っていた遠心加速器も、宇宙服を着用し、予測される最大値の荷重をかけられる。

飲食も宇宙服姿のままだ。動きにくくて食べづらいが、宇宙船内で星や地球を見ながら食べる光景を想像するとレフは苦手だった宇宙食さえも美お味いしく感じられた。もっとも、味そのものが変わったわけではないので、ミハイルとローザは、相変わらず不ま味ずそうに食べている。

さらに、搭乗するキャビンの実物模型を使った実践指導が始まった。

座席に着くだけで、レフの胸が高鳴る。

「これで、飛ぶんだ……」

イリナもこれに乗ったのかと、感慨深く計器を眺める。瞼まぶたを閉じるだけで、星ほし屑くずが浮かぶようだった。

飛行士気分に浸るのもほどほどに、担当技師から飛行中にこなす課題や、無線交信の手順を教えられる。船室の機密性が失われた場合などの事故への対応は、身体に覚えさせる。

すべての操作はイリナのときと同様、全自動操縦になっていたが、万が一の場合を考えて、手動制御の方法も教えられた。

ただし、手動に切り替えるための暗証番号は「飛行士には秘密」。ヴィクトール中将は「緊急時に無線で伝える」と言った。

秘密主義にも程がある。

それに抵抗したのは、ミハイルだった。

「無線が使えない状態に陥ったら、暗証番号がわからないじゃないですか」

ヴィクトール中将は頑として首を縦に振らない。

「技術部の判断だ。宇宙空間で錯乱して勝手に手動制御にされるのが一番困るそうだ。イリナ・ルミネスクのときにも伝えていない」
「……失礼しました」
　素直に引き下がったミハイルだが、うんざりと息を吐く。終わりの見えない訓練を続ければ続けるほど、現場の空気は重くなっていった。
『騒音風呂』から足元をふらつかせて出てきたローザは、ぐったりと座り込み、頭痛を堪こらえているように額に手を当てる。見るからに疲労の色が濃く、唇はかさかさで、絹のように美しかった肌や髪に艶つやがなくなっている。
　心配になったレフは、彼女に水の入ったコップを差し出す。
「飲む？　風呂上がりの一杯」
　するとローザは苛いら立だったように、レフの手を払った。
「あっ……」
　コップは床に転がり、水が零こぼれる。
　ローザは無言でレフを睨にらみつける。その鋭するどい瞳ひとみには、闘争の炎が静かにゆらめいていた。

　一方で、開発現場で大きな進展があった。
　三月九日。
　アルビナール宇宙基地で、本番を想定したロケット打ち上げ実験が行われた。
　打ち上げられたのは、『ノスフェラトゥ計画』のデータをもとに改良された『ミェチタ３ＫＡ』。犬やマネキンを乗せて地球を一周し、見事に帰還を果たした。
　指揮を執っていたコローヴィンは拳こぶしを突き上げ、叫んだ。
「もう一度成功すれば、本番だ！」
　そして、成功の一報を聞いたゲルギエフは、地方農業に関する会議

で、未開拓地の開墾について述べたあと、力を込めて言い放った。
「近々、我々は宇宙を開拓するでしょう！」
　繰り返される動物打ち上げ実験で、反対派から『共和国立宇宙動物園』と揶揄されることもあったが、その実験も、いよいよ終わりを告つげようとしていた。

　三月半ばになると、共和国北部から霜の精マロースが去り、『ライカ44』でも沈じん丁ちよう花げが春の香りを漂わせ、凍りついていた樹氷が静かに雫しずくを落とし始める。
　季節が移り替わり、実験が成功しても、レフたちの厳しい訓練は変わらずに続く。
　笑顔を保たもっているレフにも疲労は蓄積しており、休日でも遊ぶ気力はなく、酒が飲めないのでジャズバーにも行っていない。
　体力も気力も限界。
　心の支えは、宇宙への想い、そしてイリナと交わした約束だった。
　そんな中、訓練の手は緩ゆるめられるどころか、本番を想定した難易度に引き上げられた。
　パラシュート降下では、宇宙服を着て、身体からだを動かしにくい状態での帰還を目指す。

　訓練機に乗り込んだレフたち三名は、夕焼けに染まった湿地帯の上空七〇〇〇メートルの地点にいた。春の嵐のような強風が吹いており、降下条件は決して良くない。
　飛ぶ順番は、ミハイル、ローザ、そして最後にレフ。
　宇宙服は重く、いつもの綿のフライトジャケットとは勝手が違う。降下には自信のあるレフだったが、目標地点に到達できるか、一抹の不安

がある。
　降下口で飛び出しの体勢を取るミハイル。
「では、目標地点で待つ。三、二、一、〇」
　ミハイルは言葉少なに、ためらいもなく飛び降りた。
　続いてローザが降下口に向かうが、どこかふらふらしている。頬ほおに血の気がなく、真っ青だ。前々から酷ひどく疲ひ弊へいしているようだったが、今日はとくに体調が悪く見える。
　レフはそんな彼女を心配し、どうせ反論されるだろうと思いつつ、肩を叩たたく。
「今日は休んだ方がいいんじゃない？」
「馬鹿言わないで」
　いつもより声に張りのないローザは、充血した目でレフを鋭するどく睨にらみ―
「三、二、一、〇……！」
　夕空へ身体を投げた。
「大丈夫か……？」
　一歩間違えば大怪け我がをするこの訓練で、無事に降りられるだろうか。
　嫌な胸騒ぎがする。
　だが、降下口から吹き込む冷気に頬を撫なでられると、気持ちがしゃんとした。
「人の心配してる場合じゃないな」
　レフはローザの飛び降りから一定の間を置き、勢いよく降下口を飛び出す。
　冷たい空気を切り裂き、しばらく自由落下を続けると、眼下でローザのパラシュートの主傘が開くのが見えた。
「よかった……」

ひとまず胸をなで下ろすレフ。
自分の降下に集中しようとパラシュートを開き、目標地点へと向かう。
宇宙服は手足が動かしにくく、強風が吹いていることもあり、なかなか降下が安定しない。
「ん……？」
ローザのパラシュートが、風に流されているように見えた。
いずれ立て直すだろうと思い、あまり気にしなかったが、ローザはどんどん目標地点へのルートから逸それていく。
「あれ？」
レフは一瞬、自分が目標地点を勘違いしているのかと疑ったが、遥はるか下を滑空するミハイルは、レフの知っている目標地点へ向かっている。
つまり、彼女の身に何か起きた可能性がある。
だが、上空からではパラシュートの傘が邪魔して、彼女の顔は見えない。
どうすべきか迷っているあいだにも、ローザは流されていく。
このままでは、どこへ着地するかわからない。いや、無事に着地できるかも不明だ。
「くそっ」
レフは目標地点への降下を断念し、ローザを追う。
だが、空中では地上のように上う手まく追うことができない。まして、今日は慣れない宇宙服で、さらに強風が煽あおってくる。
地上が迫る中、なんとかローザと同じ高さに下がる。
「おい、ローザ！」
レフの呼びかけに、ローザはかすかに顔を動かしたが、返事はない。パラシュートを上手く制御できていないように感じる。

接近しすぎるとパラシュートが絡まる恐れがあるため、ある程度の距離を開けねばならず、彼女のパラシュートを直接操作するような真ま似ねは難しい。

レフは地上に目を向ける。

地上まで、おそらく一〇〇〇メートルを切った。

進行方向には、大河であるボリク川が湿地帯を縫ぬうように流れており、その川面には無数の氷が浮かんでいる。

もし、極寒の大河のど真ん中にでも着水したら、命に関わる。

どうか着水は避けてくれとレフは願うが、ローザのパラシュートは大河に吸い寄せられるようにふらふらと落ちていく。

もう見ていられない。

彼女を救うには、パラシュートが絡まっても大丈夫なほどに地表が接近したところで、墜落覚悟で強引にでも大河の外に突き出すしかない。幸い、宇宙服は通常のフライトジャケットよりも強きよう靭じんで、頭部は頑丈なヘルメットで守られている。

不時着の衝撃を和らげられるような場所を探すと、川沿いに低木が生い茂っている一帯がある。あそこならば、運が良ければ、切り傷で済むかもしれない。

大河が目の前に迫る。

「やるしかない……！」

レフは覚悟を決め、パラシュートの紐ひもを操り、体当たりするような勢いでローザに身体からだを寄せる。互いのパラシュートの傘さん体たいがぶつかる。下腹部がひゅっとなるような恐怖にレフは襲われる。ローザは真っ青な顔でレフに助けを訴える。

「あ、あ……」

「ヘルメットの前を閉めろ！　受け身を取れ！」

レフは自分のヘルメットのカバーを閉じ、ローザのパラシュートの紐

ひもを握にぎり、ねじるように強引に、大河の外へ向けて引っ張る。パラシュートは傾き、陸地へ向けて旋回する。目いっぱい減速をかける。傘さん体たいは絡みながらも膨ふくらみ、速度を落とし、地面への激突は免れる──

「うおお！」

　狙いどおり、低木の茂みに突っ込む。受け身を取った身体からだに強い衝撃が走り、視界が一瞬真っ暗になる。

「……痛ってぇ」

　地面に投げ出されるように着地したレフは、両手両足が動くことを確認し、大きな息を吐いた。

　身体を起こすと、すぐ横にローザが倒れている。

「ローザ！」

　レフは駆け寄り、ローザの前に跪ひざまずく。

「怪け我がしてないか？　大丈夫か？」

「……だ、だいじょうぶ……」

　顔面蒼白のローザはゆっくり身体を起こすと、自分で自分を抱きしめるように両腕を回して縮ちぢこまり、がたがたと震え始めた。瞳ひとみは潤うるみ、長い睫まつ毛げに、涙の珠がついている。

「うっ……うう……」

　これほどまでに怯おびえた彼女を、レフは初めて見た。

　着地から十数分後にヘリコプターで回収されたレフとローザは、その機内でヴィクトール中将に「馬鹿者！　死ぬ気か！」と物凄すごい剣幕でどやされた。たしかにレフは自己判断で無茶をしたので、怒鳴られても何も言えずしゅんとなるが、そんなレフの肩をヴィクトール中将がバシッと痛いほどに強く叩たたいた。

「しかし……レフ、よくやった。危険を顧みずに仲間を助けたことは、

勲章ものだ！」
「あ、ありがとうございます！」
　ヴィクトール中将は大戦時に参加したという捕虜救出作戦の武勇伝を誇らしげに語り、額の傷を触って「これは、そのときに付いたものだ」などと話す。レフが「あ、はい」と相あい槌づちを打つ傍かたわらで、ローザは毛布を被かぶってうつむいていた。

『ライカ44』の診療所で精密検査を受けたふたりは、「三日で治る軽度の打撲。訓練を継続することに問題ない」と湿布を渡された。また、体調不良だったローザは「極度の疲労」と診断され、宿舎での三日間の休養を命じられた。
　診療所を出たふたりは、街がい燈とうの灯った白しら樺かば並木を宿舎へ向かって歩く。
　すっかり意気消沈しているローザに、レフは明るく話しかける。
「よかったな、大したことなくて」
　ローザは決まり悪そうに答える。
「……どうして危険な真ま似ねをしてまで、私を助けたの」
「どうしてって……それは答えようがないよ。目の前で仲間が死ぬかもしれないってときに、あれこれ考えてる余裕なんてない」
「仲間ね……」
　独り言のように呟くと、ローザは顔を上げてレフを見る。
「ねえ。私、以前あなたに言ったでしょ。『舌の上は蜂はち蜜みつ、心の中は氷』って」
「うん」
「訂正する。『舌も心も蜂蜜』。ジャムと砂糖も加えたいくらい」
「甘くて胸焼けしそうだ」
　レフは手で喉のどもとを押さえ、わざとらしく舌を突き出す。

「あなた相手に意地を張っても、意味ないわね」
　苦笑を浮かべたローザは立ち止まり、道脇に咲く沈じん丁ちょう花げをそっと撫なでる。
「去年の今頃、私たちがこの街に来たとき、咲いていたの覚えてる？」
「いや……」
　レフは覚えていないどころか、その花の名前もわからない。そもそも花に興味がなく、イリナと雪原で話したとき、彼女が星々を喩たとえた『茴香芹チヤービル』もさっぱり思い浮かばなかった。図書館で調べて、やっと星型の花だとわかったくらいだ。
　ローザは花びらを優しく触りながら、寂しげに自じ嘲ちようする。
「ふふっ……一年前は、『来年咲くまでには、宇宙に行けるかしら』なんて期待した」
　花に想いを重ねた候補生など、ローザ以外にいないだろう。彼女とは一年間訓練をともにしたが、レフは初めて彼女に女性らしい繊細さを感じた。
　道のところどころに溜まった雪泥を避けながらしばらく歩き、炭酸水の自動販売機の前に差し掛かる。
「俺、一杯飲んでくよ」
　降下しながら何度も叫んだせいで、レフは喉がからからだった。
　レフが財さい布ふを探っていると、横からローザが自動販売機に銅貨を入れた。
「ん？　先に買う？」
　戸と惑まどうレフに、ローザはボソッと言う。
「おごり」
「えっ!?」
　思わぬ行動に驚いたレフがローザをまじまじと見ると、彼女は口を曲げた。

「お礼。他に何ができるか、また考えておくけど……」
「いいよ。この一杯だけで」
　炭酸水の購入ボタンを押すレフ。
「あのさ、私の命は、炭酸水一杯分ってこと？」
　不満そうなローザに、レフは悪戯いたずらっぽく笑いかける。
「本当は蒸留酒ジーズニが良かったんだけど」
「……『人生』だけに？」
「正解」
　レフが得意げに親指を立てると、ローザはふふっと鼻で笑い、「くだらない」と呟いた。
　そしてローザは自分の炭酸水も買うと、ベンチに腰かける。
「はぁ、疲れた」
　そう言って軽く溜め息いきを吐ついたローザは、上目づかいでレフをちらりと見た。
　座れということかとレフは感じ、彼女の横に少し距離を置いて座る。
　着席を促したローザだが、何もしゃべらず、コップを両手で握にぎっている。
　自動販売機が、唸うなるような低い音を出す。
　コップの中で、炭酸水の泡がぴちぴちと弾ける。
「―私、落選ね」
　唐突に、彼女は言った。驚いてレフが彼女を見ると、コップを持つ手が、かすかに震えている。
「あなたが助けてくれなかったら、私、死んでたかもしれない……。身体からだが全然動かなくて、もう駄だ目めだと思った……」
　ローザは物憂げに目を伏せ、炭酸水をこくりと飲む。そして、ひとつ息を吐くと、やや吹っ切れたように話す。
「最終候補に残ってから、正直、ずっと無理してた。あなたやミハイル

よりも圧倒的な成績を収めないと、女の私が『第一号』に選ばれるわけないから。上層部には、男が飛んだ次に『第二号』として女を、という意図があるんでしょうけど」

　それが大勢の意見だったが、レフは違った。

「……俺は、宇宙の前では、男も女も関係ないと思ってるけど」

　するとローザは、手を振って否定する。

「嘘うそ。今のは負けおしみ」

「ん？」

「認めたくないけど、私はあなたより、体力でも精神力でも劣ってる。それで、競争相手であるあなたに心配されたことが悔しくて……。騒音風呂のあと、コップを払ったりしてしまって……悪かったわ」

　レフは、あのときの、憎しみを込めたような彼女の瞳ひとみを思い出した。

　ローザは袖そでをまくると、右腕をレフに見せる。

「いくらトレーニングしても、体質なのか、これ以上筋肉がつかないの」

　きめが細かい白い肌に、血管が浮いて見える。レフの腕に比べると、ひと回り細い。

「男女差だから、なんて言葉で片づけたくなかった」

　袖を直しながら、ローザは夜空に目を向ける。

「空軍に入りたてのころ、私は女であるというだけで見下された。だから私は、誰にも負けない操縦技術を身につけた。馬鹿にしてきた男がいたら、模擬戦で背後を取って、容赦なく翼を撃って、自尊心をズタズタにしてやった。そんなことを続けてたら、『サングラードの白しろ薔ば薇ら』なんて呼ばれ始めたんだけど、私は薔薇のように美しい花ではないわ」

　ローザは色素の薄い白金色の髪を、指先で払う。

「空軍時代は努力でエースの座を勝ち取った。でも、宇宙飛行士の訓練は、身体からだが限界だった。自分が地球に取り残される姿ばかり頭に浮かんで、全然眠れなくて、おかしくなりそうだった……」
　レフは彼女の告白を、ただ頷うなずいて聞く。
「あの吸血鬼も、相当酷ひどい目に遭ったみたいだけど、それでも宇宙を飛んで、立派な航行日誌を書いたんだから、大したものよね」
　あれだけイリナを嫌っていたローザが、彼女を認めた。それが、レフは自分のことのように嬉しい。
「彼女は本当に頑張ったよ。俺も早く彼女に追いつかないと」
　誇らしげに語ったレフは、ローザに疑いの目を向けられた。
「あなた、パレード見物に来ないで、吸血鬼と会ってたんじゃないの？」
「っ!?」
　動揺を隠せないレフを、ほとほと呆あきれたようにローザは見る。
「まったく……。あなた、宇宙の前では、男も女も、人間も吸血鬼も関係ない。そう思ってるんでしょ？」
「……ま、まあね。実際、彼女が飛んだとき、管制室は盛り上がったし。うん」
　誤ご魔ま化かしながらレフは答え、炭酸水を口に含む。
　するとローザは、声の調子を落として、言う。
「……あの子、廃棄処分されないといいわね」
「うん……それはないと、思うよ」
「そうなの？」
　設計局の件は口外厳禁だ。
「彼女を処分するなんて、ないよ」
　しかし、レフは、この件を心のどこかで疑っていた。
　イリナと別れたときの儚はかなげな瞳ひとみが、嘘うそだと言ってい

るような気がした。
　彼女も自分と同じで、嘘を吐つくのが苦手だから。
「……」
　炭酸水を口に含むと、じゅわっと、苦みが広がった。

　打ち上げ本番について何も知らされないまま時は流れ、ついに四月に入った。「打ち上げは春」という話に誰もが疑問を持ち始めた、四月四日。
　ヴィクトール中将宛に、中央委員会から極秘の通達が出た。
《有人宇宙飛行を、四月一〇日から二〇日のあいだに実施する》
　最短で一週間後に打ち上げ。
　あまりに唐突で、『ライカ44』も俄にわかに騒がしくなる。
　だが、肝心の搭乗者は決まっていない。普通なら余裕を持って搭乗者に告つげるべきだが、この国は普通ではないのだ。
　訓練センターの会議室で、眉み間けんに深く皺しわを寄せたヴィクトール中将は、レフたち『夢の六人ミエチタ・シエスチ』に向けて冷淡に言い放つ。
「飛行はオートメーションで、搭乗者は座っているだけなのだから、選出は打ち上げ直前でも問題ない」
　それはそうなのだが、さすがにどうかとレフは思う。隣に立つミハイルも、あからさまに顔を歪ゆがめる。
　いつもならばヴィクトール中将の話は報告のみで終わりなのだが、一年間の付き合いで鬼教官にも親心が生まれたのか、申し訳なさそうに額を掻かきながら付け加える。
「すまないが、搭乗者の決定について、私の意見は『参考まで』なんだ。最終結論は、アルビナールで行われる臨時委員会で決まる予定だ

が、その日時は伝えられていない」
「承知しました……」
　納得するしかないが、打ち上げが確実になったことで、レフは身が引き締まる思いだ。
「今日、午後五時、この街を発つ。急いで支度をしろ！」
　ヴィクトール中将はそう言って手を叩たいたあと、「それから……」と一度咳せき払ばらいをして、重々しい声で続ける。
「ミハイルとレフ。ふたりには、委員会より、特別な指令が来ている」
　名指しされたレフは、恐々と聞き返す。
「なんでしょうか……？」
「今から、有人宇宙飛行の公式記録として、キャビンに乗り込む姿を撮影し、出発直前の挨あい拶さつを収録する。キャビンは模型を使うが、練習ではなく、本番だ」
　公式記録なのに、偽の記録である。
　こうなってしまう原因は、セクショナリズム極まる秘密主義にあった。
　宇宙基地の格納庫は極秘施設で、軍部は政府が用意した公式カメラマンを中に入れない。だが、政府としては、記念写真や挨拶は今後の報道に必要。それならば、嘘うそでもいいから先に済ませよう。市民には嘘か真かわかるわけがない。そんな合理的だが乱暴な方法が採られた。
　そして、この記録から、ローザは外された。
　つまり、脱落だ。
　絶望して落ち込んでもおかしくないところだが、ローザは胸を張り、ヴィクトール中将を真っ直ぐに見る。
「重大事故を起こしかけたにもかかわらず、この場に出席できていること、感謝しています」
　ヴィクトール中将は不敵に口元だけで微ほほ笑えむ。

「感謝はいらない。気を緩ゆるめずに訓練を続けよ。候補者のふたりが急病や大怪け我がをする可能性もあるのだからな！」
「はい！」
　清すが々すがしく返事をするローザ。疲ひ弊へいしてくたびれていた彼女はもうおらず、きりりとした姿は白しろ薔ば薇らの名にふさわしいものだった。

撮影のために宇宙服を着たレフとミハイルが、キャビンの模型の前に立つ。そして、カメラマンの要望に応じて、今から宇宙へ出発するようなポーズを取らされる。

ミハイルが堂々と作り笑顔を浮かべるのに比べ、レフは演技をすることに抵抗があったが、何枚か写真を撮られるうちに、気持ちがふつふつと高まってきた。

続いて、打ち上げ数分前を想定した『出発の挨あい拶さつ』を録音する。

まずミハイル。

「親愛なる同胞諸君。そして各国の皆様。まもなくこの宇宙船は、私を乗せて、人類として初めて宇宙に旅立ちます。人類を代表し、この目に地球の姿を焼き付けてきましょう。それにしても、これほど大きな夢が、ほかにあるでしょうか――」

冷静な口調で詰まることなく、まるで常日頃練習していたように完璧にこなすミハイル。歓声要員として呼ばれた技師たちから拍手が飛ぶ。

次いでレフ。

打ち上げを想像し、思ったことをそのまま言葉にしていく。

「親愛なる友人の皆さん！　世界中の皆さん！　あと数分もすれば、この宇宙船は、私たちの夢をのせて飛び立ちます。ええ……、今この素晴らしい瞬間を迎えて、何を皆さんへ伝えられるでしょう。皆さんと一緒に喜びをわかち合えればと――」

早口でつっかえながらも、レフは想いを伝えた。

歓声要員からは、ミハイルのときよりも大きな拍手喝かつ采さいが沸く。自信過剰で独善的なミハイルよりも、「私たちの夢」と言うようなレフの方が、いつしか支持を集めていた。

収録が終わると、レフは緊張が少し緩ゆるみ、にこにことミハイルに

話しかける。
「挨拶なんてすると、いよいよ近づいた感じがするよね」
　昂たかぶっているレフに比べて、ミハイルは落ち着き払っている。
「君の挨拶は、軽かったんじゃないか？」
「え……そうかな」
「史上初の宇宙飛行士である重みに欠けていた気がする」
「俺は難しいことは考えず、思っていることを言葉にした。それだけさ」
「ふっ……。どちらが正しいか、間もなくわかるだろう」
　まるで自分が正しいという口ぶりのミハイル。
　宇宙飛行士として選ばれるのは、委員会が望む宇宙飛行士像に合うか合わないか──それだけのことだとレフは思ったが、自分を捻じ曲げてまで国家に合わせようという気持ちはさらさらなかった。

　午後五時、燃えるような夕暮れが『ライカ44』出入り口の鋼鉄のゲートを照らす。
　空軍のバスに乗り込むレフたち『夢の六人ミエチタ・シエスチ』を、落選した候補生や訓練センターの技師が見送る。
「期待してるぞ」「無事に戻って来いよ」
　候補生たちは、仲間を戦場へ送るかのように、複雑な感情を見せる。
　激励、妬ねたみ、好奇。そして、心配や不安。
「じゃあ、行ってくる」
　レフは、同じ夢を見ている彼らの想いを背負い、一年間を過ごした閉鎖都市をあとにする。
　射場のあるアルビナール宇宙基地へは直行せず、まずサングラードの『美しの大広場』に立ち寄り、建国者の霊れい廟びようで祈りを捧ささげる予定となっていた。

　その道中、大きな話題になったのは、連合王国の大衆紙『アーナックニューズ』がスクープした記事だった。
《共和国は極秘裏に、宇宙に人間衛星を打ち上げていた！》
　共和国の関係者は焦ったが、その内容は──
《打ち上げは、『二月四日』。飛行士の名は、『ウラジミル・スホイシン大尉』》
　完全な誤報だ。
　その日に打ち上げられたのは金星探査機だったのだが、共和国が失敗を隠いん蔽ぺいしたため、憶測で記事を書かれてしまったのだ。

　──去る二月四日。共和国は『金星探査一号機』を打ち上げたが、金星には向かわず、地球の周りをぐるぐると回ってしまい、失敗に終わった。
　政府はいつもどおり隠蔽を目もく論ろんだが、探査機は周回軌道上に残ってしまっており、爆破も不可能。そこで政府は「周回実験衛星の打ち上げに成功！」という苦しい嘘うその発表をした。だが、連合王国には「なんの実験衛星だ？」と疑われた。
　それがこのような誤報を生む原因になった。
《スホイシン飛行士は地球への帰還に失敗し、墜落。病院へ緊急搬送されたが、生死は不明。共和国政府はこの大事故を発表できず、今も隠しているのだ》
『アーナックニューズ』はデマを平気で報じる三流新聞だったが、「当社特派員がサングラードの情報筋から入手！」として大々的に報道したせいで騒ぎになり、連合王国各社も騒ぎに乗じて裏取りしないまま報じ始めたものだから、誤報は真実味をもって世界中に広まり、共和国内でも大きな話題になった。
　何せ、スホイシンは実在の人物で、本当に入院していたのだ。

勿もち論ろん、共和国政府が放置するわけはなく「でたらめだ！　スホイシンは入院しているが、自動車事故である！」と公式に非難し、〔運送屋〕は特派員を捜索。

上層部が火消しに躍起になる一方で、レフたちを含めた一般国民は国の対応に失笑していた。じつのところ、『アーナックニューズ』のデマと、真実を隠した共和国の公式発表は、どっこいどっこいだと思っている。国民紙『真実イースチナ』の記事を真実だと信じている国民は少なく、皆、陰でこっそり国民紙『嘘ローシ』と皮肉っていた。

ともかく、そんなデマが世界に広まり、国が火消しに乗り出さねばならないほど、宇宙開発競争は世界中の注目を集めている。

近い将来、その注目を浴びることになる『夢の六人ミエチタ・シエスチ』を乗せたバスは、闇やみに包まれた荒野をサングラードへひた走る。

皆が眠りについたなか、レフは車窓に流れていく星々を見て、イリナを想う。

もし彼女の実験飛行がすっぱ抜かれて世界中に報道されたら、上層部はどういう対応をするだろうと。

打ち上げを認めるのだろうか。

誤報と言い張るのか。

それとも──

「……」

答えは出ないまま、疲労困こん憊ぱいだったレフは、うつらうつらと微睡まどろみに落ちた。

サングラードはすっかり春めいている。

氷点下になることは少なくなり、日陰の雪も溶けて泥水になってい

る。
『城塞区画ネグリン』を訪れる人々は分厚い外がい套とうを脱ぎ、大広場近くの史跡公園ではジャズバンドが生演奏をして、路上のアイスクリーム売りには列ができている。
　建国者の霊れい廟びようでの参拝を終えたレフとミハイルは、仲間と一時別れ、小型の八ミリカメラを持った公式カメラマンとともに大広場を移動する。
　ふたりには、委員会から特別な指示が出されていた。
　閉鎖都市である『ライカ44』の存在を世間から隠すために、ずっとサングラードで暮らしていたかのような日常風景を撮影するのだ。
　レフは『嘘』を演じることに違和感を覚えつつも、撮影予定場所へと歩いていく。
　広場の端にある騎馬の銅像に着くと、アイスクリームを舐なめている長身の女性がいた。大きな水玉模様のワンピースに、橙だいだい色いろのジャケットを羽織っている。都会的で洗練された格好のその女性は、レフたちを見つけるとにこやかに手を振った。
「はじめまして。私はリュドミラ・ハルロヴァ。同志フョードル・ゲルギエフ第一書記の文章担当秘書官よ」
「えっ……？」
　予告されていなかった大物の登場に、公式カメラマンまでもが驚きの声を上げる。
　女性の差し出した身分証を確認すると間違いなくリュドミラ本人で、レフ自身、報道写真で彼女がゲルギエフの隣にいるのを見た記憶があった。
　なぜ、撮影場所に現れたのか。
　先日、ヴィクトール中将が「搭乗者は会合で決まる」と言ったことからすると、彼女はゲルギエフに代わって調査にきたのではと意識せざる

を得ないが──
「宇宙飛行士ね、さっき決まった。私は君たちに、それを伝えに来たの」
　あまりにも軽い調子で彼女は言った。
「決まったとは……？」
　困惑するミハイルの問いをリュドミラは「ふふん」と笑顔でかわすと、懐ふところから封筒を出し、もったいつけることなく開封する。
「搭乗者は、ウラジミル・スホイシン大尉」
「!?」
　デマじゃなかったのか？
　レフは書状に書かれた名前を何度も見るが、スホイシンだ。ミハイルも衝撃を受けたようで、何も言えずに硬直している。
　リュドミラは書状をひらひらと見せびらかす。
「あ、デマだと思ってた？　交通事故なんて嘘うそで、二月に飛んだというのも嘘。ライカじゃない別の秘密都市で育成してたの。君たちは、第二号と第三号」
　午後五時を告つげる教会の鐘が鳴り響き、脳みそがぐらぐら揺れる。視界がぼやけて、もう何も考えられなくなったそのとき。
「ぷっ。あはは！」
　突然リュドミラが吹きだして笑った。
「嘘よ、嘘。もう、君たちまでデマを信じてどうするの？」
　唖あ然ぜんとするレフたちの前で、リュドミラは書状と封筒をくしゃくしゃに丸めると、「ゴミ捨てといてね」と放心しているカメラマンに手渡す。
「あ、あの……」
　ようやくレフが声を絞り出すと、リュドミラはアイスクリームをレフの口元にそっと寄せて言う。

「知ってる？　『敵を欺あざむくには味方から』って」
　まさか、間近に迫った有人飛行を隠すために、わざと誤報を流したのか？　そんなふうに勘ぐりたくなる。
「さあ、撮影をはじめて。あ、アイス溶けちゃう」
　ぺろりと美お味いしそうにアイスを舐なめるリュドミラ。
　飄ひょう々ひょうとして掴つかめない彼女の背後に、レフは国家の闇やみを感じ、空恐ろしくなった。

　撮影が開始されるが、有人飛行成功後に公表されるのはひとりだけなので、ふたりは一緒に映らない。
　街角の花売りと話し、アイスを食べ、極彩色の聖堂を眺めて歩く。周りにはたくさんの市民がいるが、名もなき空軍中尉のふたりが何をしていようと、誰も目もくれない。
　カメラマンの隣にいるリュドミラは二本目のアイスを食べながら、「表情が硬いよ」「もっと美味しそうに食べたら？」など楽しげに指示を飛ばす。まるで撮影監督のような振る舞いで、飛行士の選考をしているとはとても思えない。
　広場をぐるりと回って霊れい廟びようの前に着くと、ミハイルは財さい布ふから銅貨を一枚出して、祈るように目を閉じ、空に向かって放り投げる。
　その銅貨はレフの足元に落ちた。
「何してるんだ？」
　不思議に思ったレフが尋たずねると、ミハイルは地面を指して言う。
「ここが、共和国のすべての道が始まる基点だ。だったら、宇宙にも通じているはずだろ？　今のは乗車賃さ」
　ミハイルは、東歴一九三六年の銅貨──自分の生まれた年のものを投げていた。

リュドミラはミハイルをまじまじと見つめる。
「君、冷淡なふりして、意外と可か愛わいいとこあるんだね」
「っ……」
ミハイルは珍しく照れたような顔をして、目を逸そらした。
「俺も、乗車賃払おっかな」
レフもミハイルを真ま似ねて、銅貨を投げることにする。だが、財布にあった一枚の銅貨は、一九三九年発行ではなく、一九四三年のものだった。
残念と肩を落とすレフだが、ふと、昨年「一七歳」と言っていたイリナの生まれた年ではないかと気づいた。
それならば、イリナのことを願うのみだ。イリナの夢をのせたロケットが、月へ飛ぶように。
「それっ！」
勢いよく放り投げると、銅貨はどこに落ちたかわからなくなってしまった。
「あれ……？」
「あら。キャビンはちゃんと降下できるといいけどね」
リュドミラの皮肉に、レフは頭を掻かいて苦笑する。

広場周辺を練り歩きながら撮影していると、建物の隙すき間まから白亜の建物―軍科学病院が見えた。
あそこに、イリナがいる。
レフは病院を見て、彼女の姿を想像する。
どういう検査を受けているのか心配だったが、今は『実験犬』のようであってほしいと願った。打ち上げ前は『モノ』である実験犬も、任務を終えて帰還すると皆からは可か愛わいがられ、勲功代わりに最上級のもてなしを受ける。

だが、〔運送屋〕がイリナを冷たい目で見ていたように、『呪われし種』として扱われているとすれば、鎖で繋つながれているなんていうことも―

「具合でも悪いの？」

「っ！」

いきなりリュドミラにアイスの棒で首筋を撫なでられ、レフはびくっとなった。

「病院、行く？」

声色は柔らかいが、彼女の深緑色の瞳ひとみは鋭利に光る。その表情は、けらけら笑っていた彼女とは別人の、国家幹部の目つきだ。

「いえ……なんでもありません」

「それならよし」

全身を硬直させたレフの首から、リュドミラはアイスの棒を離す。

そして、リュドミラは目を細めると、アイスの棒をオーケストラの指揮者のように持って、大広場をぐるっとなぞる。

「有人飛行が成功したら、ここに二〇万人を集めて、建国史上最大の凱がい旋せん祝典を開く予定よ。人、人、人……人の海。四〇万の瞳が、あの場所に立つ英雄を見つめるの……」

アイスの棒の先には、霊れい廟びようの演壇がある。

想像すると、レフは全身から汗がじわりと滲にじんだ。

恍こう惚こつの表情を浮かべていたリュドミラはスッと真顔になり、レフとミハイルに向き合う。

「じゃあ、そろそろ私は帰るわ。最後に訊きいていい？」

レフとミハイルは口をそろえて「はい」と返す。

リュドミラは薄く笑って、ふたりに問う。

「史上初の宇宙飛行士になる人は、どんな人がいい？」

これを訊きに来たのかと、レフは身構え、答えを探す。

　リュドミラは、まずミハイルを指した。
　ミハイルは自信満々に言う。
「英雄にふさわしい人物であることです」
「うん。正しい答えね。じゃあレフ君は？」
　レフは苦笑しながら答える。
「ふさわしいのは私です……とか言えればいいんですが、わかりません」
「あはは。正直ね」
「でも、絶対に必要なものならわかります」
　レフはイリナの姿を思い浮かべながら、胸に拳こぶしを当てる。
「命をかけてでも、宇宙を飛びたいという気持ちです」
「それも正しい。ちなみにね、私が望む宇宙飛行士は……」
　リュドミラは笑みを消して、真顔で言う。
「新世界へ導いてくれる革命家」
　反応に困るレフとミハイルに、彼女は小首を傾げてウインクする。
「なんてね。今度は、宇宙飛行士になった人に会いに来るから。じゃ、いい旅を」
　手を振って颯さつ爽そうと去っていく姿は、人を惑まどわす小悪魔そのものだった。
　取り残されたレフとミハイル、そして公式カメラマンは、戸と惑まどい気味に目を合わせる。
　ミハイルは両手を広げて降参のポーズを取る。
「さすが、最高指導者の側近だ。本当のことなんて、ひとつもなかったんじゃないか」
「ああ……」
　彼女の舌は、蜂はち蜜みつならぬ、宇宙食だ。原材料がわからないほどに不ま味ずい。

そんな風にレフは感じた。

撮影は終わり、アルビナール宇宙基地へ発つ時間も迫っているので、レフたちは皆の待つバス乗り場へ急ぐ。

広場を横切って史跡公園の傍そばを通ったとき、レフは聞き覚えのある旋律を耳にした。

公園内でジャズバンドが演奏しているその曲は。

「『愛しのあなた』……？」

昨年、まだイリナとそれほど打ち解けていなかった頃、ジャズバーに連れて行ったときに彼女が一聴惚れして、宇宙からの私信でも口にした、ふたりの思い出の曲だ。「歌が知らない国の言葉でわからない」と言っていた彼女は、歌詞の意味を理解できたのだろうかとレフは思った。「どこの国の言葉でも、愛しいと言いたい」、そんな詩だということを。

緋の瞳　Очи　алый

イリナはアーニャと日課の散歩に出ていた。

季節が変わっても毎日同じことの繰り返しで、目を閉じていても散歩コースを一周できそうだった。いつも尾行してくるじゃがいもみたいな顔をした〔運送屋〕があくびするのを見たイリナは、彼らも監視に飽き飽きしているのではないかと思う。

アーニャは毎日違う話題を持ってきて、イリナを楽しませようとする。

「百貨店に、春のお野菜が並んでましたよ。見るだけでうきうきしました」

「温かくなるのはいいけど、このくらいの気温で止まってほしいわ」
　暑さが苦手なイリナにとって、故郷よりも温暖なサングラードで、人間と服装を合わせるのはつらいものがあった。
「ねえアーニャ。ライカも春になったかしら？」
「まだ雪が残ってると思います。イリニャンさんと新年に投げた松まつ毬かさも、まだ氷の湖の上かもしれませんね」
　あのとき、アーニャはイリナと仲良くなることを願っていたが、それならもう叶ったよと、イリナは伝えたかった。
　だが、気恥ずかしくてそんなことは言えず、伏し目がちに照れながら「『さん』付けしないでいい」と言うので精一杯だった。
「えっ!?　ほんとですか!?」
　アーニャはびっくりして飛び上がった。その反応にイリナもびっくり。
「いいもなにも、あなたのが年上じゃない。その……イリニャンでも、私があなたをアーニャって呼んでるみたいに、イリナでも……いいのよ」
　うーん、とアーニャは唸うなり、手をポンと叩たたいた。
「じゃあ……イリナちゃんって呼びますね」
「ちゃん？」
「だって、新年にスネグーラチカちゃんにそう呼ばれたとき、嬉しそうでしたから」
「か、勝手にしたら……」
　まさか内心喜んでいたのがバレていたとは思わず、イリナは恥ずかしくなった。けれど、距離がぐっと縮ちぢまった気がして、イリナは心が弾んだ。だが、そんなことは言わない。
「べつに、敬語もやめていいけど」
　するとアーニャは、困ったように結んだ髪を触る。

「うーん……でも、わたくし、イリナちゃんを尊敬してますので、いいんです」
　名前で呼ばれたことにイリナはこそばゆさを感じつつ、疑問を覚えた。
「尊敬？　なんで？」
　アーニャはイリナの耳元にそっと顔を寄せ、小声で言う。
「宇宙飛行士ですから」
　何気ない一言に、イリナは胸が熱くなった。抱きつきたかったけれど、人目があるので、「ふーん」と答えておいた。
　一方、イリナの「レフが宇宙飛行士になれますように」という願いの行方はわからない。有人飛行については何も知らされず、アーニャの情報網にも引っかからないようだった。
　そのとき、すれ違った市民の雑談がイリナの耳に届いた。
「スホイシンという軍人が、宇宙を飛んだらしいぞ」
「今さら何言ってんだ。『嘘ローシ』だろ？」
　飛んだ……？
　思わず立ち止まったイリナの肩を、アーニャがトントンと叩たたく。
「デマですよ」
「……そうなの？」
　アーニャは頷うなずくと、無線鉄塔の拡声器を指して言う。
「本当に成功していたなら、あとそこから盛大にニュースが流れるはずですから」
　ほっと安あん堵どするイリナ。
　それにしても、いつまでこの生活が続くのだろうと辟へき易えきしていた。
　有人飛行後については相変わらず知らされず、不安で胃が痛くなる。毎日代わり栄えのしない検査ばかりで、自由時間はほとんどない。鬱う

つ屈くつのあまり、全力で走って大声で叫びたくなることが度々あった。
　イリナは大広場の奥にある霊れい廟びようを見る。霊廟のてっぺんには演壇があるが、あそこに登って「私が史上初の宇宙飛行士なのよ！」と喚わめいたらどうなるだろうと想像する。
　だが、頭がおかしいと思われるだけだろうし、〔運送屋〕に捕まるだろうし、いいことは何もないなと気が滅入る。
「ねえイリナちゃん、アイス食べましょう」
　イリナが落ち込んだ顔をすると、アーニャは気を利かせてよく食べ物を買ってくれた。冷たくて、牛乳と香子蘭バ　ニ　ラの濃厚な香りが楽しめるアイスは、イリナのお気に入りになった。
　ふたりでアイスを舐なめながら史跡公園を歩いていると、風に乗って音楽が聞こえてきた。
「あれ……？」
　その旋律に、イリナの胸がぎゅっと締め付けられる。
「『愛しのあなた』……？」
　集まっている人々の隙すき間まから、ジャズバンドの生演奏が見える。病室で聴いたラジオ番組で、「どこの国の言葉でも、愛しいと言いたい」という意味だと知ったイリナは、この曲を聴くたびにレフを思い出してつらくなる。
　足早に公園を去ろうとした、その瞬間。
「え……」
　忘れられない横顔を、公園と広場を隔てる柵さくの向こうに見た。
「レフ……？」
　彼がこんな場所にいるわけないと目を疑ったが、隣にはミハイルがいる。
「レフ！」

声は演奏の音に掻かき消される。
イリナはアイスを握にぎったまま駆け出す。
身体からだが勝手に動く。
会って何を話すかなんて考えない。
柵さくに近づいたそのとき、目の前に黒い影が飛び込み、道を阻まれた。
「!?」
イリナの胴体に〔運送屋〕の大きな手が回され、無理やり抱き止められる。
「勝手な行動を取るな」
刺し殺すような低い声に、イリナは立ちすくむ。手にしていたアイスは〔運送屋〕の外がい套とうにべったりとついている。〔運送屋〕はイリナの手からアイスを奪い取ると、足元に落として踏みつぶした。
おずおずとやってきたアーニャを、〔運送屋〕は「しっかり見ていろ」と睨にらみつける。
アーニャは今にも泣き出しそうな顔で頭を下げる。
「申し訳ありません……」
ジャズバンドの演奏が終わり、人々が大きな拍手と歓声を送る。
イリナは、レフを捜してあたりを見る。
だが、そこに彼の姿はなかった。
腹部や背中には〔運送屋〕に強く触れられた嫌な感触が残り、かつてレフに柔らかく抱き締めてもらった温かさは、どこかに溶けて消えてしまった。

間奏　интерлюдия

黒竜の瞳　Очи　Цирнитра

サングラードの街は乳白色の朝あさ靄もやに包まれ、郊外の森は霧雨に濡ぬれる。

市街地から離れた共同墓地へ向かって走る、一台の黒塗りの官僚用高級車。防弾硝がら子すで仕切られた後部座席では、リュドミラがゲルギエフに搭乗候補二名の資料を差し出す。

「……ふむ。評価が高いのは、ミハイル・ヤシン君か」

「成績はすべて一位。沈着冷静。リーダーシップ。中産階級の血筋で品位がある。世界のどこに出しても恥ずかしくない。これが出発の挨あい拶さつ」

《──私を乗せて、人類として初めて宇宙に旅立ちます》

そして、大広場での会話も、リュドミラが小型録音機で密ひそかに録っていた。

《──英雄にふさわしい人物であることです》

ゲルギエフはまんざらでもない顔で頷うなずく。

「自分に自信があるようだな」

リュドミラがミハイルの写真を指し、「いい男よ」とうっすら笑う。

「外見も大事だ」

ゲルギエフはレフの資料に目を移す。

「次にレフ・レプス君」

「成績は優秀。正義感があり、社交的。貧しい農村出身。良くも悪くも感情で動く。特記事項として、『ノスフェラトゥ計画』を成功。暴力事件の前歴」

《──この宇宙船は、私たちの夢をのせて飛び立ちます》

「うむ。私の夢でもあり、国民の夢でもある」
　ミハイルの利己的な発言に比べ、レフは皆の代表という意識が滲にじみ出ている。
《──命をかけてでも、宇宙を飛びたいという気持ちです》
「熱い男だ」
　ゲルギエフは軽く拍手をする。
「ミハイル君に比べると、華やかさには欠けるけどね」
「実際にふたりに会ってみて、どう感じた？」
　ゲルギエフに問われたリュドミラは、レフの写真を指で軽く弾く。
「彼を選ぶことは賭かけかもね」
「賭？」
「ちゃんと英雄を演じられるかしら」
　ロケットが自動操縦で飛ぶ以上、搭乗者には基準値を超える身体能力があれば問題ない。重視されたのは、帰還後のことだった。

　墓地の駐車場に、ゆっくりと車が停まる。
　運転手を務める護衛官が傘を手に外へ出ようとすると、リュドミラが制止する。
「ここにいて。私ひとりでいい」
　麝香撫子カーネーションの花束を持ったゲルギエフを、リュドミラは自分の傘に招く。そして、彼女の差す傘の下、ふたりは墓地の奥へと歩いていく。
　啄木鳥きつつきが松の大木を突つく音が響き、野の鼠ねずみが墓の陰に隠れる。
　まだ朝早いこともあり、ふたり以外には誰もいない。
「涙雨だな」
　ゲルギエフには空軍兵の息子がいたが、東歴一九四三年、若くして戦

死していた。
「……ところで、ふたりきりでお話、というのは……旅行のお誘いかな？」
　くだらない冗談に、リュドミラは愛想笑いすら返さない。
「そうね。無礼な〔運送屋〕も、さすがにお墓にまでは盗聴器を仕掛けないから」
　国の最高指導者に対して、反対派からの盗聴、盗撮は当たり前。それに加えて、打ち上げ間近だと察した諜ちよう報ほう員が、犬のように嗅かぎまわっている。
　何をするにも動きにくい状態の中、リュドミラはゲルギエフに密ひそかに情報を伝える。
「イリナ・ルミネスクの件。打ち上げが決定したことで、〔運送屋〕があらためて処刑の要望を出すみたい。最近、連合王国で新血種族ダンピールとアーナック人の抗争が多発してるでしょ。あれもあって、吸血鬼の扱いに過敏になってる」
「たしかに、年端も行かぬ吸血鬼を実験体にしたと知られたら、新血種族の怒りの矛ほこ先さきがこちらにも向くだろうが……」
　袖そでに付いた雨粒を鬱陶しそうに払うゲルギエフに、リュドミラはイリナの写真を見せる。
「殺すには惜しいくらい可か愛わいいけどね。女優か歌手として売り出してみる？　連合王国では新血種族のスターもいるでしょ」
「冗談だろ？」
「冗談よ」
　水たまりに浸っている腐くさった松まつ毬かさを、ゲルギエフはぐしゃりと踏みつぶす。
「実験体以上の利用価値がなければ、廃棄もやむなしか」
　真っ黒な空を稲光が不気味に走り、雨脚が強まる。

傘から落ちる雨だれが、イリナの写真を濡ぬらす。

リュドミラはゲルギエフに、意味ありげに微ほほ笑えみかける。

「利用価値がないとは言ってないわよ。革命に死はつきものだけど、この子──」

烈はげしい雷鳴が轟とどろき、リュドミラの声をかき消した。

第六章　史上初の宇宙飛行士

藍の瞳　Очи　индиго

アルビナール宇宙基地の周りには野生の鬱金香チューリップが咲き乱れ、苦にが蓬よもぎが薬のような独特の香りを漂わせている。そこかしこに残雪はあるが、イリナを打ち上げた一二月とは景色が一変している。

四月九日。

レフたち『夢の六人ミエチタ・シエスチ』が到着し、三日が経過していた。

中央委員会が決定した打ち上げ予定期間「四月一〇～二〇日」が明日に迫っているが、今の今まで、搭乗者も、打ち上げ日時すらも発表されていない。

レフとミハイルは仲間から離れ、基地の端にある小屋で寝食をともにしている。「訓練や選考の一環」として共同生活を命じられたのだ。隣の小屋から医師団が監視しており、寝台にはセンサーが敷かれ、睡眠状態もチェックされる。体調に異変があれば即座に検査され、予後が悪ければ予備人員と入れ替えられる。

ふたりには基地に所属している科学者から「打ち上げに最適な天候を探っている」と伝えられているが、それが本当なのか、または修正を余儀なくされるような不具合が出ているのか、真実はわからない。

言いようのない怖さに纏まとわりつかれ、胸が鎖で締められるように苦しい。

まさか延期ではないか？

そんな思いがレフの頭の片隅に浮かんだとき、ついに動きがあった。

国家の錚そうそうたる面々──委員会幹部やコローヴィンたち──が

基地に到着し、小川のほとりにあるテラスに集結していると基地の職員たちがざわついた。
　それを聞いて、レフは胸がどきんとなる。
　ヴィクトール中将の言っていた『搭乗者を決める臨時委員会』に違いない。
　テラスでは、軽食を挟はさみながらの非公開の会合が長時間にわたって開かれている。
　心が落ち着かないレフとミハイルは、小屋で夕飯を食べたあと、期待と不安が綯ない交ぜになった中、ふたりきりで待機させられていた。
　レフは気まずい沈黙に耐えられず、ミハイルに話しかける。
「長いね……」
　ミハイルは無言で頷うなずく。
　緊張のあまりレフは口が渇き、必要以上に水を飲む。
　いつもは沈着冷静なミハイルも、何度も座っては立ち上がり、窓の外を見て深呼吸をする。
　時計の秒針がカチコチと響き、小屋の外を走る車の走行音や、遠くの工場で金属を叩たたく音が静かに聞こえる。
　そして、唐突に。
　―コンコン。
　扉が叩たたかれた。

　基地内にある殺風景な会議室に、レフとミハイルは呼び出された。
　判決を受けるかのように身体からだを強こわ張ばらせるふたりの前に、厳めしい顔をしたヴィクトール中将が立つ。
「打ち上げが決まった。三日後の四月一二日。午前九時頃を予定している」
　いつもどおり余計なことは言わず、事務的に告つげた。続けて、ヴィ

クトール中将はぎょろりとした目で、レフとミハイルを交互に見る。
「搭乗者だが……」
　ごくりと唾つばを呑のむレフ。
　ミハイルも息を止める。
　レフは心の中で、自分の名を繰り返す。
　レフ・レプス。
　どうか、夢を。
　そしてヴィクトール中将は、レフを射抜くように見た。
「レフ・レプス中尉。お前だ」
　どくん。
　レフの胸が脈打つ。
　驚きと喜びが五ご臓ぞう六ろつ腑ぷをぐいっと締め上げ、喉のどから震える声が絞り出る。
「……はい！　役目を果たせるよう、立派に務めます……！」
　責任がずっしりと背中に圧おし掛かる。以前、最終候補に選ばれたときは地に足がつかなかったが、今回はそんな気分にはならない。
　選ばれなかったミハイルは、目を瞬またたくだけで、ぴくりとも動かない。
　ヴィクトール中将はミハイルに、酷薄な視線を向ける。
「ミハイル。お前は第二号。緊急時の代替え要員とする」
　雪像のように凍りついていたミハイルは、
「……なぜ」
　掠かすれた声を漏もらすと、
　ダン！
　長机を拳こぶしで激しく打った。
「なぜですか！　私はすべての科目で一番だった！　彼は私よりも劣り、一度補欠に落ちた人間ですよ！　なぜレフが選ばれるんですか！」

箍たがが外れて顔を真っ赤にするミハイルに、ヴィクトール中将は情もなく言い放つ。
「総意だ。受け入れろ」
「しかし……！」
「我らが祖国の宇宙ロケットは、お前の夢ではなく、皆の夢をのせて飛ぶ。皆の夢を背負い、皆に笑顔をもたらす責務を果たせる者だけが、英雄となる資格を持つ。その英雄にふさわしい者が、レフ・レプスだ」
淡々と告つげたヴィクトール中将は、最後に「今のは私の考えだ」と付け加えた。
「……」
決定事項を覆せないのはミハイルも分かっているはずだが、気持ちが収まらず、身体からだが震えるほど悔しげに拳こぶしを握にぎり締める。そんな彼を見つめていたヴィクトール中将は、大柄な身体を揺らして彼に歩み寄ると、励ますように肩に手を置いた。
「今回の打ち上げだけで終わるわけではない。夏には、さらに過酷な二四時間飛行を行う予定だ。そこで、君の力を借りたい」
「……はい」
唇を噛かみしめ、ミハイルはわずかに頷うなずいた。
ヴィクトール中将は重荷がひとつ下りたように軽く息を吐くと、ふたりに向き直り、背筋を正す。
「搭乗者決定については、明日あらためて公式の場で発表する。また、打ち上げに先立ち、お前たちに書いてもらうものがある。それは……」
やや躊躇ためらいを見せ、その言葉を発した。
「遺書だ」
興奮で熱くなっていたレフの身体が、すーっと冷えた。
数回の打ち上げ実験成功で生還が約束されたわけではない。時速二八〇〇〇キロメートルという超高速で未知の空間を飛ぶのだから、予測不

可能な事態はいくらでも考えられた。計算上の確率は極めて低いが、宇宙を漂う小石がキャビンにぶつかり、大穴を開けることもありえる。

レフとミハイルは小屋に戻ると、命じられたとおりに遺書を書き始める。

この遺書は、有人宇宙飛行が成功すれば、ただちに焼却される。遺書が必要な欠陥品を飛ばしたと、世間に知られるわけにはいかないのだ。

ミハイルは無表情で、黙々と遺書を書きつける。レフとはいっさい目を合わせず、拒絶の壁を作っていた。

また、レフは搭乗者に選ばれたことを家族に報告したかったが、許可されなかった。家族には昨年末に「出張に行くから帰れない」と連絡して以来、何も伝えていない。

そして当然、イリナに報告することも叶わない。

家族には帰還後に会えるだろうが、イリナと再会できるのだろうかとレフは心配になる。

今、コローヴィンは基地に来ており、明日には宇宙飛行についての打ち合わせがある。そのとき、イリナが設計局に勤つとめる件について、コローヴィンに直接確認してみようかとレフは一考する。

だが、それはやめた方がいいのではないかと、すぐに思い直す。

以前、補欠から候補生に復帰したとき、イリナの処遇を執しつ拗ように訊きいてしまい、「覚悟はあるのか？」と注意された。

宇宙飛行士として選ばれた今、余計なことを尋たずねてコローヴィンの心象を悪くしたくない。

しかも、設計局の件は『口外厳禁』のふたりだけの秘密であり、イリナが禁を破ったことがコローヴィンに知られてしまうのもよくない。

やはり、やめておこう。

レフは手を止めていた遺書の執筆に戻る。

ここに書く内容がイリナに届くかわからず、勿もち論ろんイリナの名を出すことも不可能だが、レフは思いを込めて、「訓練をともにし、同じ月を見た、親愛なるあなたに感謝したい」と書き記した。

四月一〇日。夜明け前から、ロケット発射準備が急ピッチで進む。

打ち上げ予定時刻まで五〇時間を切っており、基地内は慌あわただしくなるが、計画に関与しない者には極秘のため、呑のん気きに小川で釣りをしている住人の姿も見られる。

講堂では、有人宇宙飛行についての中央委員会が開かれる。

ただし、この会は記録用に用意されたもので、レフにとっては既知の内容が、国家の重鎮たちの前で形式的に発表されるだけだ。

「宇宙飛行士に、レフ・レプス中尉を任命する」

進行役の委員に名を呼ばれたレフは、段取りどおりに起立し、冷静に宣誓する。

「史上に残る任務を、誇りを持ってやり遂げることを誓います」

大きな拍手を浴びるレフ。

撮影隊のカメラは、勝者であるレフだけを捉える。ローザたち予備人員は拍手をしつつも、敗者であるミハイルに、憐あわれみの眼まな差ざしを向ける。

壇上で飛行士任命のやり取りを終えたレフは、講堂の端から異質な視線を感じ、ふと目を向けた。

片かた頬ほほに笑みを浮かべたリュドミラがいる。

リュドミラはレフに軽く手を振り、周りの誰の許可を得ることもなく、さも当然のように退席していった。

委員会が終わって議場を出たところで、レフとミハイルはコローヴィ

ンに呼ばれた。いよいよ宇宙飛行についての綿密な打ち合わせが始まるのだ。
　四か月ぶりに会ったコローヴィンは、無精髭ひげを生やし、不健康に痩やせこけている。不眠不休で作業していることがひと目でわかるほどに疲れを帯おびているが、瞳ひとみは力強く輝き、生き生きとした光に満ちている。
「久しぶりだな、翼竜ジラントよ！　祝福は旅から帰ってからにしよう！」
　油で黒く汚れたコローヴィンの手を、レフはがっしりと握にぎりしめる。
「はい、チーフ！」
　そしてコローヴィンは、魂が抜けてしまったようなミハイルに優しく声をかける。
「君も準備を万端にしておきなさい」
「はい……」
　ミハイルは事務的な返事以外、まったく声を発さない。レフは彼の気持ちが痛いほどわかったが、あまりの消沈ぶりに、声をかけるのも憚はばかられた。
　打ち合わせのために用意された会議室の席にレフとミハイルが座ると、コローヴィンは立ったまま、申し訳なさそうに口元を歪ゆがめる。
「遺書を用意させるなど、本来あってはならないのだが……じつは、もうひとつ、頼みがある。帰還方法だが、逆噴射装置での着陸を実用化することは、間に合わなかった。そのため、同志イリナのときと同じ、キャビンから脱出してのパラシュート降下になる」
「それなら構いませんが……」
　レフが頷うなずくと、コローヴィンは首を横に振る。
「違うんだ。帰還後の報告では『キャビンに乗ったまま着陸した』とし

てほしい」
「なぜ、そんな嘘うそを……？」
　困惑を浮かべるレフの前に、コローヴィンは委員会印の入った極秘文書を置く。
「記録のためだよ」
　嘘を吐つかせる理由は、国際航空協会に「飛行高度の世界記録」として申請するためだった。協会の規約では、いくら高く飛んでも、帰還時に脱出したら失敗とみなされる。つまり、パラシュート降下は認められないのだ。
　コローヴィンはレフに深々と頭を下げる。
「本当にすまない。遺書も、記録の偽装も、悔しさしかない。だが……これは言い訳になってしまうが、従わねば、開発予算がよそに回されてしまうのだ。予算を管理している連中のあいだでは『人など乗せなくとも、無人機で観測データは取れる』という意見が根強くてな……」
　コローヴィンのつらさが身に染みて、レフは同情するように語りかける。
「私は与えられた任務をまっとうします。何も問題ありません」
　勿もち論ろん、心苦しい。自分の嘘うそが永遠に残り、未来の子どもたちが嘘を真実として習うことになるのだ。それを、しょうがないの一言で片づけていいのだろうかと、疑問が湧わく。
　するとコローヴィンはレフの気持ちを察したのか、話題を切り替えるように、ぱんぱんと手を叩たたいた。
「よし、楽しい話をしよう。まずはコールサインについてだ。歴史に刻まれるものだと思うと、なかなか決められなくてな。悩んでいるんだよ」
　コールサインの条件は単純で、聞き取りやすく、交信に使わない言葉ならば何でも良かった。

　そこでレフは、不思議に思っていたことを尋たずねる。
「なぜイリナは『彼岸花リカリス』だったんですか？　瞳ひとみの赤色からの連想でしょうか」
　彼岸花には毒があり、レフはあまりいい印象を持っていなかった。
「瞳は、そのとおりだがね……」
　言葉を濁にごしたのが気になり、レフは追及する。
「では、なぜですか？　赤い花は、他にもたくさんありますが」
「うむ……」
　コローヴィンは少し照れたように頭を掻かく。
「花言葉が『また会う日を楽しみに』なんだ。『無事に生還しろ』という想いを込めて、彼女に与えた。彼女にだけこっそり教えたんだが、喜んでくれたよ」
「そうだったんですか……」
　瞳の色から単純に付けられたものだと思っていたレフは、コローヴィンの深い愛情を感じて、胸が震えた。彼女の命を想っていたのは、自分だけではなかった。救われた気分になるのと同時に、設計局の話も本当なのではないかと思える。
「ん？　私が花言葉を使うのが、そんなに意外だったか？」
「はい」
　と、うわの空で答えたレフは失礼だったと焦る。
「あっ、いえ、そんなことは……！」
　だが、コローヴィンは気に障さわった様子もない。
「科学者という生物は、概してロマンチストなんだよ。ところでコールサインの例だが、たとえば『雪杉ケードル』はどうだ？　『あなたのために生きる』という意味がある。祖国のために、という意味を込めてな」
　レフは首を振り、自ら提案する。

「『離れた人の無事を祈る』という意味を持つ花はありますか？」
「ん……？」
「宇宙から、共和国民のことを、大切な人のことを祈るという想いを込めます」
　コローヴィンは一瞬唸うなったが、何かを察したようにニヤッとした。
「『十五夜草アスタル』だ」

　四月一一日の午後になると、打ち上げ準備の最終段階となり、ロケットは発射台に運ばれて直立している。巨大な塔のような銀色の胴体が、穏やかな春陽に照らされて輝く。
　その近くでレフとミハイルは、コローヴィンと搭乗の予行演習をおこなっていた。
　イリナの打ち上げの際にレフはロケットを見ていたが、いざ自分が乗るのだと想像すると、身も縮ちぢむほどの畏い怖ふを覚える。
　ミハイルは相変わらず憮ぶ然ぜんとしているが、溜ため息いきの数は少なくなっている。
　コローヴィンは午前五時からロケットの搬送に付き添い、システム検査をつきっきりで見守っていたようで、昨日よりもさらに疲労の色が濃い。だが、座って休むことなく身振り手振りを交えて、熱心に指導する。
「飛行計画は、彼女のときと同じだ」
　宇宙に到達後、無重力空間を六分間飛び、地球を一周して帰還する。
　また、飛行中の報道について、コローヴィンから説明があった。
「飛行士と地上との交信は、そのまま世界へ生中継されるわけではない。宇宙での安全が確認されたのち、国営通信ＴＡЦＣが『打ち上げ成

功』の第一報を全世界へ流す。君の交信音声は、夜のニュースで初めて流れる予定だ」

　注意事項として、飛行中は多少気分が悪くても「気分は良好」と言い、あまりにも体調が悪くなった場合は黙っているようにと指示書に記載があった。

　この説明を受けて、レフは一点、コローヴィンに質問したかった。

　万が一、第一報を流したあとに事故が起きて生還できなかった場合、どのように発表されるのか。まさか、ミハイルを替え玉として、帰還した飛行士に仕立て上げるのでは。そんな疑念すら抱いた。

　訊きこうか訊くまいか、悩んでコローヴィンを窺うかがい見たところ、彼の額に異常な量の脂汗が浮いていた。

　刹那、コローヴィンは苦しそうに呻うめき、胸を押さえて崩れた。

「チーフ!?」

　レフとミハイルは慌あわててコローヴィンの傍そばに寄る。顔は真っ青で、呼吸が乱れている。

「うぅ……すまない。ちょっと小屋まで、連れて行ってくれるか……」

　意識を失いかけていたコローヴィンだが、薬を飲んで三〇分もすると落ち着き、寝台の傍かたわらで見守っているレフとミハイルに対して、手で追い払うような仕草をする。

「私は問題ない。君たちは予行演習を続けなさい」

　うそぶくと、さも平然と煙草たばこに火をつける。

　レフはこの場に留まりたかったが、打ち上げまでに学ぶことが山積みだった。

「チーフ、ゆっくり休んでください」

　看病は医者に任せて、レフは発射場へと戻る。

　コローヴィンの体調は、現場のすべての人たちが心配していた。

彼は自分で語りはしなかったが、かつて冤えん罪ざいで鉱山に囚われていたとき、死んでもおかしくない仕打ちを受けていた。

看守に殴打されて骨が砕け、食事を与えられず病気になり、強制労働が心臓を蝕むしばんだ。そんな地じ獄ごくでも「ロケットを飛ばしたい」という想いを抱き続け、六年後に生還を果たした。

そして、国家機密の天才科学者として連合王国を震え上がらせ、夢の実現に邁進していたのだが、一度ぼろぼろになった身体からだが完治することはなかった。

魂を削った結晶が、今まさに宇宙へ飛び立たんとしているロケット『ミェチタ』だった。

四月一二日、打ち上げ当日。東の空が淡く白み始めた、午前五時三〇分。

小屋の寝台に横たわっているレフを、医師が揺すり起こす。

「起床時間だ」

「……んんっ……あ、おはようございます」

どうやら狸たぬき寝入りはバレなかったようだと、レフは安あん堵どする。

眠ろうとしても、遺書のことや、コローヴィンのこと、家族、そしてイリナのこと――さまざまな想いが浮かんでは消え、一睡もできなかった。医師が何度も見回りに来たが、眠っているふりをしてやり過ごした。

打ち上げ目前でも、やることは変わらない。

いつもどおり軽い体操をして、朝食となる。

宇宙食とスープ、ジャムパンに珈コー琲ヒーを、レフはミハイルと同じテーブルで食べる。

ミハイルは、いまだに壁を崩さない。
昨夜、小屋に戻ったあと、「打ち上げまでにチーフの体調が回復するといいな」とレフは声をかけたが、冷めきった視線を返されただけだった。
打ち上げまでに仲を取り戻したいレフだが、声をかけるのは逆効果に思えた。
そして、会話もないまま準備しているところに、小屋の管理者である職員の女性がはなむけの花束を持ってきた。
「私には、飛行機乗りの息子がいたんだけどね、戦争で行方不明になってしまった。きっと宇宙にいる神様のところへ飛んで行ってしまったのね。会ったらよろしく伝えて」
レフは花束を受け取り、優しく微ほほ笑えむ。
「もちろんです。では、あなたと息子さんのお名前を教えていただけますか？」
笑顔でレフはやり取りしながら、ミハイルの静かな視線を感じていた。

最後の身体検査を無事に通過したふたりは、格納庫の更衣室で宇宙服を身に着ける。ヘルメットの前部には、ツィルニトラ共和国連邦を表す『ＣЦＣＰ』の文字があった。
かつて、レフがイリナに書いたものが、そのまま採用されている。
当時のことが、鮮明に思い出される。
レフが駆けつけたとき、イリナは技師たちに囲まれて、首飾りを奪われそうになっていた。周りが敵だらけだった彼女は、どれだけ心細かっただろう。
あのとき、レフは、宇宙服を装着したイリナを見て、立派な宇宙飛行士だと感じた。

自分は、立派な宇宙飛行士に見えているだろうか。

イリナに問いかけたいが、彼女はここにいない。

「出発の時間だ！　バスに乗れ！」

ヴィクトール中将の指示が飛んだ。

余計なことを考える余裕もないまま、発射場へ向かうバスに乗り込む。

前列にレフ、その後ろにミハイルが着席。車内は満員で、ヴィクトール中将や医師などの軍関係者以外にも、公式カメラマンや新聞記者が乗っている。イリナが誰にも見つからないようにひっそり向かったのに比べると、異様な熱気に包まれている。

三キロメートル離れた発射場へ、バスは低速でガタガタと走る。

レフが車窓に目を向けると、燃えるような朝焼けのなか、ロケットが悠然と立っているのが見える。

徐々に緊張の高まるレフだったが、皆にあれこれ話しかけられると、くだらない冗談で返す。一方、ミハイルは目を閉じ、ひとり黙り込んでいる。

それからしばらくすると、レフは突如、強烈な尿意に襲われた。

どうしよう。

発射場にトイレはなく、幹部や重鎮が待ち構えている。

打ち上げまで二時間。そして帰還まで、我慢できるのか……。

「おい、どうした？」

レフの異変に気づいた医師が声をかけた。

もう無理だとレフは決意。

「……すみません、ちょっとだけ、時間はありますか……!?」

深刻なレフの言い方に、車内に緊張が走る。

「なんだ」

「小便です！」

　一瞬の沈黙。
　そして爆笑。
「わははっ！　心配させるな！」
「降りてそこでしろ！　神聖な宇宙を穢けがされたらたまらん！」
　レフは恥ずかしくて顔が真っ赤になり、皆の緊張が一気に霧散した。
「打ち上げまで時間はたっぷりある。ゆっくり済ましてこい」
　慌ただしくバスを降りたレフは隠れられる場所を探したが、辺りには何もなく、やむをえずバスの後輪と向かい合う。
「ふぅ……」
　車輪に向かって立ち小便していると、ミハイルも降りてきて、レフの隣に立った。
「あっ、君も？」
「一緒にするな、馬鹿」
「ははっ、ごめん」
　するとミハイルは、用を足しているレフの肩を軽く叩たたき、顔を寄せた。
「……おめでとう」
「えっ？」
　いきなり祝福の言葉をかけられ、レフは小便が止まりそうになった。
「皆の夢を背負い、皆に笑顔をもたらす責務を果たせる者……そのとおりだな」
「ミハイル……？」
　用を足し終えて服装を直すレフに、ミハイルは向き合って言う。
「もし俺が飛行士に選ばれていたとして、君のように『小便がしたい』と言ったら、皆は戸と惑まどっただろう。……いや、俺だったら言い出せない。完璧な英雄を演じようとしたはずだ。そんな英雄は、幻想だったわけだが」

　ミハイルは遠くに聳そびえるロケットを眩まぶしそうに見つめる。
「正直に言おう。昨夜、君がチーフの体調回復を願ったとき、俺は君の体調が悪くなることを願った。ついさっきまで、発射直前に君の宇宙服に欠陥が見つかることを祈っていた。そんな人間は、落選して当然だ。ははっ……」
　自じ嘲ちよう気味に笑うと、ミハイルは涙を堪こらえるように続ける。
「この数日間、君とふたりで過ごして、君が『ノスフェラトゥ計画』の担当や、宇宙飛行士に選ばれた理由がわかった気がする」
「ありがとう。……でも俺は、いまだに自分では、よくわからない。立派な宇宙飛行士とは、どうあるべきなのか……」
　宇宙服を着たときに感じた疑問をレフが吐露すると、ミハイルは朗ほがらかに笑う。
「君は君でいいんだよ。宇宙飛行士のあるべき姿なんて、誰も知らないんだ」
「たしかに、そのとおりだな……」
　そしてミハイルはレフを抱擁すると、頬ほおに接せつ吻ぷんするように、ヘルメットをこつんとぶつけて言う。
「俺の夢も、宙そらへ届けてくれよ」
　爽さわやかに微ほほ笑えむミハイルを見て、レフは胸が軽くなった。

СЧС
СЧ
СР

栄光を祝うように朝日が輝き、ロケットを美しく照らしている。
空は青く澄すみ渡り、穏やかな風が草木を揺らす。
春の香りに包まれた発射場には、イリナを打ち上げたときの何倍もの人がいる。中央委員会の面々、基地の主任、技師や科学者、〔運送屋〕の副議長、そして予備人員のローザたち。集まった人たちの中には『ノスフェラトゥ計画』をまったく知らない者も大勢いた。
宇宙服姿のレフがバスを降りると、猛烈な拍手で歓迎される。
コローヴィンは、昨日の不調など嘘うそだったみたいに頬が艶つやつやしている。
「おはよう！　絶好の打ち上げ日和になったな！」
「チーフ、お身体からだは……」
心配を跳ね除けるように、コローヴィンは平気だと胸をばんばん叩たたく。
「太古の昔から、人々は宙そらの果てを夢想してきた。今日は、夢を叶える最初の一歩だ。夢の結果として、近い将来、福引の景品に宇宙旅行のチケットが並ぶだろうよ」
冗談を言うコローヴィンの姿に、レフは胸を撫なで下ろす。
「同志レフ・レプスよ」
老ろう獪かいな雰囲気を醸かもし出す委員会議長が、委員たちを率いてレフの前に立つ。
レフは姿勢を正して敬礼する。
「飛行士レフ・レプス中尉！　準備完了しました！」
委員会議長は満足そうに敬礼を返す。
「人類初の宇宙飛行。未来永劫記憶される偉業だ。幸運を祈る」
レフが敬礼の手を下ろすと、周りにいた人々がいっせいにレフに群がり、労働証と油性ペンを差し出す。

「同志！　ここにサインを！」
「え、サイン……？」
　予期せぬ事態に狼狽うろたえていると、ヴィクトール中将がレフのヘルメットを軽く叩たたく。
「今のうちに慣れておけ。帰還したら、世界中を回って何億人をも相手にするんだぞ」
「は、はい……」
　レフは笑顔で技師たちに対応するが、サインをこなしていくうちに、本来はイリナがサインすべきなのにという矛む盾じゆんした想いが胸に芽め生ばえた。公式カメラマンが熱心にレフを撮影しているが、イリナが宇宙服を着ている写真や映像など、ひとつもない。
　ヴィクトール中将が大声で皆に呼びかける。
「さあ！　同志諸君、見送りだ！　座ろう！」
　イリナを打ち上げたときと同じように、共和国の慣習でレフは送られる。
「出発だ！」
　拍手を浴びてロケットに向かうレフを、人々が熱烈に囲む。宇宙学者はヘルメットに勢いよく接せつ吻ぷんして唇を切り、技師は涙をこぼして嗚お咽えつを上げる。
　一二月一二日、この場所で、『彼岸花リカリス』と呼ばれる彼女を見送った。夜明けの青い光を纏まとって歩く彼女の姿が、目の前に幻影のように蘇よみがえる。
　これから搭乗するロケットは、彼女の命がけの実験をもとに改良されたものだ。
　宇宙空間の安全性は、彼女の身体からだで証明された。
　自分は、彼女が切り拓いた宙への道を、ただ辿たどっているだけだ。
　祝福されればされるほど、矛盾の芽が根を張り、育っていく。

　イリナは宇宙飛行士としては歴史から消され、レフが帰還を果たせば、設計局で技師として働く。
　そういうことなのだが。
　妙な気持ち悪さがレフの腹で蠢うごめく。
『夢の六人ミエチタ・シエスチ』と抱擁し、握手を交わすが、「顔が暗いわよ？」とローザに指摘される。
「いやぁ……緊張してるのかなぁ。ははっ」
　笑って誤ご魔ま化かすレフだが、イリナへの想いは弾けそうなほど膨ふくらむ。
　人々の列の最後、ロケットの上部へとつながる昇降機の前で、コローヴィンが感慨深い顔つきでレフを待っている。
『ライカ44』での別れの日、イリナはレフに告つげた。
　―私が設計に関わったロケットで、あなたが月へ飛んだら、素敵ね。
　月ロケットの開発となれば、コローヴィンの指揮下になるのは間違いないだろう。
「……」
　今ここで余計なことを言えば―『口外厳禁』に触れれば、精神の乱れを指摘され、急きょミハイルに飛行士の座を譲ることになるかもしれない。それでも、もしかしたら地球に戻れないかもしれないと思うと、どうしても伝えたかった。
　レフはコローヴィンに近づき、彼だけに聞こえる声で、話しかけた。
「イリナが設計局に入ったら、よろしくお願いします」
　するとコローヴィンは、眉まゆを顰ひそめた。
「何の話だ？」
「え？　委員会で決まったと、以前イリナが……」
　コローヴィンは笑みを消し、無言で首を横に振る。
「嘘うそ……？」

なぜ、そんな嘘を。
あの話を聞いたのは、補欠から候補生に復帰したとき──

──さっきチーフに注意されたの、もう忘れたの？　候補生への復帰より、私のほうが気になるのかって。
──私、検査が終わったら……宇宙を飛んだ経験を活かして、設計局に勤つとめることになったわ。

まさかイリナは、自分の処遇を気にさせないために、嘘を吐ついたのか？
だから、移送直前の別れ際にも──

──私は大丈夫だから、頑張ってね。あなたが宇宙飛行士になったら、また、会おうね。

レフはすべて理解し、天を仰ぐ。彼女が設計局に勤めると信じていたから、レフは雑念に惑まどわされず、選抜試験に集中して臨めた。そして今、宇宙飛行士として、ロケットに乗り込もうとしている。
だが、それとこれとは別だ。
「チーフ。イリナは、どうなるんですか」
思わずレフは訊きいてしまった。
コローヴィンは厳しい顔つきでレフに言う。
「申し訳ないが、私は現場を任された一介の工場長に過ぎない。彼女の未来に関して、私が決められることはない」
そう言うとコローヴィンは、何か物言いたげに、ロケットとは逆方向にいる〔運送屋〕の副議長を横目で見た。
レフは彼をよく覚えていた。イリナが基地に帰還したとき、冷酷な目

を向けていた人物だ。
　漠然とした不安に襲われるレフの両肩を、コローヴィンは強く掴つかむ。
「私にできることはしておく」
　深く頷うなずいたコローヴィンは、レフの「嘘うそ」という一言で、事情を察したようだった。
「いいか、翼竜ジラントよ。君の焦がれた宙そらはすぐそこだ。君の夢は、我々の……そして、彼女の夢でもある」
「はい……！」
　今は任務に集中し、飛行士としての役目をまっとうしなければならない。航行日誌を誤記したり、パラシュートの着地を失敗しようものなら、イリナに笑われるだろう。

　昇降機に乗り込んだレフは、キャビンまで上昇するあいだ、イリナの打ち上げを思い出す。
　イリナを見送ったあのとき。
　昇降機で上がっていくイリナの背中を見て、いつか自分も飛ぶのだと誓った。
　それが今日。
　四月一二日だ。
　ガタン、とキャビンが最上段に着いた。
　発射場から盛大な歓声が沸き上がる。
「宇宙飛行士レフ・レプス同志！　万歳！」
　地上では皆がレフに羨せん望ぼうの眼まな差ざしを向け、千ち切ぎれんばかりに手を振っている。
　そうだ。自分は皆の夢を背負っている。
　レフは笑顔で皆に手を振り返す。

「行ってきます！」
　そして、遠く離れたサングラードにいるイリナに、心の中で呼びかける。
　君の想いはわかった。
　君に負けない立派な宇宙飛行士として、任務を果たす。
　そして、きっと再会しよう、『彼岸花リカリス』。

　午前七時三〇分。
　多くの共和国民は朝食を終え、仕事や学校へ向かい始める頃。
　地球の真裏にある連合王国は、夜も更けて、眠りにつく頃。
　レフは狭苦しいキャビン内で、静かに唸うなるバルブやモーターの音を聴きながら、一時間半後に迫った打ち上げを待つ。
　計器類は、正常な数値を示している。
　天井には、イリナのときと同じように、黒竜のぬいぐるみが吊り下げられている。
　閉じられたハッチの接合部には、小型爆薬がセットされている。飛翔に失敗するような緊急事態が起きたとき、ハッチを爆破して脱出可能にするためのものだ。
　三つの舷窓からは、どういう風景が見られるだろうか。
《―『十五夜草アスタル』、こちら『夜明けザリヤー』。フラップに入っているのは非常食だ。腹が減っても食べるなよ》
　発射管制棟ブロツクハウスのコローヴィンから冗談交じりの通信が入ると、レフも冗談で返す。
「大丈夫です、宇宙食はまずいので食べる気になりません」
《―サラミソーセージも入っている》
「残念。おつまみがあっても、禁酒中です」

《―問題ない。無重力では酔った気分になるらしい》
　通信の向こうで笑い声が起きた。
　皆、随分とリラックスしている。それもそのはず、イリナの打ち上げで一度経験済みなのだから。
　とはいえ、遺書が必要なほど危険なことには変わりない。
　予定時刻が迫ると、緊張が高まり、余計な会話はなくなる。
　八時四一分。
《―『十五夜草』、あと一五分だ》
「了解」
　脈拍、呼吸数は正常。
　グローブを着用、ヘルメットの前面を閉じる。
　時計の針が進むたび、記憶が脳裏を駆け巡る。
　木製の飛行機で屋根から落っこちた少年時代、両親に月旅行の話をした。
　今日行くのは月ではないが、空想の世界だった宇宙を飛ぶ。
　両親には遺書ではなく、成功のニュースを伝えたい。
　いや、成功するに決まっている。
　皆の夢は砕けたりしない。
　イリナの命がけの飛行が無駄になるわけない。
　帰還したら、何があってもイリナに会いに行こう。そのとき、彼女はどういう顔をするだろう。
　何より、彼女は、どうなるのだろう。
　そう思ったとき。
《―メインエンジン点火！》
　凄すさまじい騒音が耳をつんざいた。
　集中しろ！
　レフは自分に言い聞かせる。

鼓動が激しくなる。
かすかにロケットが震える。
《―『十五夜草アスタル』、点火コマンド！》
「了解、点火！」
《―予備燃焼―中間燃焼―主燃焼―》
脈動が上がる。
《―飛べ！》
管制棟からの号令。
クレーンの支持部材が外れる音。
エンジンの唸うなり。
振動と轟ごう音おんが全身を揺すぶる。
噴射口から炎が噴き出す。
非常事態での脱出に備え、神経を研ぎ澄ます。
一秒、一秒が永遠と思える。
そして。
ゆっくり、
ゆっくりと、
機体が重力を打ち破り、
発射台から浮かび上がる。
午前九時六分五九・七秒。
「さあ、行くぞ！」
地球に身体からだを引っ張られながら、突き抜ける青空へ。
キャビン内は騒音風呂になる。
エンジン音、通気装置の換気音、生命維持装置の作動音。通信機の交信音。
宇宙はまだ先だ。
やがて一分を過ぎると、振動が変わり、揺れ幅が大きくなった。

「『夜明けザリヤー』、願う。こちら『十五夜草アスタル』」
　頬ほおが突っ張って、声を出しにくい。
《──こちら『夜明け』》
　コローヴィンが早口で返した。
「気分良好。順調に飛んでます。そちらは？」
《──問題なし。順調だ》
　計器に乱れはない。
　一五〇秒、覗き窓ヴゾールを覆おおっていたカバーが外れ、地上が見えた。
「今、地球を眺めています。美しい」
　景色に見み惚とれていてはいけない。
　地上と交信するのが任務だ。
「気分は良好。機器も良好」
　交信の内容は、イリナがしゃべることを許されなかった自分の状態、宇宙船の状態、そして──地球の姿を、短い言葉で繰り返す。
「大河が見えます。海岸線、大地の起伏、広大な森林」
　地上がみるみるうちに小さくなる。
「地平線が見えます。白い雲が見えます。美しい」
　あれこれ考えている暇ひまはない。
　見たものを機械的に言葉にする。
　できるだけ簡潔に航行日誌に書き留める。
　故郷の上空を通過する。
　両親はまだ知らない。
　国営通信ＴＡЦＣの一報は、宇宙到達後だ。
『彼岸花リカリス』。
　宙そらを見上げてほしい。
　君が描いた星への道を、今飛んでいる。

一段目のエンジン切り離しで、フッ……と速度が落ち、ドンッと突き上げられるように再加速した。上昇の負荷が身体からだに圧おしかかる。

「『夜明け』へ。積雲が地表を覆っています」

一二月の打ち上げ時、イリナはこのあたりで意識を失い、交信が途絶えた。

だが、レフは耐えられる。

石壁に衝突するような過酷な訓練の賜たま物ものだろう。

そして。

午前九時二一分。

突然、身体からだが軽くなった。

黒竜のぬいぐるみがふわりと浮き、鉛えん筆ぴつが宙そらを泳ぐ。座席のベルトが浮き上がろうとする身体を押さえつける。

宇宙に到達した興奮を極力抑え、交信する。

「無重力状態がはじまりました……！」

手や足から重さが消え、身体が自分のものではないような、ふわふわした不思議な感覚。

──私、酔ってるのかしら。身体がふわふわするの──

一二月に聴いたイリナの交信音声が、まるで耳元に彼女がいるかのように蘇よみがえる。

「……」

《──こちら『夜明けザリヤー』。『十五夜草アスタル』、応答願う》

知らぬ間に放心していたレフは、機器を確認すると、落ち着いて返す。

「こちら『十五夜草』。湿度六五％、温度二〇度、キャビンは正常。無重力状態に適応しています。身体がとても軽いです」

続いて、覗き窓ヴゾールから、地球が見えた。

「あっ……！」
　心臓を鷲わし掴づかみにされた。
「地球が。地球の丸い形が、見えます」
　だが、その光景は、イリナに聞いた内容そのものだ。

　──透明な青いヴェールに包まれてて……すごく綺き麗れいだった──

「地球は、透明な青いヴェールに包まれています」

　交信で伝える内容も。

　──あの星に住んでるんだって思うと、不思議だった──

　感じることも。

　すべて、あの雪原で彼女が語ったとおりだ。
　宇宙は、すでに未知の世界ではなかった。

　砂漠に影を落とす雲。
　太陽を浴びてきらめく海。
　熱帯雨林を縫ぬって流れる大河。
　積乱雲の中を飛びかう稲いな妻ずま。

　全部、イリナの見た景色だ。
　写真や地図でしか見たことのなかった世界は、彼女の言葉で、既に知っていた。
　レフは航行日誌を書いていた手を止める。

　これに、何の価値があるだろう。
　彼女の日誌で十分じゃないか。
「こんなの……」
　交信中にもかかわらず、レフは思わず呟いてしまった。
《──『十五夜草アスタル』、どうした？》
「あ、いえ、景色に見み惚とれて、つい……」
　咄とつ嗟さに言い繕つくろう。
　そしてレフは、任務を果たすために、機械のようになって交信を続ける。
「地球と宇宙の境目は、とても綺き麗れいです」
　レフは交信する。
　彼女の言葉と同じことを。
　彼女の航行日誌と同じことを。
　自分の言葉として。
　史上初の宇宙飛行士の言葉として。
　地上へ伝える。
「宇宙は黒い。黒い闇やみです」

　──星々は茴香芹チヤービルの花みたいで──

　君の目には、星が花に見えたんだな。
　レフは、自分ならば、そんな詩的な表現は考えつかなかっただろうと尊敬の念を抱く。
　それなのに。

「星々は、花が……可憐な茴香芹が咲いているように、煌きらめいています」

無意識に、そのまま口にしてしまった。
史上初めて宇宙を見た彼女の言葉を公式記録として残すべきなのか、自分の言葉で伝えるべきなのか、混乱する。

藍あいから紺こんへと移ろいゆく色彩の地平線。
地球を覆おおう美麗で透明なオーロラ。

神々しい光景を目にするほど、自分の心の穢けがれがあぶり出される。
イリナの言葉が幻聴のように頭に響く。

──月も綺き麗れいに見えたの──

「月は……、月は……」

月は、レフから姿を隠してしまったかのように、どこにも見えない。

──虹の入り江……夢の湖……眠りの沼……──

彼女が詠うたった月の詩は、記憶の彼方かなたへ、儚はかなく消えてゆく。

「……月は、ここからは、見えません」

自分の存在は、何だろうか。
もしも宇宙に神がいるのならば、史上初の宇宙飛行士を演じて交信し

ている自分を罰ばつするだろうか。

　──私、絶対に月に行きたいって……まだ死にたくないって思った──

　狭く暗い独房のようなキャビンに、宇宙の闇やみが侵食してくる。
　発射場でサインを書いたときの違和感が蘇よみがえる。
　あのサインに何の価値がある。
　史上初の宇宙飛行士ではない、第二号のサインに。
「イリナ……」
　レフは、一〇〇キロメートルより遠く離れた地球にいるイリナに問う。

　君が宙ここから伝えてくれた、茱萸グミの実の浸酒ナストイカや『愛しのあなた』のこと。
　あの通信を聴いたとき、君の想いに胸を打たれ、熱いものが込み上げた。
　それに比べて、今自分が送っている言葉は、君が望むものではなく、世界が望むものだ。
　君に伝えたい。君の飛行を蔑ないがしろにしているわけではないのだと。
　君こそが、真の宇宙飛行士なのだと。

「……この成功を、肉の煮凝りホロデーツで、お祝いしましょう。精一杯の感謝を込めて」

　しかし、胸に芽め生ばえていた矛む盾じゆんは、全身に拡がっていく。

　無重力で軽くなっていた身体からだは、鉛のように重くなっていった。

　緋の瞳　Очи　индиго

　一〇時二分、打ち上げから遅れること約一時間。
　サングラードの街角、鉄柱の拡声器から、重要なニュースを知らせる信号音がけたたましく鳴り響く。
《こちらはサングラード！　こちらはサングラード！》
　通行人は立ち止まり、何が起きたのだろうと不安そうに耳を傾ける。
　国営通信ＴＡＵＣが成功を告つげる第一報を打つ。
《一九六一年四月一二日。共和国から、人間を乗せた宇宙船『ミェチタ』号が、宇宙に飛び立ちました！》
「……宇宙？」
「またデマじゃないのか？」
　市民たちは半信半疑で続報を待つ。
《搭乗者は、ツィルニトラ共和国連邦市民、共和国空軍のレフ・レプス少佐です！》
　飛行中に二階級特進したレフの名が告げられると、瞬時にざわめきが生じた。
「本当か……!?」
　拡声器に人々が続々と群がり、顔を見合わせ、次第に微ほほ笑えみ、頬ほおが紅こう潮ちようしていく。
《宇宙飛行士レフ・レプス少佐は、無重力状態に耐えて、元気に飛行中です！》
　人々はいっせいに空を見上げる。

あらゆる交通機関が止まり、拡声器やラジオに市民が殺到する。
《今、宇宙征服の新しい時代がやってきたのです！》
「レフ・レプス少佐！」
市民たちは、喜びを爆発させる。
「万歳！　万歳！　万歳！」
勝利の雄叫びが街中に轟とどろく。
通りかかった空軍将校が、熱狂した市民に胴上げされる。
「共和国空軍、万歳！」
見ず知らずの人たちが抱き合い、接せつ吻ぷんを交わす。
学校でラジオ放送が流れると、教師も生徒も教科書を放り投げた。
「授業中止！」
外に飛び出し、空に向かって両手を振る。
「レフ！　レフ！」
ニュースは瞬またたく間に国中に広がり、あらゆる町や村の広場や集会場が、人の渦で埋め尽くされていく。
共和国の東の果てにあるレフの故郷は、蜂の巣を突ついたような大騒ぎだ。
何も聞かされていなかったレフの父は農作業をしており、最初はまったく信じなかった。
「息子は少佐じゃない。人違いだろ」
だが、村の共同電話に中央委員会からの直電があり、腰が砕けた。
母は、天に向かって手を合わせ、我が子の生還を祈る。
「なんでもいいから、無事に戻ってきて……」

有人飛行成功のニュースは、世界を震しん撼かんさせた。
各国にある共和国の大使館には問い合わせが殺到し、電話回線はパンク。

　真夜中の連合王国に、どんな悪夢よりも恐ろしい爆弾が落とされた。
「レフ・レプス！」
　たった一時間前までは無名だった空軍中尉が、歴史に名を刻む英雄となった。
　世界中の人々は、新時代への扉がレフによって開かれたと歓喜した。
　そして――

「――万歳！　万歳！　万歳！」
「……んっ？」
　軍科学病院の個室で眠っていたイリナは、外から聞こえる熱狂的な叫び声で目を覚ました。
「な、なに……？」
「――レフ・レプス！　万歳！」
「レフ!?」
　イリナは異変を感じて飛び起きると、閉め切っていたカーテンを少し開ける。
　太陽の明るい光が目に沁しみるが、見えた街の情景は、目の痛みなど忘れてしまうほど衝撃的だった。
「えっ……!?」
　国旗やプラカードを持った人々が大通りを埋め尽くし、国がひっくり返ったようだ。寝ているあいだに何があったのか見当もつかないが、プラカードに『宇宙』という文字が確認できた。
「ま、まさか……」
　イリナが立ち尽くしていると、個室の扉がガラッと勢いよく開く。
「と、と、飛びましたっ……！」
　血相を変えたアーニャがおののいた声を上げる。

「なにが!?」
「レフさんが、今、宇宙を飛んでます！」
「今!?」
「今です！」
　イリナは、もう、居ても立っても居られない。
「屋上行くっ！」
　扉の前にいるアーニャを突き飛ばすようにして、イリナは寝巻きのまま部屋を駆け出す。
　廊下にいる〔運送屋〕は、ラジオを聴きながら窓の外を夢中で見ており、イリナに気づかない。看護員や研究者も仕事を放棄して、患者とラジオを大音量で聞いている。
　イリナは寝癖のついた黒髪をなびかせて廊下を走る。
「レフ……！」
　アーニャはイリナの上着を持って、慌あわてて追いかける。
「待ってください！」
　呼び止められてもイリナは振り向かずに、階段を一段飛びで駆け上がり、屋上へ飛び出す。
「万歳！」「レプス少佐！」
　屋上は、少しでも宇宙に近づこうとした人々で溢あふれている。皆、国旗を振り上げ、感激して涙を流し、抱き合っている。
　空を見るイリナに、太陽の光が降り注そそぐ。むき出しの肌や目が、熱い針山で撫なでられるように痛む。
「くっ……」
　イリナは耐えられず、給水塔の陰に逃げ込んでしゃがむ。そこへ、アーニャが息を切らして追いつき、イリナに慌あわてて上着を差し出す。
「着てください」

「ありがとう……」
　イリナは上着を羽織り、フードを被かぶって空を見上げる。
　真っ青な空に、宇宙船は見えない。
　見えないとわかっているのに、どこにいるか探してしまう。
「レフ、本当に、飛んでいるの……？」
　ラジオが大音声で煽あおりたてる。
《レフ・レプス少佐！　今、連合王国の上を飛んでいます！》
　市民の歓声が爆発し、地鳴りが起きる。
「共和国の勝利！」「人類の勝利！」「史上初！　宇宙飛行士！　レフ！　レフ！」
　歓喜の波がイリナに押し寄せる。
　レフが宇宙を飛んだ。
　レフの夢が叶った。
「よかった……」
　大好きなレフを、皆が褒ほめている。
　設計局なんて嘘うそを吐ついてよかった。
《レフ・レプス少佐、万歳！》
「万歳！」「万歳！」「万歳！」
　イリナも、市民に合わせて声を上げる。
「万歳……！　万歳……！」
　胸がいっぱいになり、涙が零こぼれそうになる。
　アーニャも嬉しそうに空を見上げ、拍手をしている。
　街中がレフを祝福しているのをイリナは肌で感じて、胸が幸せで満ちる。だが、その一方で、これまで気にもしなかった思いが、胸の奥底に湧わいた。
　その思いを、イリナは自じ嘲ちよう気味に、アーニャの耳元で囁ささやく。

「私のときなんて、隠れて缶詰食べただけなのにね」
「そうでしたね……」
　アーニャは困ったように苦笑する。
　あのとき、イリナは人間に祝福してほしいとはまったく思わなかったが、自分とレフのあまりの差に、頭や心の理解が追いつかない。
《史上初の宇宙飛行士に、人類の勝利に、盛大な拍手を！》
　街中が割れ返るような拍手に包まれる中で、イリナは異様な孤独に突き落とされた。

　──私は、何なの？

《レプス少佐は語りました！　地球は、透明な青いヴェールに包まれていると！》

　──それ、私が言ったことだよ。

《星々は、可憐な茴香芹チヤービルが咲いているように見えるそうです！》

　──それも、私が言った。
　──あなたは、茴香芹を、知らなかった。
　──どうして、私の言ったことを、そのまま言うの？

「レフ……」
　嫉しつ妬とめいた感情に支配されそうになったイリナは、首を横に振る。

―違う！

イリナは、一〇〇キロメートルより遠く離れた宇宙にいるレフに問う。

―あなたは、私の言葉を、代わりに語ってくれているんだよね？

《肉の煮凝りホロデーツでお祝いしましょうとのことです！》

ほら、やっぱり。
私がレフのために、お祝いで作った料理だ。
彼は私を忘れてなんかない。
彼は、誰にも言えない私の代わりに、私の言葉を伝えてくれたんだ。
私の航行日誌はきっと燃やされてしまうから、代わりに残してくれた……。
交信音声も消されて……何もなくなってしまうから……。
私はどうなるの。
このまま私は、消えてなくなっちゃうの。
あなたと月に、行けないの……。
殺されちゃうの……。
いやだ。死にたくない。

「助けて……」
口に出した途端、心の底に抑えつけていた不安が怒涛のごとく流れ出る。
堪こらえきれず、イリナの目から、ぼろぼろと涙が零こぼれる。
胸がずきずき痛む。

つらくて、息が苦しい。
「うっ……うっ……」
イリナはうつむいて唇を噛かみしめるが、嗚お咽えつが止まらない。
泣きたくないのに、涙が溢あふれてしまう。
泣き虫の自分が嫌で嫌でしょうがない。
見られたくなくて、顔を隠すようにフードを強く握にぎり締める。
「うぅっ……」
じりじりと太陽に焼かれるイリナの手に、温かく柔らかな感触があった。
フードの裾から覗のぞき見ると、アーニャが心配そうに、イリナの手を包むように握っていた。
「……な、なによ……」
アーニャはイリナの前に移動して、日差しを遮さえぎるように座り直す。
「大丈夫ですか」
同情するように覗き込まれたイリナは、再びうつむき、目を逸そらす。
「……そういう目は、嫌い……」
声は弱々しく震え、涙がぽたぽたと地面に落ちる。
消え去りたくなるような思いでイリナが小さく縮こまっていると、突然、フードの上からアーニャにぎゅっと抱きしめられた。
「あっ……」
ハッとなったイリナの耳に、フード越しに、アーニャの優しい声が聞こえる。
「一緒に頑張って作った肉の煮凝りホロデーツ、言ってくれましたね……よかったですね」
「……知らない……」

イリナは意地を張ろうとしたが、涙が止まらない。アーニャの胸の中で、彼女の鼓動や、温かい息遣いを感じながら嗚咽を続け、身体からだを震わせる。
「イリナちゃんが、ずっと頑張ってたの、知ってます……。イリナちゃんの祝賀会、缶詰なんかじゃなくて、もっとお祝いしてあげたかった。でも、ごめんさない……。一緒にご飯を食べたり、お話ししたりするくらいしかできなかった……ごめんなさい」
それで十分だよと、イリナは伝えたかった。
本当は、ずっとアーニャに感謝していた。
レフと会えなくなっても、彼女が傍そばにいてくれた。
新年のお祝いは、すごく嬉しくて。
彼女のおせっかいのお陰で、レフとデートもできた。
サングラードに来てからも、毎日散歩に付き合ってくれて。
もし、ひとりぼっちで検査をされていたら、きっと耐えられずに、潰つぶれていた。
彼女が支えてくれたから、レフが宇宙飛行士になった日をこうして迎えることができた。
その感謝を伝えたくても、イリナは涙が止まらなくて、喉のどが震えて、言葉にならない。
だから。
イリナはアーニャを強く抱き締め返す。
ぎゅっと、想いが伝わるように。
ありがとうって。

周りの人々は空を見上げており、誰もふたりを気にもしない。
「宇宙飛行士レフ・レプス少佐！　万歳！」
新しい希望に満ちた世界で、ふたりだけが日陰に沈んでいた。

第七章　祖国の英雄

藍の瞳　Очи　индиго

晴れ渡った青空をレフはパラシュートで降下し、無事、地面に降り立つ。

総飛行時間一〇八分の旅が終わった。

「……はぁ。着いた……んだよな……」

宇宙飛行を達成した喜びよりも、生還した安あん堵どが大きい。

近くで畑仕事をしていた老婆と少女が、宇宙服を着ているレフを奇妙な目で見る。少女は恐怖を感じたように、牛の背中に隠れた。

レフはヘルメットを脱ぎ、宙そらを指さす。

「怖がらないでください。私は、宇宙から帰ってきたんです」

怯おびえていた老婆だが、まじまじとレフを見つめる。

「……あなたが、ラジオで言ってた……レフさん？」

「はい、レフ・レプスです」

「史上初の、宇宙飛行士の……？」

「それは……ええと」

イリナを差し置いて、史上初を名乗っていいのかレフが戸と惑まどっていると──

「きゃあ！　レプス同志!?」

少女が甲高い声を上げる。

「は、はい」

「みんな来て!!　宇宙飛行士!!　本物よ!!　本物のレプス同志!!」

近くで作業をしている仲間に少女が大声で呼びかけると、皆は最初信じられない顔をしたが、すぐに農具を放り投げ、我先に走り寄ってくる。

　レフは務めを果たさねばと、戸惑いを隠し、笑いかける。
「こんにちは、同志のみなさん。宇宙飛行士のレフ・レプスです」
「同志！　万歳！」
　あっという間にレフは興奮した農民たちに取り囲まれ、握手やサインをねだられ、記念写真を撮られる。
　数分もすると、空軍のトラック団が猛スピードで走ってきた。
　軍人が身を乗り出す。
「レフ・レプス少佐殿！」
「少佐？　私は……」
　中尉と言いかけて、口をつぐんだ。おそらく飛行中に昇進したのだろう。
　軍人は騒いでいる農民に「着陸をはっきり見たか？」と確認する。
「はい！　彼はパラシュートで―」
　老婆が嬉しそうに言うのを軍人が遮さえぎる。
「パラシュートで降下はしていない！　宇宙船でそのまま降りた！　いいな！」
　早くも情報統制が始まっていた。

　降下地点から最寄りの空軍基地に入ったレフは、士官本部の電話を使い、ゲルギエフ第一書記に帰還の報告をする。国の最高指導者と電話するなど、補欠だった自分に言ったら信じないだろうが、夢ではなく現実だった。
　電話越しのゲルギエフは、穏やかな口調でレフに話しかける。
「親愛なるレフ・レプス。宇宙飛行を達成した貴方に挨あい拶さつできて、至上の喜びです」
　通話がすべて記録されていることを念頭に置き、レフは言葉を選んで返す。

「同志の皆様のお陰で、無事に任務を終えることができました」
　レフが飛行報告をすると、ゲルギエフはひとつひとつに感嘆し、褒め称える。
「同志レプス。貴方の名は、史上初めて宇宙を飛んだ人間として、地球の歴史に、永久不滅のものとして刻まれるでしょう」
　大仰に聞こえるが、人類が滅亡しない限り、何千、何万年と語り継がれるだろう。
　その名が自分であることが、やはりレフは居い心ごこ地ちが悪い。
　電話の最後に、ゲルギエフは、サングラードで大々的な凱がい旋せん祝典を開くと告つげた。
「明後日、一四日に開催を予定しています。何十万人という国民が参加するでしょう。素晴らしい偉業を、世界の人々に伝えましょう！」
　電話を終えたレフは、少佐の肩章がついた新品の軍服を着せられ、休憩や検査のために、近郊の農業都市・ヴォルシェフ市へ飛行機で飛ぶ。
　すべての予定が細かく決められており、レフはまだ両親に連絡を取れていない。両親に電話をしたい旨を案内役の軍人に伝えたが、「おふたりは祝典に来るそうだ」と一いつ蹴しゆうされた。
　おそらく『国民の前で感動の再会』という演出を狙っているのだろうとレフは感じた。
　果たして、この先いったい、どうなるんだろうか。
　イリナは、今日の宇宙飛行を知っているのだろうか。
　考えても答えの出ない疑問が、ぐるぐると頭の中を回る。
　飛行機の窓から見える湿地帯の風景は、宇宙飛行の前と何も変わらないが、レフは宇宙を飛ぶ前よりも、ずっと身体からだも心も重たく感じていた。

　ヴォルシェフ市の飛行場は、レフの到着を聞きつけた数千人の見物客

でごった返し、軍隊が出動する騒ぎになっている。
　プラカードや市民の衣服には、英雄を歓迎するメッセージが満載だ。
【ツィルニトラ連邦内、宇宙国】
【大勝利！】
【宇宙は我らのもの！】
　群衆の注目を一身に集めるレフは、手を振られれば笑顔を返し、サインを求められれば快こころよく応じる。
　夢と希望を背負った宇宙飛行士として、正しい振る舞いだ。
　だが、レフの心に根を張った矛む盾じゆんの芽は、祝福されるほど大きくなっていく。

　市民の饗きよう宴えんを避けるように、レフは静かな河畔の別荘ダーチヤに連れ込まれた。別荘の周囲は歩ほ哨しようによって警備され、近寄る市民は容赦なく追い返される。
　広い寝室でレフはようやく一息つき、宇宙食ではない豪勢な夕食で腹を満たし、数か月ぶりの蒸留酒ジーズニを口にすると、ようやく生きている実感を得た。
　しかし、医師団による身体検査を受けている最中、テレビで夜のニュースが始まると、一度は落ち着いた心にさざ波が立った。
「人類史上初の宇宙飛行士、レフ・レプス少佐の肉声が届いています！」
　ニュースキャスターは喜々として報じ、ノイズにまみれた交信音声が流される。
《地球は、透明な青いヴェールに包まれています》
《星々は、花が……可憐な茴香芹チヤービルが咲いているように、煌きらめいています》
　そして、ニュースキャスターは極上の笑みを浮かべる。

「官邸には、世界のすべての国から祝電が届いています！　また、今日生まれた赤ちゃんには『レフ』という名前がたくさんつけられました！」

　レフは耳を塞ふさぎたかった。交信音声や祝福に、少しずつ魂を削り取られていく。

「顔色が悪いが、大丈夫か？」

　医師に声をかけられ、レフは気を取り直す。

「あ、はい……ちょっと疲れたのかもしれません。こんな歓迎に慣れてないので……」

「わはは！　そりゃ史上初だからな、慣れてる人などいないよ！」

　別荘に笑いが広がる。

　──違う、史上初はイリナ・ルミネスクだ。

　真実を明かしたいという思いが沸き立つ。

　だが、もしそんなことを口走れば、「宇宙で調子を崩した」として閉鎖病棟に閉じ込められてしまうだろう。

　重い表情のレフを医師は気にかけたのか、室内の人々に注意を呼びかける。

「お静かに。我らが英雄を早く休ませてあげよう。明日も予定はみっちりだからな」

　皆、レフを気遣い、祝い酒もほどほどに早々と退出していく。

　そんな様子を見て、レフはしっかりしなければと反省する。もし、「君よりもミハイルやローザのほうが良かった」などと言われたら、ふたりにも、自分を選んでくれた人にも、そしてイリナにも合わせる顔がない。

　一日経っても、騒ぎはまったく収まらない。

それどころか、世界中を巻き込んで過熱している。

連合王国では政府首脳による緊急会見が開かれて「最悪なニュースだ」と完敗を認め、『アーナックニューズ』も《共和国が夢を叶えた頃、我が国はベッドで夢の中だった》と自じ虐ぎやくした。

共和国の各紙は輝かしく勝利を誇り、一面にレフの写真が大きく載った。

一方で、最大の功労者であるコローヴィンは、写真どころか名前もなく、本文中に「設計技師長チーフデザイナーらの尽力により―」と肩書きが小さく載ったのみ。計画が成功に終わっても、コローヴィンは変わらず国家機密だった。

執務室の革張りのソファーで『真実イースチナ』紙を読んでいたレフは、イリナも国家機密という面では同じかと思ったが、すぐに根本的に違うと気づいた。

コローヴィンは唯一無二の天才科学者だが、実験体であるイリナは、宇宙飛行が終わった今、いなくなっても誰も困らない。

「……ああ、もうやめよう」

レフは『真実』紙を忌ま忌ましく放り投げると、昼食後に行われる取材に備えて、航行日誌の複写を手に取る。各国の報道陣が入る記者会見は後日に予定されており、今日は『真実』紙と国営通信ＴＡЦＣの二社だけになる。ここで答えた内容が『公式記事』として全世界に配信されるため、間違えずに伝えなければと、否が応でも気合いが入る。

航行日誌を読み返すと、打ち上げ時の記憶がまざまざと蘇よみがえる。そして、宇宙飛行の気分に浸ろうとしていると、自分の文字に、イリナの丸文字が重なって見えた。

「はぁ……」

溜ため息いきをこぼし、ソファーに身体からだを預ける。

無重力が悪影響を及ぼしたのではないかと疑いたくなるほど、イリナ

のことが気にかかり、考えれば考えるほど、彼女の現状が不安になる。
　設計局に勤つとめるのでないならば、どこに連れていかれるんだ。
　航行日誌を前にして項うな垂だれていると、扉がノックされた。
「入るぞ」
　聞き覚えのある低い声がして、扉が開く。
　のしのしと入ってきたのは、帽子を深くかぶって変装したような男──コローヴィンだった。コローヴィンは帽子のつばを上げ、レフを見ると、にやりと微ほほ笑えむ。
「チーフ！」
　レフは跳ねるように立ち上がり、コローヴィンに歩み寄る。
　一日ぶりだというのに、何年も会っていなかった恩師に再会したような懐かしさを覚える。
　ふたりはきつく抱擁し、成功を称え合う。
「よくぞ戻ってきた。私の小さな翼竜ジラントよ」
「はい……！」
　コローヴィンは潤うるんで充血した瞳ひとみをレフに向ける。
「今だから言う。イリナ・ルミネスクの打ち上げで不具合がいくつも見つかり、絶望に苛さいなまれた時期もあった。だが、君は帰ってきてくれた。ありがとう」
　目じりに皺しわを作って笑うコローヴィン。
　イリナの状況について変化があったのか訊ききたいが、その件は打ち上げ直前に話し、やんわりと否定されたばかりだ。それに、長年の夢を叶えて上機嫌のところに水を差したくない。もし、イリナに何かあったのならば、向こうから話してくれるだろう。そう思い、レフは訊くのをやめる。
　何より、気になるのは、イリナのことだけではなかった。
「ミハイルやローザたちは、どうしているんですか？」

「とても喜んでいたぞ。君に会いたがっているが、彼らは宙そらを飛ぶまでは『名もなき空軍中尉』でなければならないので、ここに来ると正体を疑われてしまう。だから、サングラードの祝典で、一般市民に混じって祝う。まあ、私もそうだがな。君に挨あい拶さつもできたし、これで失礼するよ」

　コローヴィンはレフを再度抱きしめると、すぐに部屋を出ようとする。

「チーフ、あの……！」

「なんだね」

　レフは新聞を指す。

「チーフについて、全然書かれていません」

　国家の事情だと理解していたが、自分だけが写真入りで大きく扱われるのは後ろめたさがあり、言いたくなってしまった。

　だが、コローヴィンは笑い飛ばす。

「ははっ！　構わんよ。顔を出して開発予算が増えるなら、写真集でも出版してやるがね！　それに、私はまだ夢の途中だ。宇宙遊泳、そして月へ、火星へ人間を送り込む。宇宙ステーションと月面基地を建設する。それを達成した暁には、銅像のひとつでも建ててもらおうか！」

　コローヴィンもイリナも、夢を実現するために国家を利用し、そしてイリナもまた、有名になることなど望んでいなかった。「人間よりも先に宇宙を飛びたい」と言っていた彼女に、新聞の一面を飾りたいという気持ちはあるのだろうか？

　そんなことをぼんやり考えていたレフは、コローヴィンにいきなり頬ほおをつねられた。

「痛っ！」

「『彼岸花リカリス』と再会したいと思っているのだろう、『十五夜草アスタル』よ？」

「あ……」
　コローヴィンは「わかりやすい男だ」と一笑した。
「すみません……」
　レフが頭を下げると、コローヴィンは煙草たばこを取り出しながら、ぶっきらぼうに言う。
「昨夜、私なりにゲルギエフ同志に働きかけてみたが、とくに反応は返ってこない。まあ、期待しないでくれ」
「わかりました……」
　打ち上げ後でおそらく慌あわただしかったなか、コローヴィンが動いてくれたことがレフは嬉しかった。だが、彼の浮かない表情を見ていると、言葉どおり期待できそうになかった。
　コローヴィンは煙草に火を点つけると、苦々しい顔つきでふかす。
「最初に言っただろう。すべてを犠牲にする覚悟はあるかと」
　候補生に復帰したときにかけられた言葉を、レフは思い出す。
　──史上初の宇宙飛行士となれば、重大な責任が生涯つきまとう。君の言葉は、君だけのものではなくなる。祖国のために人生をなげうち、大切な人を犠牲にするという選択を迫られることもあるだろう。君に、その覚悟はあるか──
　甘く考えていたわけではないが、想像を超えた重圧に押し潰つぶされそうだった。
　レフが思い悩んでいると、コローヴィンは真っ直ぐにレフを見据える。
「私がなぜ、君を宇宙飛行士に推したかわかるか？」
「……いえ」
「君ならば、覚悟を持って、世界市民を新時代へ導けると判断した」
「私が……」
　あまりにも大きな課題を突き付けられ、レフは背中に冷や汗が滲にじ

む。
「では翼竜ジラントよ。祝典を楽しみにしている」
　コローヴィンは穏やかな笑みを残して去っていった。
「覚悟か……」
　しばらく考えていたが、出口のない迷宮に入ってしまいそうだった。
　取材の準備をしなければと、航行日誌を再び取る。記者を失望させないようにしっかりと応えて、皆が求める英雄を―史上初の宇宙飛行士を立派に演じなければ。
　演じる？
「ははっ……」
　自分は何者なんだと自じ嘲ちようしたが、よくわからなかった。

　午後になって、レフの取材が始まった。
「人類の英雄であるあなたに、国民として初めて話を伺うかがえること、光栄の極みです！」
　記者たちは興奮を隠さず、熱烈な声を上げる。酒臭いのは、祝杯を浴びるように飲んだのだろうとレフは想像した。
　羨せん望ぼうと尊敬の眼まな差ざしを向けてくる『真実イースチナ』紙の記者に、レフは飛行時の体験を詳細に伝える。
　期待や緊張、覗き窓ヴゾールから見えた風景、無重力について。ただし、発射基地やロケットについては軍事機密のため、いっさい話さない。それに、間違っても「遺書を書いた」などと答えてはならない。
　記者は身を乗り出し、レフに食いつく勢いで質問を繰り出す。
「宇宙はどうでしたか!?」
　レフは言い間違えのないように、ゆっくりと返す。
「とても暗かったです。真っ黒でした。星々は、地球から見るより何百倍も明るく、輝いてました」

「では、地球はどう見えましたか!?」
「青みがかっていました。青いヴェールがかかって、光り輝いていました」
　イリナの言葉を代理で告つげているようで、次第に罪悪感を覚える。
　レフの心が冷えていく一方で、記者の声はさらに熱を帯おびる。
「なるほど、地球は青かったと！　それでは月は!?」
「残念ながら、見えませんでした。しかし、月は我々の到着を待っているでしょう」
　笑顔を絶やさないレフだが、藍あい色いろの瞳ひとみは煌きらめきを失っている。
　そして、取材は滞とどこおりなく進み、記者の質問も終わりに近づく。
「先日、スホイシン大尉のデマが流れましたね？」
「『夢の六人ミエチタ・シエスチ』の皆で笑っていました。宇宙病にかかった人の幻想でしょう」
　回答しながら、もしイリナのことが世間に知られたらどうなるだろうと考える。おそらくイリナはこっそり処分されて、政府がデマと断言するはずだ。仮に目の前にいる『真実』紙の記者に「『真実』の宇宙飛行士は吸血鬼の少女だ」と言ってみたとして、間違いなく検閲で削除されるから、言うだけ無駄だ。
「では、次で最後です。『真実』の読者たちから、宇宙征服者であるあなたに、何万通もの手紙が届いています。同志たちに一言お願いします」
　宇宙征服者とは、なんと大おお袈げ裟さな言い方だ。
　レフは心の中で苦笑しつつも、真顔で答える。
「祖国の素晴らしい科学力が、我々の夢を宇宙へ導いたのです」
　以前ローザに指摘された『舌の上では蜂はち蜜みつ』が、今はそのと

おりだと思えた。

　長い取材のあと、レフは警備兵に囲まれながら、気分転換の散歩に出た。
　夕暮れの湖畔をぶらつくつもりだったが、宇宙病に侵された市民が蟻ありのように群がり、騒ぎ立て、サインを求め、両手で抱えきれないほどのお祝いの菓子や果物を渡され、気が休まる暇ひまはない。
　へとへとになって別荘ダーチヤに戻ったレフは、庭先の長椅い子すに腰かけてアイスクリームを舐なめている女性を見つけて、ぎくりとした。
　漆しつ黒こくの儀礼服を纏まとったリュドミラだ。
「お久しぶり。約束どおり、宇宙飛行士に会いに来たわ」
「……何の用件ですか？」
　疲労困こん憊ぱいで神経質になっているレフは、裏の読めない彼女に警戒を示す。
　すると、リュドミラは拗すねたように口を尖とがらせ、アイスの棒でレフを指す。
「私の職業知ってる？　最高指導者のスピーチライターよ。それで今回は特別に、祝典の挨あい拶さつを君と一緒に考えることになったの。まずは空港で、ゲルギエフ同志への飛行報告会。その後、城塞区画ネグリンの大広場に移動して、二〇万の観衆の前で、凱がい旋せんの挨拶だからね」

　別荘の執務室に入ると、リュドミラはまず書状をレフに見せた。
「君には、ふたつの称号を授与することが決定したわよ。おめでとう」
　書状には、仰々しい名前の金星章が記されている。
『ツィルニトラ連邦英雄』、共和国最高の栄誉称号。

『ツィルニトラ連邦宇宙飛行士』、レフのために制定された新しい称号。
　あまりの栄誉に、レフは頭がくらくらする。若造が貰もらうには荷が重すぎる。
　リュドミラは部屋の隅に置いてあるお祝いの品を物色しながら、軽い調子でレフに言う。
「それから、君の銅像をサングラードに建てるって。着地地点には記念碑。記念メダルの発行と、切手や絵葉書が一〇〇〇万枚。全世界で翻訳される本も出版する予定よ」
「はい……」
　まったく嬉しくないが、レフは頷うなずくしかできない。
「それじゃ、連邦英雄の名にふさわしい挨拶文を書いてね。なんと、祝典は、共和国の歴史上初めて、全世界のテレビに生中継されるんだよ」
「え……？」
　テレビのない地域でも、ラジオで流れるとリュドミラは言う。
「全世界三〇億人に視聴されるなんて、ぞくっとするでしょ？」
　にこにこするリュドミラとは対照的に、レフは胃から酸っぱいものがこみ上げる。
「ほら、書いて。大丈夫、私が添削するから」
　リュドミラが新聞を読みながら菓子や果物をぱくぱく食べる傍かたわらで、レフは鉛えん筆ぴつを手に、真っ白な原稿用紙に向き合い、挨あい拶さつ文を考える。
　だが、なかなか筆が進まない。
　初めて宇宙へ、史上初の──と記すたびに、雪原で泣いていたイリナが思い浮かぶ。
　何気なしに『宇宙飛行士、イリナ・ルミネスク』と書きつけて、消しゴムでごしごし消す。

国家を礼賛する立派な挨拶を書けば書くほど、もやもやが溜まっていく。

レフは横目にリュドミラを盗み見る。

ゲルギエフの側近である彼女ならば、イリナの処遇を知ってるのではないか。もし、まだサングラードの病院にいるならば、祝典会場の目と鼻の先だ。明日、祝典を見に来るかだけでも聞けないだろうか。

すると、リュドミラはチョコレートの箱を開けながら、レフに言う。

「何チラチラ見てるの？　食べたいの？」

「あっ……はい、お腹空いたなって……」

イリナのことは訊きけず、レフは誤ご魔ま化かした。

「しょうがないなあ、これ食べていいよ。甘いものは頭に効くしね」

リュドミラはチョコレートをレフに渡すと、原稿用紙をかすめ取る。

「あっ、まだ書きかけ……」

「食べてるあいだに、添削してあげるわ」

にこやかに挨拶文を読み始めるリュドミラだが、途中でこめかみがぴくっとなり、原稿を指でなぞると、表情を険しくして吐き捨てる。

「〇点」

リュドミラは原稿をくしゃくしゃに丸める。

「祖国や最高指導者に対する感謝が全然足りない。ミハイル君だったらもっと上う手まく書くんじゃないの？」

「すみません……」

まったくそのとおりで、レフは素直に頭を下げる。再び書き始めようと鉛筆を取るレフに、リュドミラは訝いぶかしげな目を向ける。

「……ところで、君。ときどき上の空になってたけど、もしかしてイリナ・ルミネスクが気になってるんじゃないの？」

図星のレフはリュドミラにじっと見つめられ、あたふたする。

「い、いえ、そんなこと……」

「彼女なら、死んじゃったよ」
「……え？」
「死んだの」
　リュドミラは報告書を読むような淡々とした口調で、放心しているレフに告つげる。
「今朝の食事に、〔運送屋〕が青酸毒を混ぜた。吐血して苦しむ彼女の首を刎はねて、生き返らないように心臓を杭で貫いた。棺かん桶おけに詰めて燃やして、灰は地中深くに埋めた。彼女がいた痕こん跡せきは何もない」
　レフは頭が真っ白になった。
　全身の血管が凍りつき、息も吐けない。
　イリナが。
　死んだ。
「……」
「ぷっ、あははっ！」
　突然、リュドミラが吹きだした。
「なっ……」
「嘘うそだよ」
「は……？」
　呆ぼう然ぜんとなるレフを見て、けたけた笑うリュドミラ。
「嘘だってば。生きてるよ。あはは」

　怒りが腹の底から噴き出る。
「ふざけるな！」
　椅い子すを蹴けるようにレフは立ち上がった。
　瞬間、リュドミラは懐ふところから拳銃を出し、レフに銃口を向ける。
「っ！」
　戦せん慄りつがレフの身体からだを貫く。
　射抜くようなリュドミラの瞳ひとみは、激戦地から帰還した兵士と同じ闇やみを孕はらんでいる。
「座って」
　腸の煮えくり返るような憤いきどおりを湛たたえたまま、レフは腰を下ろす。
　リュドミラは銃をしまうと、ふふっと鼻で笑い、いつもの飄ひょう々ひょうとした調子に戻る。
「さっきの、全部嘘うそってわけじゃないわよ？　だって、処刑の話は出てるから。遅かれ早かれ、〔運送屋〕が殺すんじゃないの？　彼らは血も涙もない殺人機械だから」
　どの口が言うのだとレフは怒鳴りたかったが、大きく呼吸をして気持ちを抑える。
「……イリナは、どうなるんですか？」
「あのさ、『モノ扱い』、忘れたの？」
「……彼女が葬ほうむられるなんて、納得いきません……」
「要らないモノは処分して、綺き麗れいにする。それが祖国のやり方。わかってるよね？」
　レフは、戦争に反対して消された恩師の顔を思い出し、胸が痛くなる。
　国にとっては不要でも、自分には大切なものが、消されていく。

そんな国から称号を授かり、感謝と礼賛の挨あい拶さつをするのか。
憤怒にも似たわだかまりが噴き出し、レフが口をつぐんでいると、リュドミラは呆あきれたようにチョコレートをつまむ。
「君の人生は、昨日から変わったの。君は『人類史上初の宇宙飛行士』。それが君に与えられた人生の責務」
自分が英雄として生きていく裏で、イリナはひっそりと消える。
英雄を演じなければ、銃口を向けられる。
仕方ないのか。
歯は軋ぎしりするレフに、リュドミラは朗ほがらかに話しかける。
「勿もち論ろん、責務には見返りもあるからね。来月には、世界一周してもらう予定。各国の美お味いしい名物料理がたくさん食べられるよ。美女もよりどりみどり」
そんなものは望んでいない。
行き場のない憤りを押し隠し、レフは鉛えん筆ぴつを握にぎり締める。
するとリュドミラは、レフを覗のぞき込んで、小首を傾げる。
「ねえ、私が宇宙飛行士に望んだもの、覚えてる？」
「……新世界へ導いてくれる革命家」
「そう」
リュドミラは部屋の片隅にある電気蓄音機にレコードを置き、『新世界』という副題を持つ交響曲をかける。
「宇宙という新世界へ到達したあなたは、民衆を導く権利を手にしたの。革命を成功させれば英雄、失敗すれば反逆者。チョコレートのように甘い言葉で称賛を得てもいいし、彼岸花みたいな毒草を煎せんじて飲ませてもいい。あなたはどっちかしら。ふふっ。勿もち論ろん、挨あい拶さつ文は私が検閲するけどね」
悪魔じみた誘惑を投げかけたリュドミラは、「レコードが終わる頃に

戻るね」と言うと、菓子を持って部屋を出て行った。
　電気蓄音機から、夜が明けるような爽さわやかさと力強さを持つ交響曲が流れる。
「革命なんて、勝手なことばかり言う……」
　原稿用紙と向き合うが、国家を礼賛する言葉など思いつかない。
　沈み込んでいくレフと対照的に、交響曲は勢いを増し、聴者を鼓舞するように盛り上がる。
「イリナ……俺は、どうしたら……」
　全世界三〇億の面前で、背後から銃を向けられ、挨拶をさせられるのだ。
　その光景を想像したとき──
「……銃？」
　ふっと、ひとつの恐ろしい計画が思い浮かんだ。
「……」
　これは、宇宙飛行よりも確実に「遺書」が必要になる。
　命を賭とした革命。
　猛たけ々だけしい金管楽器の叫びと合わせるように、レフは憑つかれたように、検閲など無視した原稿を書きなぐる。
　──だが、楽章の狭間に静寂が訪れたとき、はたと、手が止まった。
「……駄だ目めだ」
　冷静に考えると、単なる自己満足で、仲間や家族、あらゆる人たちに迷惑がかかる。
　これは革命ではない。
　テロだ。
　レフは原稿を破って丸めると、恐ろしい思考を頭から追い払った。

緋の瞳　Очи　индиго

祝典前夜のサングラードには、早くも全国から何十万人という市民が駆けつけている。

河畔や街角は酒盛りで賑わい、歌えや踊れのお祭り騒ぎ。普段ならば警察が厳しく取り締まるが、今夜ばかりは無礼講だった。

大広場で開かれる凱がい旋せん祝典の準備も、夜通しで進む。

演壇となる霊れい廟びようの真向かいにある国営百貨店の壁には、宇宙飛行士姿のレフの巨大な肖像画が掲げられた。さらに、寺院と同じ高さの巨大模型ロケットが突貫で据えられる。

街全体が宇宙病の熱に浮かされるなか、イリナはいまだ病院の個室に閉じ込められていた。

「はあ……」

イリナは力なく棺かん桶おけに横たわり、所在なく、シーツの皺しわを指でなぞる。

レフの飛行成功から一日半が経過したが、気持ちの整理がつかない。

宇宙を飛んだ彼を祝いたい反面、自分の未来が見えずに怖かった。毎日続いていた身体検査や散歩が、レフの帰還後からなくなったのだ。

そして、イリナは、レフの心のうちが知りたいと思うようになっていた。

ニュースでレフの交信音声を聴き、新聞に掲載された彼の笑顔を見ると、胸がきゅっと締めつけられる。レフが世界的な英雄として表に出れば出るほど、自分の存在がこの世界から削そぎ落とされていく。『ノスフェラトゥ計画』のことを明かせないのだから仕方ないと頭では理解していたが、心が追いつかない。

──レフは、私のこと、忘れたわけじゃないよね？

レフに、ただそれだけが訊ききたい。

有名になりたいとは思わない。褒ほめ称えられたいわけでもない。

歴史から抹殺されても、彼の心には残っていたい。

本当に、それだけのこと。

だが、そんな小さな願いも叶わぬまま、凱旋祝典が近くで開催されることは、イリナを憂ゆう鬱うつにさせた。

大広場に二〇万人を動員する祝典は、明日の午後一時半から。いつもならイリナは眠っている時間帯だが、間違いなく大歓声に叩たたき起こされる。

檻おりのようなこの部屋で、レフへの賛辞や祝福などを一方的に延々と聞かされ、レフに自分を蔑ないがしろにした演説をされたら、もしかしたら彼を嫌いになってしまうかもしれない。そして、世界が認める英雄となった彼に会う機会など、この先もう永遠に訪れないだろう。

だから、最後にもう一度会って、直接話したい。

レフが「おかえり」と迎えてくれたように、「おかえり」と言いたい。

そして、彼の気持ちが訊ければ、イリナ・ルミネスクという存在が世界から消え去っても、納得できる気がした。

しかし、それは叶わぬ望みだった。許可がなければ、病室の外にも出られないのだ。

午後九時、決まった時刻に、アーニャがいつもどおり食事を運んできた。いつもと変わらない、牛乳やパン中心の質素な食事だ。

外で騒ぐ酔っぱらいたちの陽気な合唱が漏もれ聞こえてくる中で、イリナとアーニャは、ふたりきりで静かに食事をする。イリナは屋上で泣き喚わめいたのが気恥ずかしくて、アーニャと目が合わせられない。食欲もないので、牛乳をちびちびと舐なめるように飲んでいると、アーニャが丸いパンの上に人にん参じんを置いて、ぽつりと呟く。

「思い出しますね」
「なにを……？」
「ライカにいた頃、イリナちゃんが本に描いた月とロケットです……」
　イリナは下へ手たくそな絵を思い出し、背中にぶわっと汗が滲にじんだ。
「忘れてよっ……！」
「……うん」
　心なしか、アーニャに元気がなく、食事の手が止まっている。
「どうかしたの」
　不吉な胸騒ぎを感じながら、イリナが声をかけると、アーニャはパンを見つめて、涙声で答える。
「わたくし、明日までで、イリナちゃんの担当を外れることになったんです……」
「そんな、突然!?」
　思わずイリナは身を乗り出す。
　アーニャは申し訳なさそうに、頭を下げる。
「もともと、有人飛行成功までの契約でしたので……」
　レフに続いて、また親しくなった人がいなくなってしまう。
　イリナは不安に襲われ、椅い子すにぺたりと腰を下ろす。
「……私は、どうなるの……？」
　アーニャはうつむいたまま、首を横に振る。
「上長に聞いたんですが、未定って……」
　昨年の一二月にイリナが召しよう喚かんされた委員会では、「研究協力費を支払い、保養地に別荘ダーチヤを与える」と決議されていた。
　だが、イリナは当然信じていない。
　廃棄処分という言葉が脳裏をよぎる。
　仮に、もし、保養地で暮らすことになったとしても、自由など与えら

れず、一生〔運送屋〕に監視され続けるのだろう。
　イリナもアーニャも、黙り込んでしまう。
　外では酔っぱらいたちが盛り上がり、国歌を高らかに唄う。
　イリナは、嫌な予感に苛さいなまれる。
　ひょっとしたら、明日、私は死ぬのかもしれない。
　それならば、せめて、最後に何か残したい。
　彼に与えられる、何かを。
　彼と過ごした季節を思い返して、イリナはずっと大切にしてきた宝物を渡すことにした。
「……アーニャ。ひとつだけ。お願いを聞いてくれない？」
「はい……？」
　イリナは、棚にしまっていた月の石の首飾りを引っ張り出すと、アーニャの前に置く。
「これを、レフに渡して。お祝いって」
　前は受け取ってもらえなかったが、今回は受け取ってほしい。
　きっと、もう自分は、月へ行けないのだから。
「お願い、アーニャ」
　しかしアーニャは受け取らず、強い眼まな差ざしをイリナに向ける。
「自分で渡すべきです」
　渡せるものなら、渡したい。
　でも。
「無理でしょ。だって私、見張られてるし。勝手なことできないわよ」
　事実、大広場でレフを見かけたとき、〔運送屋〕に止められた。
　だが、アーニャは首を縦に振らない。それどころか、声に力を込める。
「宇宙への道を切り拓いたあなたに、できないなんて言葉は似合わない」

「でも……」
「できなければ、やればいいんです。一月に共和国軍の日のパレードを見に来ましたけど、無許可で並走する市民がいたり、演壇に近づこうとする酔っぱらいがいたり、警備はわりと隙すきがありました」
「だけど、そんなこと言われても――」
　イリナが弱音を吐くと、アーニャはフォークを振りかざし、力強くじゃがいもに突き刺した。
「わたくし怒ってるんです！」
「っ!?」
　皿が割れんばかりの怒気を放つアーニャに、びっくりするイリナ。
「ご、ごめんなさい……！」
「違いますっ！　この国に怒っていますっ！　なんで恋も自由にできないんですか!?」
「こ、こい――」
　しどろもどろになるイリナに、アーニャは首飾りを握にぎらせる。
「会いたくないんですか？」
「……」
　イリナは手の中の首飾りを見つめる。
「このままお別れでいい？　前みたいに泣いて終わりでいい？」
　アーニャの言葉が、胸に刺さる。
　彼の前ではいつも素直になれず、自分の気持ちに嘘うそを吐つき続けてきた。
　あの雪原で伝えたかった、宇宙で月を見て思った気持ちも、伝えられないままだ。
　嫌われ者の吸血鬼である自分が傍そばにいることで、彼に迷惑がかかるとさえ思った。
　けど……。

　イリナは、首飾りを握り締める。
　このまま、さようならなんて、いやだ。
「……会いたい。会って話したい」
「わかりました」
　アーニャは作戦参謀のような顔つきになる。
「いいですか？　祝典のあいだは、病院の人たちも観覧に出ます。〔運送屋〕も、来賓や要人の警備で忙しい。それにここは軍の病院だから、強力な睡眠薬も下剤もあります？」
　計画を聞いて、イリナは目を丸くした。
「脱走ってこと？　あなた……本気？」
　アーニャは決意した表情で、深く頷うなずく。
「明日は酔っぱらいの合唱どころじゃなくて、火事場のような大騒ぎですよ。二〇万の群衆に紛れれば、絶対にわかりません」
「でも、そんなことしたら、あなたは……」
　アーニャはイリナの口に指を当てて、しーっと黙らせる。
「バレなければ問題ないです。それに、命がけで戦うイリナちゃんやレフさんを見てたら、わたくしも何かしないとって思ったんです」
「アーニャ……」
「決めるのは、イリナちゃんです。そして、わたくしは全力でその手助けをします」
　イリナは、真剣な表情のアーニャを見つめる。
「……どうして、そこまでしてくれるの」
　アーニャは、にこっと微ほほ笑えむ。
「レフさんから引き継ぐとき、頼まれましたから。『イリナを支えてやってくれ』って」
　イリナは、こみ上げるものを堪こらえて、力強く頷いた。

黒竜の瞳　Очи　Цирнитра

閣僚会議館の執務室で、ゲルギエフは蒸留酒ジーズニを飲みながら、レフの元へ差し向けていたリュドミラと電話で密談を交わす。
「彼はどうだ？」
「銃を突きつけて、釘を刺しておいたわ。勿もち論ろん、突発的に何が起きても、あらゆる状況に対処できるよう準備するけど」
電話越しに、何かを食べているような咀そ嚼しやく音が聞こえる。だが、ゲルギエフは咎とがめたりしない。彼女には全幅の信頼を寄せており、仕事をしてくれれば、何をしていても構わない。
とはいえ、今回はことがことだけに、神経質になっている。
「〔運送屋〕は？」
「処刑を独断で進めようとしてるみたいね。祝典の騒ぎに乗じて、イリナ・ルミネスクをお引っ越しさせるつもりかも」
「まったく、どいつもこいつも……」
机の上に開かれた一枚の手紙を、ゲルギエフは睨にらむ。
「チーフから、ロケット開発にかかわる要望が届いた。食えない男だ」
「予算を出せって？」
「いや……」
ゲルギエフは蒸留酒ジーズニを飲み干すと、万感の思いを込める。
「ともかく、明日は人類史に……いや、地球史に刻まれる一日になるだろう」

〔運送屋〕本部内の薄暗い会議室では、秘密警察のバッジを付けた黒ずくめの男たちが、軍科学病院の構造図を囲んでいる。

抑揚のない冷たい声が、淡々と流れる。

「大通りも裏道も、市民の行進で埋まるだろう」

「車を使うのは困難か」

「では、院内での処置が妥当だな」

黒ずくめの男たちは、静かに頷うなずく。

「対象は、実験体イリナ・ルミネスク。午後三時、実行せよ」

第八章　新世界へ

藍の瞳　Очи　индиго

四月一四日、午後二時。

春霞たなびく大湿原の上空を、大型旅客機がサングラード最寄りの空港へ向かい、ゆったりと飛んでいる。

貸し切りの機内では、儀礼服姿のレフが祝典の概要を頭に叩たたき込み、挨あい拶さつ文を暗記している。祖国を礼賛する挨拶の大部分は、リュドミラが代筆する形になった。そのリュドミラは、レフの隣で相も変わらず菓子を食べている。

「いつも食べてますね……」

レフが指摘すると、リュドミラは不敵に微ほほ笑えむ。

「いつ非常事態になるかわからないでしょ？　私のことより、挨拶は覚えたの？」

「完璧です」

繰り返し読んでいると洗脳されそうな文面で、これを大観衆の前で披露するのかと思うと、腹のあたりがむず痒がゆくなる。

旅客機がサングラードに近づくと、出迎えの戦闘機が七機現れ、編隊飛行で最上級の歓迎をする。

窓からは空港が一望できるが、敷地から溢あふれるほどに詰めかけた市民が、英雄の到着を今か今かと待っている。空港ビルには『宇宙征服者―ツィルニトラ共和国連邦市民レフ・レプス』という横幕がかかっている。

仰々しい歓迎に、レフの額にじわりと汗が浮かぶ。

「すごいな……」

一方で、式典には慣れているリュドミラは涼しい顔。

「市内はもっとすごいわよ。ほら見て」
　旅客機はサングラード市街の上空を優雅に旋回する。
　そこでレフは、異様な光景を目にして息を呑のんだ。
　すべての建築物に黒竜の国旗がはためき、道路や広場は人の頭で埋め尽くされ、レフの肖像画や偉業を称えるプラカードが天に突き上げられている。群衆の行進が『美しの大広場』に流れ込み、まるで都市そのものに生命が宿ったかのように脈動している。
「うっ……」
　凄すさまじい状況に武者震いが出たレフの膝ひざを、リュドミラがパシッと叩く。
「主役なんだから、しゃんとしなさいよ。宇宙に魂を置いてきたの？　靴くつ紐ひも外れてるよ」
「あ……」
　紐ひもを結ぼうとしたが、指先が震えて、なかなか上う手まく結べなかった。

　午後二時三七分、暖かな陽光が降り注そそぐ空港へ、レフを乗せた旅客機が着陸する。
　待ち構えていた大群衆から悲鳴と歓声が飛ぶ。
「来た！」「レプス同志！」
　旅客機は滑走路を滑り、特別に敷かれた赤絨じゆう毯たんの横にぴたりと停止した。構内へ伸びる赤絨毯の両脇には観衆がひしめき、雪崩なだれ込まないように警備兵が必死で押さえている。
　硬い顔つきのレフが搭乗口から一歩出た途端、赤絨毯の両側から拍手の嵐が巻き起こり、「万歳！」と雄叫びが上がる。人々は感激し、感涙する。テレビや記録映画の撮影隊が競ってレフを撮り、記者は壊れた機械のような勢いでペンを走らせる。

打ち上げのとき以上に緊張し、レフは胴震いする。
「よし……」
一度深呼吸すると、足早にタラップを降り、赤絨毯の端に立つ。
七〇メートル先には、飛行報告会の舞台である演壇がある。
鮮やかな花々で飾られた演壇中央には、礼装に威儀を正したゲルギエフがおり、その周りには連邦最高会議長や政府の高官、感慨深げなヴィクトール中将という国家の上級職員が立ち並んでいる。そして、その片隅に、みすぼらしい労働着姿の男女が居い心ごこ地ち悪そうに立っている。
レフの両親だ。
礼装でないのは、国民に共感を抱かせるための指示なのだろうと、レフはひと目で察した。父は石像のように固まり、母はハンカチで目頭を押さえている。一年ぶりに見る両親は、いくらか痩やせたようだ。
コローヴィンを捜すと、壇上にはおらず、群衆の端に佇たたずんでいる。
その冷遇に、レフは悲しみと怒りを覚える。
だが、コローヴィンの顔は息子の晴れ姿を見るような喜びに満ちており、視線が合うと「万歳」と口を動かして、帽子を取って微ほほ笑えんだ。
謙虚すぎる姿勢に胸が突き上げられたが、レフは唇を噛かんで堪こらえる。
軍楽隊が、空軍行進曲を誇らしげに演奏し始める。
最初の一歩を踏み出すと、あとは自然と足が動いた。行進曲に合わせ、きびきびと歩く。
両脇の人垣がうねり、歓声が沸く。あまりの熱気に、汗が滴る。
赤絨毯を真っ直ぐ進み、演壇が近づく。
ゲルギエフは胸を張り、レフを待ち構えている。

レフは、銃を構えた歩ほ哨しようの脇を通り、演壇への階段を上がると、ゲルギエフの前で姿勢を正す。ゲルギエフもレフを見据え、背筋を伸ばす。

初めて対面する国家の長、ゲルギエフ。その自信に満ち満ちた威圧感に、レフは一瞬で呑のまれそうになる。

軍楽隊の演奏が止まった。

もう後戻りはできない。

この報告を以って、史上初の宇宙飛行士としての公務が始まる。

レフは力強く敬礼し、声を張り上げる。

「ツィルニトラ連邦中央委員会第一書記、ゲルギエフ同志！　人類史上初の宇宙飛行を完了したことを、こうして報告できることは、この上ない喜びであります！」

史上初と口にしたとき、イリナの顔が浮かんで胸がずきっと痛んだが、挨あい拶さつを続ける。

「いかなる新しい任務も、我らが祖国のために、あなたのために、喜んで遂行する決意であります！　──宇宙飛行士、レプス少佐！」

敬礼を解くと、観衆から大きな拍手が起き、口笛が吹き鳴らされる。

はち切れんばかりの笑みを浮かべるゲルギエフは、レフを抱擁して「おめでとう！」と頬ほおに熱い接せつ吻ぷんをする。

軍楽隊が国歌の演奏を始め、観衆の合唱がレフを包む。

周囲が昂たかぶるほど、レフの心は冷めていく。耳の穴から鉛を流し込まれ、地面に沈んでいくような気分だった。訓練で入った騒音風呂に逃げ込みたいほどだ。

だが、そんな陰いん鬱うつな気持ちはおくびにも出さず、レフは作り笑顔で国家の重鎮と握手を交わしていく。

「さあ、ご両親が待っているよ」

ゲルギエフはレフの手を取ってレフの父母の前へ行き、父母に深く一

礼する。
「英雄を育ててくださったあなた方に、心より感謝を申し上げたい」
　レフの父母は恐縮したように、深々と頭を下げる。
　そして母は大粒の涙をこぼし、顔をぐしゃぐしゃにして震える声を絞り出す。
「レフ、あんた、何も言わずに、驚くでしょ……！」
「黙っててごめん……」
　もらい泣きしそうになるレフだが、英雄が涙を見せるわけにはいかない。
　込み上げる感情を我慢しているような父は、懐ふところから古びた紙を取り出すと、レフに見せた。
「これを覚えているか？」
「ん……？」
　色鉛えん筆ぴつで描かれた下へ手たくそな絵だ。家族連れが月に立ち、不気味な羽を生やした吸血鬼がクレーターに落ちて死んでいる。
「お前が五歳のときに描いた、月旅行だよ」
「……こんなの、描いたっけ……」
　たしかに昔は、月の住人という伝承のあった吸血鬼を恐れていた。
　しかし、今は―
「思い出話はあとにして、記念撮影をしましょう！」
　ゲルギエフが壇上の重鎮たちに呼びかける。
　レフは錚そう々そうたる面子メンツの真ん中に入り、カメラを向けられる。「笑顔が硬い」と何度も注意され「緊張です」と愛想笑いを返す。レフは笑顔を作りすぎて、自分の本来の顔にだんだんと戻れなくなってしまう気がしてきた。

　報告会が終わると、サングラードへの凱がい旋せんパレードが始ま

る。
　空港入り口の駐車場まで、レフは父母と連れ立って歩く。観衆はレフたちを追いかけて動き、凄すさまじい歓呼を繰り返す。極度に緊張した様子の父母は、ぎこちなく観衆に手を振り返す。
　サングラードでの祝典はこんなものではないだろう。
　レフはこの先待っている騒ぎを想像し、無意識に大きな溜め息いきを漏もらす。
「ふぅ……」
　すると、まだ涙の乾いていない母が、レフの耳元で囁ささやく。
「嫌なことでもあったの？」
「え？」
「浮かない顔をしているから」
　イリナのことだと理由を明かせるわけもなく、レフは嘘うそを吐つく。
「過密日程で、ちょっと疲れてるんだよ……」
　すると今度は父がレフの肩に手を回し、頬を寄せる。少し酒臭くて、剃そりたての髭ひげがざらざらする。
「何か隠してるだろ？」
「……べつに。何でもないよ」
　レフがつれない返事をすると、父は寂しげな苦笑を漏らした。
「ははっ……お国の事情か。言えないなら言わなくていい」
　宇宙飛行士になった喜びをわかち合いたいのに、それができない。
　コローヴィンの言った『覚悟』は、こういう意味だったのだろうか。
　レフが作り笑顔で手を振っていると、父はレフの耳元で、小声で話す。
「父さんと母さんは、四五年前、この国が建国した年に生まれた。粛しゅく清せいや戦争を経験し、親友や仲間を失った。理不尽で酷ひどい仕

打ちをいろいろ見てきた。嘘が真実になり、真実は嘘になる。都合の悪いものは消される。ここは、そんな素晴らしい国だった」

身に覚えのあることばかりで心が痛くなる。

すると父は群衆を見回して、レフに言う。

「集まった皆は、お前に何を期待しているんだろうな？」

「期待……？」

立派な宇宙飛行士じゃないか？

そう言おうとしたとき、父がレフの背中を強く叩たたいた。

「宙そらを飛んだお前が、祖国の大地に縛られることはない。そうだろう？」

「父さん……」

「お前は、新しい時代を生きなさい」

同じ藍あい色いろの瞳ひとみをした父に見つめられ、レフは未来を託された気がした。

空港の駐車場に着くと、レフは両親と離れ、赤い薔薇で華やかに飾られたオープンカーにゲルギエフと乗り込む。

「さあ、行くぞ！」

ゲルギエフは意気揚々と、レフが打ち上げのときに発した言葉を真ま似ねた。

バイク隊に先導されてオープンカーが走り出すと、花火が打ち上げられた。

総計五〇台の車両が連なるパレードが、五キロメートル先の大広場へ向かってゆっくりと進む。

上空からヘリコプターがビラを撒まき、楽隊が勇ましい軍歌で興奮を煽あおる。沿道では市民が国旗を振り、家々の屋根にも人々が溢あふれんばかりだ。

「宇宙の英雄、万歳！」「栄光あれ！」
　飛び交う歓声に、レフとゲルギエフは両手を振って応える。
　やがてパレードは大広場に近づき、軍科学病院の前を通りすぎる。
　病院の入り口も群衆でごった返しており、各部屋からは患者が顔を覗のぞかせている。
　レフは自然とイリナの姿を探した。
　本来なら、この車にはイリナが乗っているべきなのに、ここにはいない。
　昨夜リュドミラが吐ついた嘘うそが、脳裏をよぎる。
　イリナが死んだ、と。
　不安が頭に渦巻き、歓声も何も耳に入らなくなる。
　レフの顔に翳かげが差し、手を振るのが疎かになると、ゲルギエフに靴を軽く蹴けられた。
「ん、緊張しているのかな？」
　ゲルギエフは陽気に微ほほ笑えんでいるが、目は笑っていない。
「失礼しました……！」
　慌あわててレフは笑顔を作るが、頬ほおがぴくぴくと引き攣つる。

　午後三時一五分、群衆で溢あふれた『城塞区画ネグリン』にパレードは到達する。城壁には、共和国連邦を構成する国家の国章がずらりと飾られているが、イリナの故郷であるリリットの国章は隅に追いやられている。
「さあ、着いたぞ！」
　ゲルギエフに続いてレフが降車すると、案内役の警備兵が駆け寄る。
　大広場へ伸びる道には警備兵が立ち並び、道を群衆から守るために設置された鉄てつ柵さくは、群衆の圧で壊れそうになっている。
　レフたちの到着を知った群衆が歓呼を叫び、音の塊となって大広場を

揺らす。
　ごくりと、レフは唾つばを呑のむ。この先に、自分の姿や肉声を求める二〇万の観衆がいる。
「同志レフ・レプス、こちらへ！」
　威風堂々と進むゲルギエフについて、レフは大きく腕を振って歩く。
　人垣から物凄すごい熱量の歓声が飛ぶ。
　そして、大広場にレフが足を踏み入れた瞬間──
「万歳！」「万歳！」「万歳！」
　肌がびりびりするほどの万雷の拍手、歓呼の嵐。
　二〇万人の靴が地面を踏み鳴らし、地震のように揺れる。
　人々の異常な熱気がむんむんと充満して、息が詰まるような蒸し暑さだ。
「……」
　全身が総毛立ち、レフは言葉を失う。
　恐ろしいまでの歓迎を受けながら霊れい廟びようへ進む途中、人垣の前列に見知った顔があった。
　ミハイルやローザたち、『夢の六人ミエチタ・シエスチ』。
　彼らは無名の軍人として参加しており、市民に混じって笑顔で手を振る。レフは握手を交わしたかったが、特別扱いするわけにはいかず、手を振るだけで素通りする。
　そして、霊廟に隣接する特別観覧席を過ぎ、霊廟の上部、一二メートルの高さにある演壇へ続く階段を駆け上がる。
　演壇には、胸に勲章を光らせる政治将校や委員会の重鎮らがひしめき合っている。
　その中央に、レフはゲルギエフと並んで立つ。
　大広場は、見渡す限り、人の海。
　二〇万人の瞳ひとみにいっせいに見つめられ、膝ひざ頭がしらがガク

ガクする。
　夢にも見ない光景にレフは圧倒されながらも、にこやかに両手を振り、演説の舞台となる大広場をゆっくりと見回す。
　真っ正面にある国営百貨店にかけられた巨大なレフの肖像画に、軽い眩め暈まいを感じる。
　その奥に建つ軍科学病院が目に入ったとき、レフは、イリナが帰還した際の祝賀会をハッと思い出した。
　アルビナール宇宙基地の小さな職員用食堂で、わずかな関係者を集めて食事をしただけ。しかもそれはイリナへの祝福ではなく、計画を成功させた自分たちへの労ねぎらいだった。
　それに比べて、この規模は何だろうか。
　レフがもやもやとしていると、国家委員の幹部が開会を高らかに宣言する。
「只今より、史上初の宇宙飛行士、レフ・レプス同志の凱がい旋せん祝典を開始します！」
　群衆の拍手喝かつ采さいが鳴りやまないうちに、すぐさまレフの名前が呼ばれる。
「共和国連邦英雄、レフ・レプス同志の挨あい拶さつ！」
　噴火のような歓呼が轟とどろく。
「レフ！　レフ！　レフ！」
　爆発的な歓声を浴び、レフは呆ぼう然ぜんと立ち尽くす。
　本当は「イリナ・ルミネスク」と連呼されるべきなのに、誰も彼女の名を呼ばない。
　彼女は、人類ではないから、呼ばれないのだ。宇宙を飛んだ実験犬マールイよりも扱いの低い、国家機密の実験体だから。
　生中継用のテレビカメラがレフを捉える。
　隣に立つゲルギエフに、顎あごで挨拶を促される。

　退路は断たれている。レフは挨拶をするしかない。
「レフ！　レフ！　レフ！」
　市民が何を期待しているのか？
　否いな、それが何であろうと、

　史上初の宇宙飛行士、英雄レフ・レプスを、立派に演じるしかない。

　覚悟を固め、レフはマイクの前に立つ。
　大広場に集まった二〇万の人々へ。
　国内各地で挨拶を待つ二億の人々へ。
　全世界、三〇億の人々へ。
　人類史上、後にも先にもない記念日を祝わんとしている、すべての人々へ。
　レフが両手を広げると、聴衆のざわめきが波を引くように収まる。
　レフは、胸いっぱいに空気を吸い込み、全身に力を漲みなぎらせ、国家を礼賛する演説を始める。
「親愛なる同胞の皆さん！　親愛なるフョードル・ゲルギエフ！　そして指導者の皆さん！」
　聴衆は息をひそめて、レフの次の言葉を待つ。
　レフはリュドミラの書いた模範的な挨拶を続ける。
「私のような平凡な人間に、史上初の宇宙飛行という重要な任務を与えてくださり、心から感謝いたします！」
　聴衆から大歓声が沸き、特別観覧席の要人たちも惜しみない拍手をレフに送る。
　レフは無心になって声を張り上げる。
「そして！　素晴らしい宇宙船を作り上げた科学者、技術者、労働者の皆さん！　私は成功を、一度たりとも疑いませんでした！」

　コローヴィンの名を言いたかったが、言うことはできない。
「そして！　つらく苦しい訓練をともにする第二号、第三号、そして多くの仲間たち！　優秀なあなたたちは、間違いなく、近々宇宙へ飛ぶことになると、私は信じています！」
　ミハイルやローザは数字で呼ばれたことをどう思うだろうか。
　しかし、一般人である彼らに、レフは視線を向けることはできない。
　リュドミラの代理人のような挨あい拶さつは続く。
「そして！　フョードル・ゲルギエフ！　私が宇宙から帰還して、たった数分後に、初めて祝福の抱擁をしてくれたのは、あなたでした！」
　ゲルギエフは向日葵ひまわりのような笑顔で、満足そうに頷うなずく。
　大嘘うその挨拶だ。
　だが、これが国家に望まれる英雄なのだ。
　私情など不要。
　すべては祖国のために。
　最高指導者と祖国への礼賛をひたすら連ねる。
　観衆は沸き、喝かつ采さいが起きる。
　しかし、レフの心の中には、気持ち悪さばかりが膨ふくらむ。
　本当に感謝したい人たちには、何も伝えられない。
　称えられるべきイリナは、ここにいない。
　しかし、堪こらえる。爪が手のひらに深く食い込むほど、拳こぶしを固く握にぎり締める。
「我が祖国の宇宙船は、さらに遠くへと飛ぶであろうことを確信しています！」
　挨拶を続けながら、レフは軍科学病院をちらと見る。
　もしこの挨拶がイリナの病室まで届いているとしたら、彼女はどう思うだろうか。

きっと怒りを通り越して、呆あきれるはずだ。
それでも、レフの口は勝手に動く。暗記した挨拶文を吐き出す。
「私を支えてくれたすべての人々に、心より、感謝します！」
舌の上は蜂はち蜜みつ。甘ったるくて反へ吐どが出そうになる。
真正面に掲げられたレフの肖像画が風にゆらめき、顔が歪ゆがむ。
レフは己の肖像画に嘲笑されている気分になる。
お前は何者だ、と。
だが、苦しい挨拶も、もう少しで終わる。
挨拶文は、あと三つ。
──ツィルニトラ共和国連邦、万歳！
──偉大なる共和国民、万歳！
──フョードル・ゲルギエフを先頭とする中央委員会に栄光あれ！
これらを言い終えれば、宇宙飛行士としての挨あい拶さつは完了し、ゲルギエフに交代となる。
つまり、宇宙飛行士レフ・レプスが世界的に認められて、イリナの偉業を歴史の闇やみに葬ほうむるということ。
……それでいいのか。
レフはここにきて、再度思い悩む。
彼女を踏み台にして宇宙に飛び、彼女の言葉を交信で使い、彼女の名を出さずに史上初の宇宙飛行士を名乗る。
それが、許されるのか。
迷いながら、レフは半ば自や棄けになって声を張る。
「ツィルニトラ共和国連邦、万歳！」
史上初の宇宙飛行士レフ・レプスとして、一生嘘うそを吐つきとおす。
それでいいのか。
「偉大なる共和国民、万歳！」

次を言えば、終わる。
本当に、いいのか。
「そして！」
イリナを殺す。
彼女は誰にも知られずに、死んでいく。
「そして……！」
喉のどが絞まり、言葉が継げなくなる。
「……」
レフが口を閉ざすと、聴衆が異変を感じて、ざわつき始める。
ゲルギエフがぎょろりと顔を覗のぞき込んでくる。
どうした、宇宙飛行士よ。英雄よ、と。
「くっ……」
四〇万の瞳ひとみと、最高指導者の圧迫に耐えかねて、レフはうつむく。
すると、足元でキラリと、何かが太陽の光を反射した。
「……！」
一九四三年発行の銅貨だ。
「月への、乗車賃……」
思わずレフは屈かがんで、銅貨を拾う。
観衆がざわっとしたが、演壇の下からでは、なぜ屈んだのかわからない。レフの周りにいる人々も、何を拾ったのかまでは確認できない。
レフは身体からだを起こすと、銅貨を握にぎった拳こぶしを、胸に当てる。
衆しゆう目もくを浴びながら、自分を問いただす。
イリナが月へ行けるように願った気持ちは嘘うそだったのかと。
いや、嘘ではない。
一二月一二日の打ち上げ直前、彼女がレフに首飾りを預けようとした

とき、こう告つげた。
　──月へ持って行くのは君だから。
　あれは、慰なぐさめでも励ましでもない。本心だ。
　あのときのイリナの無防備な表情は、自分のことを心から信頼してくれたようだった。
　それなのに、今、彼女の宇宙飛行すらも葬ほうむろうとしている。
　彼女の気持ちに対する裏切りだ。
　イリナ。
　病院で訊きいているかもしれない彼女に語りかける。
　君は優しい嘘を吐ついて、俺を宇宙飛行士にしてくれた。
　俺は最低な嘘を吐いて、君を亡き者にするのか？
「いや……」
　百貨店の壁で微ほほ笑えむ宇宙飛行士の自分を、レフは睨にらみつける。
　お前は史上初を名乗る英雄ではない。お前の挨あい拶さつは大衆を騙だます甘い嘘だ、と。
　レフは銅貨を胸に押し当てる。
　本当の気持ちは、何だと。
　それは昨夜、『新世界』を聴きながら書いた挨拶。
　テロだと破り捨てた挨拶だ。
　あれを宣言すれば、宇宙飛行士レフ・レプスは事故死するだろう。
　この国の掟に則のつとり、極秘裏に処分されるのだ。
　だが、父は言った。
　宙そらを飛んだ者は、祖国の大地に縛られることはない。
　新しい時代を生きろと。
　そのとおりだ。
　イリナ。

君は命を懸けて宇宙を飛んだ。

今度は俺が、命を懸ける。

君の名を、歴史に刻むために。

宇宙からの──新世界からの挨拶を、この世界に告つげよう。

レフは銅貨を上着の衣嚢ポケツトに入れると、照れ笑いを浮かべてマイクに向かう。

「すみません、何を言うか、やっと思い出しました！」

聴衆から失笑が漏もれた。「あはは」と笑うレフの屈託のない笑顔の裏など、皆は何も疑っていないようだ。

そんな中、異変を察したようなリュドミラは、ゲルギエフの背後にスッと動き、耳元で何か囁ささやく。ゲルギエフは眉まゆを顰ひそめ、何かを覚悟したように頷うなずく。

レフはリュドミラを一いち瞥べつする。

世界に生中継されているこの舞台で、撃てるものなら撃ってみろ。

そしてレフは前を向き、両手を大きく広げて一度仕切り直すと、演説を始める。

「親愛なる皆さん。ひとつ訂正させてください」

そして、ひと呼吸置いて、冷静に言い放つ。

「私は、人類初の宇宙飛行士ですが、史上初ではありません」

観衆や報道陣は「スホイシンか？」とどよめき、重鎮は眉を顰める。

さあ、行くぞ！

真実という弾丸で、嘘うそまみれの国を撃ち抜いてやる。

革命かテロか。そんなのは、五〇年後に生きている人が決めればいい。

レフは腹に力を込め、世界に響けと吠える。

「初めて宇宙を飛んだのは、私ではありません！　イリナ・ルミネスクという、一七歳の少女です！　彼女は人間ではなく、吸血鬼です！」

大広場が騒然とする。頬ほおを引き攣つらせたゲルギエフは狼狽うろたえる幹部を睨にらみ、落ち着けと手で制する。リュドミラは演壇の各人に「問題ない」と暗殺者のような鋭するどい視線を向けて回る。〔運送屋〕の副議長も三〇億人の前では動きようがなく、憎々しげに歯は噛がみする。

その動きを背中で感じたレフは、心の内で成功を確信した。

ここで強引に演説を止めれば大騒動になる。だから、止められるわけがない。

何を言おうと、この場では殺せない。

レフは声を張り上げ、煽あおるように、一気に捲まくし立てる。

「彼女は無重力の危険性や、ロケットの安全を確かめるため、宇宙を飛びました！　彼女がいたから、私は無事に戻ることができたのです！　私がここに立っているのは、彼女のお陰です！　彼女は残念ながら、ここに来られませんでした。太陽が苦手なので、どこかに隠れているんでしょう」

動揺する群衆のひとりひとりの目を見て、レフは言葉を継ぐ。

「ところであなたは、吸血鬼を『呪われし種』として嫌っていますか？　正直に言いましょう。私もあなたと同じく、吸血鬼を怖がってました！　子どもの頃に両親に脅かされて、何度も寝小便したものです！　私は初めて彼女に会うことになったとき、噛みつかれて殺されるかと身体からだが震えました！　馬鹿らしい！　そんなことはありませんでした！」

レフは拳こぶしを突き上げて強く訴える。

「彼女は、私の友人や家族と何も変わらなかった！　彼女は、私やあなたと同じで、宇宙に憧あこがれて夢を見る、ひとりの可か愛わいらしい少女です！　彼女は炭酸檸檬水レモネードが大好きで、蒸留酒ジーズニを舐なめただけで酔っぱらい、肉の煮凝りホロデーツを本当に美お味い

しく作る！　彼女は高所恐怖症を克服し、ジャズやスケートを楽しみ、初めて観た映画に歓声をあげる！　そんな彼女は、私とともに、あなたとともにこの星に生きる、ひとりの少女なんです！」

　彼女は愛されることはあっても、忌み嫌われるところなんて、ひとつもない。

　両親を失い、孤独に生きてきた少女が、命懸けで宇宙を飛んだという真実を。

　どうか、知ってくれ。

「親愛なる同胞の皆さん！　世界中の皆さん！　どうか、彼女に祝福を！　彼女のことを、私たちの同志イリナ・ルミネスクを、どうか、忘れないでください！」

　レフは大空に向けて敬礼する。

「以上！　宇宙飛行士第二号、レフ・レプス！」

　静かなどよめきが大広場を支配する。

　拍手も歓声もない。

　大広場に集まった二〇万の人々には、蜂はち蜜みつではなく、毒だったかもしれない。

　だが、世界中にいる誰かひとりにでも伝わってくれれば、それでいい。

　さあ、宇宙飛行士としての任務は、これで終わりだ。

　レフが敬礼を解き、一歩下がろうとすると――

　パチパチと、特別閲覧席で、誰かが拍手をした。

　目を向けると、レフの父と母がレフを見つめ、大きな拍手をしている。

「あ……」

　そして、群衆の中からも拍手が湧わく。

　天高く両手を掲げて拍手するのは、ミハイルやローザたち、宇宙を目

指した同志だ。
「皆……」
　泣きたいような感情が胸に込み上げた、そのとき──
「レフ！」
　聞き覚えのある少女の声で、名を呼ばれた。
　レフが驚いて声のほうを見ると、大広場の端、ロケットの模型の陰からひとりの少女が人垣を割ってくる。
　少女の首元で、青い宝石がきらりと光り輝く。
「イリナ!?」
　レフが名を叫ぶと、イリナの周りで悲鳴とも歓喜ともつかない声が上がる。

　緋の瞳　Очи　индиго

「レフ！」
　人間の群れに揉もまれながら、イリナは前方の柵さくへ向かって駆ける。
「どいて！」
　アーニャの手引きで病院を脱走し、隠れて祝典に参加していたイリナは、国家を褒ほめ称えるレフの挨あい拶さつに絶望していた。
　だが、最後の演説で、鬱うつ屈くつした感情はすべて吹き飛んだ。
　レフは「第二号」と名乗り、真実を訴えた。国家幹部の反応からすると、絶対に予定外の演説だ。極秘の実験体を公おおやけにするなど、あってはならないこと。
　それを、彼は全世界に向けて言い放った。
　──史上初の宇宙飛行士、イリナ・ルミネスクを祝福しよう、と。

隠れているべきなのに、イリナは突き上げる衝動を抑えきれなかった。

人混みを無我夢中でかきわけ、汗でぐしょ濡れになりながら、尽きそうな体力を振り絞り、からからになった喉のどが嗄かれても叫ぶ。

「レフ！」

彼のいる場所へ行きたい。その一心で走り、柵を乗り越えようと手をかけたイリナに、警備兵が駆け寄る。

「待て！」

イリナは避けようとしたが、上着の裾すそを掴つかまれた。

「離してよ！」

上着を脱ぎ捨てて振りほどくも、警備兵はイリナに迫る。周囲の人々は少し距離を置き、イリナに訝いぶかしげな目を向ける。

追い詰められたイリナの背中に柵が当たり、逃げ場を失ったそのとき――

「イリナちゃん！」

群衆から飛び出したアーニャが警備兵に烈はげしく体当たりし、もんどりうって倒れた。

「アーニャ!?」

地面に倒れたままアーニャは霊れい廟びようを指差す。

「行って！」

「……うん！」

イリナは柵を飛び越え、霊廟へと続く道に着地する。

霊廟に立つレフを見据え、大地を蹴ける。

傍そばにいた警備兵が行く手を阻むが、イリナは身体からだを屈かがめ、地面に膝ひざをつきながら素早くすり抜ける。

絶対に捕まらない。レフのところに行くから。

漆しつ黒こくの髪が風になびき、尖とがった耳が露あらわになる。擦

こすった膝から真っ赤な血が滲にじむ。
　群衆の視線がイリナに向き、恐れや好奇、侮蔑、さまざまな感情をぶつけられる。
　脇目も振らず、イリナは走る。レフと競走して以来の全速力で。
　予想外の出来事に狼狽うろたえた様子の警備兵たちが牽けん制せいする間を縫ぬって、イリナは息を切らしてがむしゃらに駆ける。
　薄手のワンピースは汗で身体に張り付き、太陽を浴びた肌は日焼けしたように赤くなり、じりじりと痛む。
　全身が灼けついても、真紅の瞳ひとみは、演壇に立つレフを捉えて離さない。
　彼への想いが身体を突き動かす。
「レフ！」
　ぼろぼろの姿で霊れい廟びように辿たどり着いたイリナは、演壇に続く階段を駆け上がる。
「イリナ！」
　演壇を駆け下りてきたレフと、霊廟の中段にある踊り場で再会する。
　肩で息をするイリナは、いざレフに会うと、何を言っていいかわからない。伝えたいことが多すぎて、頭がぐちゃぐちゃになる。
　広場から立ち昇るざわめきが、イリナを重く包み込む。
　演壇の上から、ゲルギエフが銅像のような無表情な顔で見下ろしている。
「あの……、レフ……」
　言葉が見つからず、イリナは潤うるんだ瞳で、レフをじっと見つめる。
　するとレフは、にこっと微ほほ笑えむ。
「まずは、君を皆に紹介しよう」
　レフは拡声器を手にした警備兵を見つけると、「借ります！」と奪い

取る。そして拡声器を口の前に持っていき、群衆に向けて高らかに叫ぶ。
「彼女がイリナ・ルミネスク！　史上初の、宇宙飛行士です！」
　拍手がちらほら起きるが、群衆の多くは反応に困ったように、周りの顔色を窺うかがう。
　イリナもどうしていいかわからず、目が泳ぎ、顔を紅こう潮ちようさせてうつむく。
「じゃあイリナ、挨あい拶さつを」
「え……」
「宇宙飛行士の挨拶をしないと」
　笑顔のレフに、イリナは無理やり拡声器を手渡される。
　戸と惑まどいながら大広場に目を向けると、二〇万の大観衆がイリナに注目している。
「っ……」
　心臓がどくんと喉のどまで上がったようで、息が詰まる。恐怖が鎌首をもたげ、戦せん慄りつが起こり、歯と歯がガチガチとぶつかる。
　どうしたらいいの。
　硬直するイリナの背中に、レフが優しく手を当てる。
「胸を張っていいんだ。君は誇るべき偉業を成し遂げたんだ」
「う、うん……」
「もし君を責める者がいたら、俺が守るから」
　ぽん、と背中を押された。
　―怯おびえるな。君は悪いことなどしていない。
　そんな彼の気持ちが伝わってくる。
　やるしかない。
　イリナは勇気を振り絞り、罵ば声せいが飛んでくるのを覚悟して群衆を見据える。

人々はイリナを興味深そうに、または訝いぶかしげに見つめるだけで、ざわめきはあれど、心を傷つけるような野次はない。

何か言わなければと、イリナは拡声器を構え、おどおどしながら口を開く。

「私は、イリナ・ルミネスク……！」

額や背中を冷たい汗が伝う。緊張で、頭が真っ白になる。

「宇宙から見た地球は……、すごく綺き麗れいで……それで……」

考えがまとまらず、うまく話せない。

「私、ずっと、宇宙に行きたくて……」

声が揺れ、泣きたいような弱さが胸に満ちてくる。

「人間よりも先に宇宙へ……そんなふうに思って、生きてきた……でも、それは―」

「吸血鬼は死ねよ！」

言い終わる前に、広場の酔っぱらいから野次が飛んだ。

「っ……」

身体からだが硬直し、心がしぼんでいく。

恐怖に襲われたイリナがうつむいてしまうと、レフが再び背中に手を当てた。

「宇宙で月を見て、思ったことがあるんだろ？」

「え……？」

「君が帰還したとき、雪原で何か言おうとしてただろ？　それを皆に教えてあげなよ」

あのとき、レフに伝えたかったのは、新しい夢だった。人間嫌いだった自分がそんな夢を持つなんて、信じられなかった。

それを、世界に伝える……。

恐る恐る大広場を見たイリナは、ふと、思い出した。

以前、レフの隣に立って、今と同じように人間の衆しゆう目もくを集

めたことがあった。
　それは、彼と初めて会った日。共同宿舎の食堂で、二〇人の候補生に自己紹介をしたとき。
　──私は、イリナ・ルミネスク。
　──人間は嫌いだから、話しかけないで。以上。
　あんな酷い挨あい拶さつをしたにもかかわらず、レフはずっと守ってくれた。
　そして、今も隣にいる。
　そう思った瞬間、怯おびえていた心が、なぜかすっと落ち着いた。
「レフ、もう大丈夫……」
　イリナは顔を上げ、真紅の瞳ひとみで聴衆を見つめる。
　小さな身体からだで、二〇万人の視線を受け止める。
　震える両足で、大地を踏みしめる。
　震える両手で、拡声器を握にぎり締める。

　そして、牙きばを隠さずに大きく口を開く。
「私は、人間が大嫌いで、ずっと恨んでた。私は、高所恐怖症で、泣いてばかりいた。そんな私を、ここにいるレフが、宇宙飛行士にしてくれた！　私の夢を叶えてくれた！　そんな、私の新しい夢は……！」
　この夢は、きっと叶わない。罵倒されるかもしれない。
　それでも、世界に告げる。この想いを知ってほしいから。
　イリナは胸いっぱい息を吸い込み、宙へ届けと全力で叫ぶ。
「レフと、月に行く！」
　目じりにうっすら滲にじんだ涙を拳こぶしで拭ぬぐい、唇をきっと結ぶ。
　宇宙飛行士は、みっともなく泣いたりしない。
　このあと処刑が待っているとしても、絶対に泣かない。
　最後まで、強く生き抜くとイリナは決めた。
「以上！　リリット共和国宇宙飛行士！　イリナ・ルミネスク！」
　黙って聞き入っていた観衆に、ざわめきが戻る。ところどころで、雨だれのような拍手が起き、戸と惑まどいの中でさざ波のように静かに広まっていく。
　思いの丈を吐き出して顔色が上気するイリナとレフの元へ、ひとりの影が静かに近づく。身の毛がよだつような恐怖を覚えたイリナが振り向くと、鉄仮面を付けたように冷たい顔つきのリュドミラが歩み寄ってくる。
　レフが「あっ」と短く声を上げ、表情を強こわ張ばらせた。
　イリナにとっては初対面の相手だが、闇やみを秘めた深緑の瞳ひとみで見つめられると、全身の汗が凍りつくように冷える。直感的に危険な人間だと理解し、身構える。
　リュドミラはふたりの前で立ち止まり、まばたきをせず、ゆっくりと恭しく敬礼する。そして、抑揚のない不気味な声を発した。

「演壇に戻りなさい。祝典を滞とどこおりなく終わらせる」
　レフは敬礼を返すと、イリナに促すような視線を向け、頷うなずく。
　イリナも従わざるを得ず、敬礼を返した。

　黒竜の瞳　Очи　Цирнитра

　演壇の中央。薄い微び笑しようを浮かべ、堂々とした姿勢で立っているゲルギエフは、リュドミラに連れられて戻ってきたレフとイリナに向けて、片かた眉まゆを吊り上げて眉み間けんに皺しわを寄せる。
　そして――
　パンッ。
　胸の前で手を打ち合わせ、大きな拍手を送る。
「素晴らしい！」
　最高指導者の拍手につられて、国家の重鎮も、観衆も、狐きつねにつままれたような表情で拍手を始める。それはレフやイリナも同様で、困惑を顔に出し、頭を下げる。
　ただひとり、リュドミラだけが笑顔で拍手をする。
　大広場の空気が一体化したところで、ゲルギエフはマイクの前にゆっくりと進む。そして、帽子を脱ぎ、両手を大きく広げて聴衆の注目を集める。
　やがて、静寂が訪れると、力の漲みなぎった演説を始める。
「親愛な同志諸君！　親愛な友人諸君！　全世界の市民諸君！」
　身振り手振り、視線の運び、呼吸。
　身体からだのすべてを使い、たった数秒で場を支配する。
「私は、大きな喜びをもって、諸君に呼びかけます！　世界的な偉業を達成した共和国連邦の英雄、レフ・レプスとイリナ・ルミネスクに、こ

の上ない感謝を！」
　ゲルギエフが拍手を求めると、観衆は応える。人々の心は一瞬にして掌握されていた。
　続いて、ゲルギエフはレフとイリナに熱烈な視線を送る。
「イリナ・ルミネスク！　貴方は『祖国の科学発展に貢献したい』と願い、自ら実験飛行の被験者に志願しました！　そしてレフ・レプス！　貴方は彼女の初飛行のため、つきっきりで訓練を重ねた！　ふたりの打ち上げ成功は、まさに夢の結晶と言えるでしょう！」
　レフとイリナは「え……」と声を漏もらしたが、ゲルギエフの雄弁な演説にかき消される。
「世界中の同志諸君には、ひとつ、ここで謝らせていただきたい！　先日、『宇宙飛行士スホイシン』というデマが広がってしまい、イリナ・ルミネスクの発表が、予定通りにいかなくなってしまったのです。そして今日、開会直前まで討議を尽くしたのですが、建国史上初の生中継ということで、現場に混乱が起きてしまった。宇宙飛行士のふたりには、大変迷惑をかけた！　同志諸君、晴れの舞台に起きてしまったこの失態を、どうか赦ゆるしていただけませんか！」
　ゲルギエフは騒動を正当化するような大嘘うそを平然と吐つき、深々と頭を下げる。
　最高指導者に謝罪をされた観衆は、慰なぐさみの拍手を送り、「共和国万歳！」「同志ゲルギエフ万歳！」と大きな声を上げる。
　ゲルギエフは頭を下げながら、ほくそ笑んで呟く。
「―馬鹿だな」
　頭を下げているゲルギエフの口から、国民を貶けなす言葉が不敵な笑みとともにこぼれた。
　その邪悪な表情は、まるで、こうなることを望んでいたかのようだ。
「……さあ、革命の時間だ」

二〇万の国民から拍手と歓声を存分に受けたゲルギエフは、しおれていた向日葵ひまわりが咲くように、ゆっくりと頭を持ち上げ──
「同志諸君！　ありがとう！」
激烈な演説を咲かせる。
「イリナ・ルミネスクの発表が遅れた裏には、古き思想を持つ者たちの邪魔がありました！　彼女を『呪われし種』だからと言って処刑しようと言うのです！　貴方たちの隣人を、簡単に粛しゆく清せいしていいのでしょうか!?　私は、そうは思いません！」
暗に〔運送屋〕を批判すると、観衆は遠慮がちに、だが大きく拍手をする。
調子づくゲルギエフは両手を天に掲げ、さらに声を張り上げる。
「世界は共和国によって宇宙新時代を迎えたのです！　『呪われし種』という古い考えは捨て去り、人間と異種族の友愛を示しましょう！『自由国家』と称して差別し、搾取し、奴隷のように扱う国など、前時代的な未開国と言えるでしょう！」
新血種族ダンピールの暴動に揺れる連合王国に、痛烈な一撃を加える。
「親愛なる諸君！」
ゲルギエフは、演説の締めに入る。
「我が祖国は、先進的な平和友好国家であり、すべての労働者、すべての民族が、平等に幸せを享受でき、たとえ貧しい農村の生まれでも、忌み嫌われてきた吸血鬼でも、夢を見ることができるのです！」
『舌の上では蜂はち蜜みつ、心の中は氷』
共和国連邦の最高指導者であるゲルギエフは、その言葉を体現する人物だった。
「今回の成功で、宇宙開発が終わったわけではありません！　宇宙船『ミェチタ』号の探検は続きます！　そして近い将来、我々は月に到達

するでしょう！」

終奏　постлюдия

藍の瞳　Очи　индиго

一時騒然となった凱がい旋せん祝典だが、「進行は概おおむね予定通りだった」として閉会し、「挨あい拶さつもすべて演出の一環である」と、ゲルギエフと外務大臣が各国の報道陣に強く訴えている。

レフとイリナは、大広場に流れ込んでくる市民たちに、数時間手を振り続けた。日除けの羽織と日傘で身を守るイリナに対する市民の反応は、畏い怖ふや侮蔑よりも、「この子が吸血鬼で、宇宙飛行士？」という好奇や興味が勝っており、イリナは面食ったような、気恥ずかしいような顔をしていた。

夕陽が落ちた頃、ようやく大広場から市民が去ると、ふたりはすぐさま警備兵に囲まれ、着替える時間も与えられないまま、人目に触れない『城塞区画ネグリン』の大宮殿に連行された。

大宮殿の上層階にある、荘厳な雰囲気の会議室。

豪華なシャンデリアの下、美麗な大理石のテーブルを挟はさみ、リュドミラに面接されるような形でレフとイリナは並んで座った。警備兵は外に締め出され、三人だけで話し合いが行われる。

テーブルには紅茶と苺の砂糖煮ヴアレニエが人数分あるが、リュドミラしか手を付けない。

「まったく、やってくれたわよね。でもレフ君の作戦は大成功ね。もし今後ふたりを処罰しようものなら『国家機密を暴露したから粛しゆく清せいか!?』って全世界から非難されるもん。あははっ」

軽い調子で、声を弾ませるリュドミラ。予定外の行動を取ったレフを非難することはなく、むしろ感心すら滲にじませる。だが、レフはいま

だに胸がざわついている。イリナを認めたゲルギエフの言動は、違和感しかない。
「ゲルギエフ同志の演説は、まるで、俺の挨拶を予期していたようでした……」
「予期してたよ」
　リュドミラは砂糖煮を食べながら、しれっと言ってのけた。
「は？」
「昨晩、君が書いた原稿に、『イリナ・ルミネスク』って文字の跡が見えたんだよね。頑張って消そうとしたみたいだけど」
　レフはアッとなった。
　リュドミラは紅茶を苦そうにすすり、言葉を続ける。
「君を再度脅そうかとも考えたんだけど、脅したところで暴露されちゃうかもしれないでしょ？　だから、ゲルギエフ同志の挨拶文を二種類用意した。もし、君が『彼岸花リカリス』について触れずに立派な英雄を演じてくれれば、プラン『嘘ローシ』。暴露するなら、プラン『真実イースチナ』」
　そう言って、リュドミラは舞台裏を明かす。
　──レフがイリナの暴露を始めたとき、肝の据わっているゲルギエフもさすがに狼狽うろたえ、頬ほおが引き攣つった。だが、『祝典で起きうる危険』を予あらかじめリュドミラから伝えられていた彼は、「プラン『真実イースチナ』ね」と渡されたメモに素早く目を通すと、イリナの演説が終わるのを待った。
　共和国民には吸血鬼を嫌悪する人が多いが、国民が本当に嫌っているのは、粛清を繰り返した前政権の残党であり、打ち負かしたいのは、連合王国だった。イリナと両者を天秤にかけたとき、答えは明白。ゲルギエフは、吸血鬼を肯定することは危険だと承知の上で、革命的英雄となるが如く、冒険に出た。

唖あ然ぜんとするレフとイリナの前に、リュドミラは挨あい拶さつ文を置く。
「これは、使われなかった『嘘ローシ』の挨拶」
主な内容は、レフへの賛辞と、国家を誇ること。イリナに関する記述はなく、〔運送屋〕や連合王国に対する批判もない。
レフは真相を知り、歯は軋ぎしりする。
これでは、演説に都合よく利用されただけではないか。
顔をしかめて黙りこくっているイリナに、リュドミラは値踏みするような視線を向ける。
「よかったね、レフ君が暴露してくれて。彼が明かさなければ、今頃、病院で毒薬を飲まされて、手術道具で首を落とされてたんじゃない？」
イリナはキッと睨にらむが、リュドミラはまったく動じない。
「でも、君が病院を脱走して登壇したのは予想外だった。まあ、お陰で盛り上がったし、〔運送屋〕から逃れたんだもの、命拾いしたね。あはは」
笑って苺を食べるリュドミラに、イリナは怒気をぶつける。
「アーニャは無事なんでしょうね!?」
「安心して。今後は空軍医学研究所に戻して、モジャイスキー博士の助手として働いてもらう予定。反乱分子を粛しゆく清せいした前政権と違って、有能な人間は大切に扱うから」
やはり利用することしか考えていない。
「あ、ところで知ってる？　ゲルギエフ同志に、有能なチーフから脅迫状が届いたの」
リュドミラの言った物騒な言葉に、レフはぎょっとする。
「脅迫……？」
「『イリナ・ルミネスクを殺すならば、私は製品を殺すだろう』って手紙」

レフは思わず息を呑のんだ。コローヴィンが「期待するな」と言った働きかけが、そこまでの内容だとは思いもしなかった。この国の上層部は、レフの想像を超えて歪ゆがんでいる。

コローヴィンの想いを知ったイリナは、感極まったように口に手を当てている。

リュドミラはうんざりしたように肩をすくめた。

「皆、『モノ』扱い、忘れちゃって……」

しかし、レフがイリナの存在が明かしたお陰で、コローヴィンの脅しをかわし、連合王国と前政権を批判できたのだから、ゲルギエフからしてみれば結果的に万々歳だ。『嘘ローシ』の挨あい拶さつ文を使うより、むしろ良かったのだろう。

そのとき、疑念がふっとレフの頭をかすめた。

結果的に……なのか？

まさか、リュドミラは、この状況を狙ったのではないか。

昨夜の彼女とのやり取りが脳裏を駆け巡り、思いつきが確信に近いものになる。

そしてレフは、慎重にリュドミラに問いかける。

「あなたは、俺に言いましたね。宇宙飛行士には、新世界へ導いてくれる革命家を望む、と」

「うん、言ったけど？」

「今日の俺は、あなたのお望みどおりだったんじゃないですか？」

「ん？」

リュドミラの頬ほおがぴくっとしたのを、レフは見逃さない。

「俺が原稿にイリナの名を書いたと知ったあなたは、イリナが死んだと嘘うそを吐つき、銃口を突きつけた。『俺が真実を明かさなければイリナは闇やみに葬ほうむられる』という強迫観念を持たせ、焚たきつけるような音楽を流して、俺をひとりにした」

「あはは。考えすぎじゃない？　私がそんな酷ひどい人間だと思う？」
　リュドミラは苦笑しつつ、挑戦的な瞳ひとみで問い返す。
　やはり、そうか。
　腹に据えかねるものを覚えたレフは、『嘘』の挨拶文を握にぎり締めると、ゆらりと立ち上がり、頬杖をついているリュドミラを睨にらむ。
「ひとつ、挨拶で言い忘れたことがあります」
「なに？」
「俺もイリナも、革命の駒じゃない！」
　レフは怒声を放ち、テーブルを殴なぐりつける勢いで『嘘』の挨拶文を叩たたきつけた。
「！……」
　一瞬ひるんだリュドミラだが、不敵に鼻で笑い、立ち上がる。
「ふふっ。新世界へ導く旗手になるなら、そのくらいの意気がないとね」
「ええ。あなたたちがどうしようと、私とレフは月に行くわ」
　優雅な手つきでイリナは紅茶を飲むと、上目遣いにリュドミラを睨んだ。
「ふん……でも、気をつけなさいよ」
　リュドミラは、指を銃の形にしてレフとイリナに向けると、バンと撃ち抜く。
「あの挨拶は、委員会の承諾を得てない強硬策だから、快こころよく思わない人がたくさんいる」
　これは脅しではないと、レフはわかっている。
　祝典で演説を終えたあと、殺気立った視線をいくつも感じた。副首相は額に青筋を張らせ、〔運送屋〕の議長は憎々しげに杖を何度も地面に打ちつけた。そして、コローヴィンの宿敵であるグラウディン設計局長もまた、どこかで怒りを滾たぎらせていたはずだ。

リュドミラは『嘘ローシ』の挨あい拶さつ文を取ると、レフとイリナを刺すような視線で一いち瞥べつする。
「今夜の祝賀会が、最後の晩ばん餐さんにならないといいね」
不穏な捨て台詞ぜりふを吐き、リュドミラは悠然と会議室を出た。
リュドミラがいなくなると張り詰めていた空気が緩ゆるみ、レフとイリナは同時に「はぁー」と大きな溜ため息いきを吐つく。それがおかしくて、ふたりは顔を見合わせた。
「久しぶりね」
「ああ。最後に会ったのは、病院に移送される前の日だよな……」
まだ寒かった、真冬の日。
映画や食事のことよりも、血を吸われたくて悶もん々もんとしたことや、抱き締めたときの気持ちがふつふつと蘇よみがえり、レフは気恥ずかしくなってイリナから目を逸そらす。
イリナも同じことを考えていたのか、頬ほおを赤らめてうつむいた。
立っていたレフは、紅茶のカップを取ると、イリナの斜はす向むかいに腰かける。ぬるくなった紅茶をすすりながら、イリナを横目に眺める。苺の砂糖煮ヴアレニエを不思議そうに味わう彼女は、都会的な格好をしているせいか、どことなく大人になった気がする。
するとイリナはレフの視線に気づいたのか、ちらりとレフを見て言う。
「ところで、あなたの挨拶……私のことを話すのは予定になかったのよね？」
「そうだよ」
「言わなくても良かったのに、どうして言ったの……？」
改まって訊きかれると、返事に困る。何より、まさかイリナに聞かれていると思わなかったので、思い返すだけで身体が火照る。そこでレフは平静を装いレフは適当に流すことにする。

「言わないと、君に噛かみつかれる気がした」
「ふーん……」
　じっとりとした目つきでイリナに見られる。
「な、なんだよ……」
「べつに。吸血鬼を怖がって寝小便してた子が、立派になったものよね」
「……君こそ、なんでロケットの模型から飛び出してきたんだよ？」
　レフがつっこむと、イリナは頬を赤らめて目を泳がせ、ぷいと横を向いた。
「……逃走経路で、偶然あなたが演説してたの。お陰で逃げそこなったわ」
　邪険な返答の中に以前と変わらないイリナを感じて、レフは安心した。
「あ、そうだ」
　レフは衣嚢ポケツトに手を突っ込み、演壇で拾った一九四三年の銅貨を取り出す。
「これ、あげるよ。月へ行けるように願掛けしたお守りだ」
「あっ、私の生まれた年。偶然ね」
　偶然ではないんだが、そんなこと教えなくてもいいだろう。
　イリナは銅貨と首飾りを並べると、棄てられた子犬のように、心細げに瞳ひとみを揺らした。
「ねえ、私……また宇宙、飛べるのかな……？」
　頷うなずきたいレフだったが、下へ手たに期待を抱かせたくなかった。
「この先どうなるか、さっぱりわからない。しばらくは世界中の国々を回るらしいけど……」
「そっか……」

イリナの表情が憂いを帯おびる。

史上初めて宇宙を飛んだふたりを、全世界の人々は、どんな目で見るのか。

世界を揺るがすような演説をしたふたりを。

──レフと、月に行く！

イリナの声が、レフの胸を揺すぶる。

「月か……」

レフは窓を開け、バルコニーへ出る。

澄すみ渡った夜空に、満月が輝いている。

首飾りと銅貨を手にしたイリナもやってきて、レフの隣に立つ。

レフは彼女の月の詩が聴きたくなり、促す。

「虹の入り江……だっけ？　あの詩……」

「うん……」

イリナは銀色の満月を見上げ、愛おしむように囁ささやく。

「夢の湖……」

可か愛わいらしい口に不釣り合いな牙きばが、ちらりと見える。

「眠りの沼……」

古いにしえの歌を詠唱するように、ひとつひとつ、大切に紡つむぐ。

「嵐の太洋……」

漆しつ黒こくの髪が春風でなびき、ツンと尖とがった耳が露あらわになる。

「蒸気の海……」

イリナは首飾りと銅貨を両手で包むように持ち、月にかざす。

宝石に穢けがれなき青い光が煌きらめき、零こぼれ落ちた光が銅貨を藍あいに染める。

月にかかるように、流星が尾を引いて流れた。

薄うす紅べにの瞳が、深緋を帯おびる。

「……いつか、行くの……」
　宇宙飛行士となった少女は、手を組み合わせ、満月を見つめる。
　純粋な祈りを秘めて。ただ、静かに。

　隣で瞼まぶたを閉じるイリナを見て、レフは思う。
　彼女と月面に立つ日は来るのだろうか。
　それは、蜂はち蜜みつのように甘い夢かもしれない。
　有人宇宙飛行と言っても、たかだか一〇〇キロメートルの高さを超えただけ。
　月は、三八万キロも彼方かなたにある。
　仮に到達したとしても、地球に生還できるのか。
　月世界など、空想科学映画ではないか。
　……いや。
　不可能だと思っていた夢は叶った。
　コローヴィンや『夢の六人ミエチタ・シエスチ』も、そしてイリナも、宇宙への夢を描き続けている。
　恐れることはない。
　新時代へつながる星の道を進むだけだ。
　宇宙飛行士となった青年は、煌こう々こうと浮かぶ満月を見上げて、藍あい色いろの瞳ひとみをきらきら輝せた。
「絶対に、行くんだ。イリナ」

〈了〉

あとがき

今回のあとがきは、少し内容に触れているので（ネタバレはしませんが）、最後に読んだ方がいいかもしれません。

前巻のあとがきにも書いたとおり、本作は史実ベースですが、どのあたりが現実と同じなのかということを、いくつか明かそうと思います。

まず、コールサインで提案される『雪杉ケードル』。これは、史実でも杉です（ヒマラヤスギ）。ただし、なぜ杉にしたのか調べても不明だったので、チーフが杉を提案する理由は創作です。それに、杉以降のコールサインはすべて鳥になっているので、ますます杉である理由が謎。知ってる人がいたら教えてほしい。

ちなみに、有名な「わたしはカモメ」という言葉は、宙そらを飛んでいる気分ではなくて、「こちら、カモメ」というコールサインです。「わたしは杉」だったら花粉飛ばしそうだし、有名な台詞せりふにはならなかったでしょうね……。

それから、大広場で銅貨を投げるエピソード。モデルにした某所では、観光客が幸運を祈って銅貨を投げるようですが、その行為をいつ誰が始めたのか不明で、なぜ幸運を祈るのか誰も知らないという話。なので、「乗車賃」という意味は現実にはありません。もし聖地巡礼したとき「乗車賃だ！」ってやると、「何？」と言われるでしょう。

あと、火星や宇宙旅行の話は、当時の学者が考えていた事実です。火星に知的生命体がいて巨大な人工衛星を打ち上げていたとか恐怖でしかない。

そんなこんなで、虚実入り乱れている本作です。

今巻も多くの方々のお力を借りて世に出すことができました。

田た端ばた様。いつも良きご指摘助かります。すっかり新社屋に住まう夜の種族のようで……。

かれい様。作業ＢＧＭにしていた曲とカバーイラストがぴったりで、額装して飾ります。

そして、読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。一巻が出たあとの応援や口コミは、宇宙船の発射エネルギーです。今後とも、どうぞ宜しくお願いします。

ところで、『フライ・ミー・トゥー・ザ・ムーン』という曲をご存じでしょうか。近年では某アニメのＥＤ曲として知られてますが、アポロ計画の始まった六〇年代に大ヒットして、人類が月に持っていった最初の曲なんですよね。

当時のバージョンを聴いて雰囲気を感じてみるのも一興ではないでしょうか。

では。

牧まき野の圭けい祐すけ

第二楽章　銀髪の吸血姫

　東歴一九六一年、四月一八日。アーナック連合王国南部。
　ぎらぎらした太陽が照りつける広大な綿花畑に囲まれた丘陵で、バート・ファイフィールドは、同期の仲間たちと昼飯のハンバーガーを食べていた。
　バートは、この四月に国立宇宙局ＡＮＳＡに入ったばかりの新人。研修中で、まだ配属先は決まっていない。
　そして、入った矢先に、『レプス＆ルミネスク・ショック』が起きた。
　連合王国は騒然となった。
　打ち上げで負け、さらに演説で「前時代的」と批判されたのだ。『パールスヌイ・ショック』に続く屈辱で、超大国の威信も失われた。来たる五月には、『七人の飛行士ヘルメスセブン』のひとりであり、またバートの兄でもあるアーロン飛行士が、連合王国民として初めて宇宙を飛ぶことが決定していたが、偉業の前にかすんでしまう。
　有人宇宙飛行で先を越されたことをバートは悔しんだが、「追い抜く目標ができた」と前向きに捉えている。
「月、火星、水星……宇宙は無限に広がっているしね」
　同年代のレフとイリナが偉業を達成したことは刺激的で、同期の仲間にとっても、ふたりは英雄であり、憧あこがれだった。
「イリナちゃん可か愛わいかった」
「でも、純血の吸血鬼でしょ。なんか怖くない？」
　皆、ここ数日は、彼らの話ばかり。口々に適当なことを言い合っている。
　バートはレフとイリナに会って話したいが、コミュニケーションが苦手だと自覚しているので、緊張して何も言えなくなるだろうと恐れてい

る。
　いや、そもそも、有名な兄ならまだしも、無名の新人職員ごときが会えるわけないのだが、バートは空想や妄想の類は得意で、脳内でレフと握手を交わしていた。
「──政府が、月面着陸の可能性を調査してるらしい」
　バートが妄想していると、心を躍らせる言葉が耳に入った。
「ほんと!?」
「ああ、お偉いさんが騒いでたぞ。予算が下りれば開発チームを編成するって。新血種族ダンピールでも、優秀ならば積極的に入れるらしいぞ」
「新血種族か……」
　これまで連合王国は宇宙開開発競争で後こう塵じんを拝し続けてきたが、敗因のひとつとして、新血種族を主要チームから排除していたことが挙げられていた。
　だが、吸血鬼イリナ・ルミネスクを共和国が公的に認めてしまったため、国立宇宙局内で急激に──表向きに、民族融和の気運が高まっている。
　バートは、新血種族ダンピールに対してさほど差別意識はなかったが、彼の住む都市では居住区がすっぱりと二分され、国立宇宙局ＡＮＳＡ内でも新血種族の使う設備は隔離されていた。同期の仲間には『汚れた血』である彼らの姿を見ただけで顔を歪ゆがめる者もいた。
　その状況が改善されていき、優秀な新血種族が開発現場に入ってくるならば、科学技術は飛躍的に向上するだろう。
「よし、僕らの手で人類を月へ送り出そう」
　バートが力強く言い切るが、同期生はあまり乗ってこない。
「まあ、宇宙開発がちゃんと続けばいいけどさ」
　同期生は、南の空を指す。

「空爆も上陸作戦も大失敗で、危ないんだろ」
　共和国で凱がい旋せん祝典が開かれた翌日、連合王国は隣国の革命政権の打倒を試みて、空襲を仕掛けた。三日経過した今も、海を挟はさんだ向こう側で銃弾やミサイルが飛び交っている。
「平和な世の中にならないものかな」
　バートが呟いたとき、同期生たちがいっせいに空を見てぎょっとした。そして転がるように慌あわてて駆け出す。
「ん？」
　異変を感じたバートが見上げると、空から棒状の物体が火を噴いて飛んでくる──
「!?」
　ぶつかる！
　だが、反射神経の鈍にぶいバートは、硬直してぴくりとも動けない。
　ズドン。
　バートの真横に棒状の物体が墜落し、ジュースやハンバーガーが弾け飛ぶ。
「な……」
　ひしゃげて煙を上げている物体は、小型のミサイルのようだ。
「ごめんなさいっ！」
　腰を抜かしたバートが声の方を振り向くと、銀髪の女性が白衣をはためかせて駆けてくる。
「ハァ、ハァ……怪け我がは、ありませんか……!?」
　慌てて走ってきたのか、銀髪の女性は肩で息をしている。
　肌は雪のように白く、すらりとしていて、バートよりも少し年上に見える。
　そしてバートは、女性の顔を見て、ハッと息を呑のんだ。
　瞳ひとみは朱しゆ色。尖とがった耳に、鋭するどい牙きば。

―新血種族だ。
ミサイルを撃ち込まれた衝撃と新血種族の登場に、バートの心臓はどきどきが止まらない。
「あっ、服、どうしよ。すいません……」
女性に言われて少し我に返ったバートが服を見ると、飛び散った食材で無数の斑はん点てんができていた。
女性は、バートの傍そばにしゃがみ、服の汚れを申し訳なさそうに見る。
「うぅ、弁償します……」
バートは、新血種族ダンピールの女性に話しかけられるのは人生初で、しかも、シャンプーの香りを感じるほどの近さで見るのも当然初めてだった。基本的に、連合王国民と新血種族は互いに壁を作っているのだが、彼女のように壁がない例は極めて珍しい。
そんな彼女は、バートの相手もほどほどに、墜落した物体を拾い上げて嘆く。
「ああ、私のブルーエンジェルが……！　壊れた……」
白衣を着ているということは、研究者なのだろうか。肩を落として膝ひざをつく彼女に、バートは恐る恐る話しかける。
「……そ、それ、何の実験ですか？」
「え？」
興味を持たれたことが嬉しいのか、新血種族の女性は牙きばを見せてはにかむ。
「実験っていうか、趣味です。自作の小型衛星」

このとき、バートは知らなかった。
核戦争の危機が迫る中、種族を異にする彼女―カイエ・スカーレットと組み、月面着陸計画に参加することになるとは。

〈 The challenge goes on... 〉

牧野圭祐
Keisuke Makino

ライトノベル以外にもゲームやドラマなど執筆。直近作は『ペルソナ５』のシナリオチーム。前巻のここに書いた『ブリヌイ』、いまだに食べられず。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
月とライカと吸血姫　2

２０１７年４月28日　電子書籍版発行

者　牧野圭祐

人　立川義剛

人　野村敦司

集　田端聡司

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１７年４月23日　初版第１刷発行

©KEISUKE MAKINO 2017　ISBN978-4-09-451672-2

※巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。

※ご注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製など違法行為、もしくは第三者への譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。

GAGAGA BUNKO
APRIL 2017
ガ報
GAHO
No.120
ガガガ文庫
4月刊
絶賛発売中!!!
ガガガは既にフルスロットル!!
10周年目突入目前で、
期待の新作、ノベライズと勢揃い!
【第二部】一郎、魔神と友達になる!?の巻
定価:本体574円+税
俺の名は小林一郎。本物の主人公・火乃森龍牙の親友だ。
なのに、何故こんなことに……。
「いいなぁ。俺も龍牙たんとイチャイチャしたいなぁ」
「そんな魔神がいるか!」――
まさかの第二部、魔神と友達!?編
裏面にも情報満載!
著者コメント
えっ、一発ネタじゃなかったの? と思われたアナタ…… 出るんです。二巻が。本当に。きっと未練があったんでしょうね……。
［友人キャラは大変ですか？2］
著:伊達 康 イラスト:紅緒

〝痛〟青春に救いはあるか?
負け犬高校生の狭山明人と無気力少女の小野寺薫はある日、謎のボランティア活動にいそしむ少女・藤崎から「救済」を宣言され――?
クズ・電波・無気力、その他諸々がおくるダメ人間オールスター系青春ラブコメ!
定価:本体630円+税
著者コメント
一年半もの延期、ごめんなさい……。ダメ人間たちのダメな青春をよろしくお願いします。
［青春絶対つぶすマンな俺に救いはいらない。］
著:境田吉孝 イラスト:U35

鉄腕アトム、誕生前史の物語をノベライズ！
定価：本体574円＋税
ATOM THE BEGINNING
著者コメント
TVアニメ放送中、ヒーローズ連載中の永遠のヒーロー“鉄腕アトム”誕生までの物語を、TVアニメ「アトム ザ・ビギニング」のシリーズ構成を手掛ける藤咲淳一がオリジナルストーリーでノベライズ！
ナナケンの一同でワイワイと旅行させてみたいと思い、劇場版があったらこんな感じかしらと思って書きました！
［アトム ザ・ビギニング 僕オモウ故ニ僕アリ］
著：藤咲淳一 イラスト：カサハラテツロー、めばち
原作：『アトム ザ・ビギニング』（ヒーローズ刊）

スケベ男子に超能力少女の恋が覚醒？
定価：本体611円＋税
著者コメント
エッチな少年とサイキック少女というちょっと変わったラブコメです。応援よろしくお願いします。
ヤリたい盛りのスケベ男子高生が出逢った少女は、とある研究施設を夜な夜な無断外出することにスリルを覚えた“超能力者”だった。そんな彼女の力は強大で……。ボーイ・ミーツ・サイキックガールな青春ラブコメ！
［俺と彼女の恋を超能力が邪魔している。］
著：助供珠樹 イラスト：いつい

高度百キロメートル先の宙から君を想う。
定価：本体630円＋税
著者コメント
あの「ラスト」後の話です。季節は冬から春へ、レフとイリナ以外の登場人物も絡み、物語は大きく動きます。
レフはイリナの監視役を外れ、候補生に復帰。“人類史上初”をかけた宇宙飛行士選抜試験に臨む。しかし、その裏ではイリナの「廃棄処分」の話が持ち上がっており……。宙と青春のコスモノーツグラフィティ、第二幕。
［月とライカと吸血姫2］
著：牧野圭祐 イラスト：かれい

ヴィクターを狙う殺戮者たちの影。
定価：本体611円＋税
著者コメント
何たる戦慄！ 波瀾ますます重畳して、こんなに面白いライトノベルは天下にニつとはありません。たのしみにしてご愛読下さい！
ガマエの新たなる真相を求め、コッポという男のもとに訪れたクリニアとヴィクター。彼らの目の前に、ヴィクターを狙う奇妙な集団が現れる。時の流れが乱れる奇妙な島で、死闘が幕を開けるのだった。
［魔法医師の診療記録5］
著：手代木正太郎 イラスト：ニリツ

友人キャラは大変ですか？２発売記念！

友人キャラを書くのは大変ですか？

伊達康先生ぶっちゃけインタビュー!!!!!

各所で話題の名助演ラブコメ『友人キャラは大変ですか？』待望の2巻が登場！「友人キャラ」というポジションに焦点を当てた一風変わった本作はいかにして誕生したのか。そこのところ、伊達康先生にぶっちゃけてもらいました!!

Q:「友人キャラ」に焦点をあてようと思ったキッカケを教えてください。

A:キッカケは、毎週日曜日にやっている「某国民的アニメ」に登場する、○ツオの友人である○カジマくんだったように思います。彼はさほど登場頻度も多くなく、物語にも深くは絡まないキャラなのですが、彼には彼の人生があるんだろうなあ、と。もしかしたら裏では、○ツオの知らない複雑な事情を抱えているのかもしれない…… この世界を守るため、異形と戦ったりしてるのかもしれない…… そんなことを考えたのがキッカケでした。

Q:伊達先生にとって思い入れのある「友人キャラ」はいますか？

A:やっぱり前述の○カジマくんでしょうか。彼のスピンオフなどがあれば、個人的にとても嬉しいです。ちなみに「友人キャラ」というわけではないのですが、あの作品では飼い猫のタ○にも注目しています。もしかしたら、実は化け猫なのかもしれない…… この世界を守るため、人知れず悪い妖怪たちと戦っていたり……(略)。

イラスト:紅緒

Q:主人公キャラ、ヒロインキャラ、ボスキャラなどなど、いろいろなキャラが登場するのもこの作品の魅力の1つですが、特に気に入っているキャラはいますか？

A:月並みですが、小林一郎でしょうか。彼がもがき苦しむことで、この作品は成り立っていますので……。また、二巻で新たなボスキャラ魔神が登場するのですが、そちらも気に入っています。企画段階ではほぼ喋らないキャラでしたが、紆余曲折を経て物凄くオシャベリなキャラになってしまいました(笑)。とはいえ著者自身よりも、読者の皆様に気に入って頂けるのが一番なのですが。

Q:「友人キャラ」という題材だけでなく、既存のラブコメとの差別化が随所に見られる作品だと思います。執筆にあたって特に意識しているところはありますか？

A:主人公(？)の小林一郎を、あまり深刻に悩ませないことでしょうか。この作品は自分の著作の中でも、かなりコメディに振りきったシリーズなので、できるだけシリアス成分を控えようと心がけています。登場人物たちは必死で真面目でも、読者の視点からはバカバカしい喜劇に映っていれば著者として本望です。書くときは無理やりにでもテンションを上げようとしているのも、意識しているところです(笑)。

Q:1巻の"あのラスト"からの続き、ともなると難しさを感じた部分もあるかと思います。今後の展開をお話しできる範囲で教えてください。

A:基本的に勢いで突っ走っていこうかと(笑)。バトルストーリーの側面を持っていますが、作品としてはラブコメ主体でドタバタすることに比重を置きたいと思っています。その中で、個々のメインキャラクターたちにも焦点を当てていく展開にできればと…… そのためにどうするべきなのかは、これから考えようと思います。勢いで(笑)。

Q:最後にファンの皆さんへ一言お願い致します。

A:これからも皆様に楽しんで頂ける、そして腰が砕ける作品にしていければと思っています。まだ読んでいないという方も、これを機会に是非お手に取って頂ければ嬉しいです！『友人キャラは大変ですか？』、どうぞ宜しくお願いします！

伊達康先生、お忙しいところありがとうございました！ラブコメの新たな形、「友人キャラは大変ですか？」の今後に要注目です！

GAGAGA BUNKO & GAGAGA BOOKS LINE UP!

5月刊 5月18日ごろ発売!!

[妹さえいればいい。7] 著:平坂 読 イラスト:カントク
伊月と那由多の交際開始をきっかけに、千尋、春斗、京達の心境にも変化が。大人気青春群像劇、第7弾登場！

[妹さえいればいい。7<ドラマCD付き限定特装版>] 著:平坂 読 イラスト:カントク
伊月と那由多の交際開始をきっかけに、千尋、春斗、京たちにも変化が。大人気青春群像劇、特装版で登場！

[EXMOD2 黒ノ追撃者] 著:神野オキナ イラスト:こぞう
世衣と結ばれた真之斗はともに朝を迎える関係に。だが一方で、「黄昏」のクラタから暴走したEXMODを捕獲するという仕事も請け負っていた。

第11回優秀賞受賞 [ジャナ研の憂鬱な事件簿] ※受賞時のタイトル「翡翠と琥珀」 著:酒井田貫太郎 イラスト:白身魚
性格に少々難アリな啓介は、評判の美人である先輩・雪穂と出会うことによって次々と事件に巻き込まれることに…。

[漂海のレクキール] 著:秋目 人 イラスト:柴乃櫂人
陸地が水没した世界。国を追われた王女と元海軍人の男の二人。『新天地』発見のために未知なる航海を続ける、王道海洋戦記！

[やがて恋するヴィヴィ・レイン3] 著:犬村小六 イラスト:岩崎美奈子
ウルキオラ暴動から三年。神聖リヴァノヴァ帝国において、ルカたちは帝国最強の独立混成旅団として勇名を馳せていたが――

ガガガブックス [最下位職から最強まで成り上がる～地道な努力はチートでした～] 著:上谷 圭 イラスト:桑島黎音
――包囲殲滅陣。軍事史上最高の陣形を編み出した天才軍師・ルーク。しかし、その始まりはただの"最下位職"に過ぎなかった。

6月刊 6月20日ごろ発売!!

[キモイマン 2]――著:中沢 健 イラスト:荻pote

[弱キャラ友崎くん Lv.4]――著:屋久ユウキ イラスト:フライ

第11回優秀賞受賞 [スクールジャック、ガンスモーク] ※受賞時のタイトル「その過去にイビカイエー、この結末にマザーファッカー。」――著:坂下 谺 イラスト:巖本英利

[物理的に孤立している俺の高校生活2]――著:森田季節 イラスト:Mika Pikazo

[勇者と勇者と勇者と勇者5]――著:川岸殴魚 イラスト:すまき俊悟

ガガガブックス [自由(邪)神官、異世界でニワカに布教する(仮)]――著:中文字 イラスト:Tea

発売タイトル及び刊行予定は変更になることがあります。

イラスト:カントク

待望のドラマCD第2弾、登場!!

京からの依頼で、子ども向けのオリジナルストーリーをつくることになった伊月たち。それぞれ個性豊かな童話が出そろうが……？ 平坂 読書き下ろし脚本「妹のためのメルヒェン」、どうぞお楽しみに！

※イラストは制作中のものです。

ネット各所で話題！

累計1,000万PV突破の王道ファンタジーがついに書籍化！

イラスト:桑島黎音

ガガガ文庫10周年企画、ガガガブックスがついに本格始動！
第1弾は「小説家になろう」発の王道ファンタジー！
"最下位職"から"天才軍師"へと上り詰めていく少年の挫折と栄光の物語！

※「小説家になろう」は株式会社ヒナプロジェクトの登録商標です。

ここガ知りたい! ガガガ特捜部

「○○女子」、「○○男子」、流行語になったり、作品のタイトルになったりと、最近よく見かける言葉になりました。その「○○」に自分の好きなものが入っていると、なんだか世間で認められているようで嬉しくなったり……。というわけで今回の質問はこちら。

質問 野球が好きなので、「カープ女子」が流行ったとき、とても嬉しかったです。みなさんは次に流行ってほしいと思う「○○女子」「○○男子」ってありますか?（千葉県・かみねる・22歳）

●ブームよ、こい!……ハマカズシ先生☞ガガガ女子ブームが来て、ちやほやされることを心から期待しています

森田季節先生☞ラノベ女子。マジで言ってます。マジでお願いします!

●全男子待望の○○……赤城大空先生☞筆下ろし女子と下ろされ男子です。

助供珠樹先生☞ハレンチ女子が雑誌の特集で組まれたら確実に買います。

砂義出雲先生☞パツパツTシャツ女子です。

●流行を先取りすぎ?……犬村小六先生☞「幕末女子」が流行った以上「台南空女子」は100年後くらいに必ず来ます。「サカニシ（坂井×西澤）よね～」とか「やっぱサカササでしょ～（坂井×笹井）」とか会話します。聖地巡礼でラバウルへ出かけます。

今慈ムジナ先生☞球体関節女子。

ますもとたくや先生☞渓流のマス釣りにこだわる「トラウト（鱒）女子」。

質問募集! 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。

その他の先生方からの回答は、編集部ログ(GAGAGAWIRE)で見られます。

疑問質問なんでもござれ! ガガガくん通信!!!!

GAGAGA

Twitterやハガキでボクへの質問を大募集ダヨ!

Q:ガガガくん以外の別のマスコットとかいないんですか? 最近ガガガくんに飽きてきました。いまいちキャラも弱いし、もうちょっとやりようがある気がします。（ぴーぴーQ・21歳）

A:ガガガーン（泣）!!! なんでそんな心ないことが言えるのか、ボクは不思議でならないヨ! 終身名誉ガガガ文庫マスコットはボク一人だけなんだヨ!!…… というかそこまで言うなら責任を持ってボクを最高のマスコットにプロデュースしてほしいよネ!! だから、まずキミには『弱キャラ友崎くん』を読んで勉強してほしいヨ! 生まれついての強キャラ・日南さんが、冴えない主人公・友崎くんをプロデュースして、人生攻略を指南するストーリーなんだヨ!! 優しく(?)、厳しい日南さんの指導は要チェックだヨ!!

著:屋久ユウキ
イラスト:フライ

第11回小学館ライトノベル大賞[ガガガ部門]

最終結果!

ガガガ大賞	『平浦ファミリズム』遍 柳一
ガガガ賞	『ひきこもり姫を歌わせたいっ!』水坂不適合
優秀賞	『その過去にイピカイエー、この結末にマザーファッカー。』冴 『翡翠と琥珀』酒井田寛太郎
審査員特別賞	『世界の終わりに問う賛歌』白樺みひゃえる

ゲスト審査員広江礼威先生からの講評

『平浦ファミリズム』は、どことなく少女漫画っぽい繊細な手触り。多様性を尊重し個々の視点をとても大事にしているのが見て取れます。人間関係を厭う主人公が登場人物たちを救い、自らもまた彼らに助けられる展開は好印象でした。ラストに母親の述懐を持ってきたのも綺麗。『その過去にイピカイエー、この結末にマザーファッカー。』は、わかりやすいテロリスト対決ものでAIをあえて情緒的に書いているのが面白い。しかし、第二次大戦で日本が勝利した世界のディティールはもっと凝らないと説得力に欠けるかも。さらに、プロットの組み立てがまんま『ダイ・ハード』なのと、敵の頭の悪さが作為的なのが若干興を削いでしまうところも。また、欲を言えば二人のヒロインがあまり干渉し合わないので、そこに生まれる化学変化も見たかったです。『ひきこもり姫を歌わせたいっ!』は、文章がスムーズで軽妙、大変読みやすかったです。クライマックスのライブシーンはとても臨場感に溢れていて漲ります。折角音楽ベースの話なので、有名曲のナンバーを小道具として使ってみたらどうか? と感じながらも、全体としては、起承転結がとてもスッキリしていて創作のお手本のようです。ですが、それが故にオチは少し物足りない部分もありました。主人公は才能がなくてもいいんじゃないかとも思いますが、お客さんのために目配せするかどうかは難しいところ。『翡翠と琥珀』は、落ち着きのある作風は好感がもてます。推理は小粒ながら楽しく読めました。全体的にキャラが薄く、主人公が嗜んでいる格闘技と鉱石が推理から乖離してるのが気になります。キャラの特性なので、うまく推理に噛ませられればもう少しキャラの説明ができるんじゃないかと。ラストの余韻はもう少しあるといいかも。『世界の終わりに問う賛歌』は、痛みがパワーを生む、その痛みを引き出すための力を必要とされるという着想はとても面白いです。試行錯誤から成果に行き着くまでのプロセスが丹念で良いのですが、反面、次のアクションに入るまでが少し退屈かも。若干設定が煩雑で、その説明に振り回されてる感はありますが、それを補って余りあるコンセプトの愉快さに惹かれました。ただ、お客さんは全体の雰囲気で把握するので、もっと削り込んでも良かったと思います。クライマックスの盛り上がりは好きでした。毒とウィット、悲しみが共存する楽しい作品です。

ガガガ文庫公式HP、GAGAGAWIREにて全文掲載!

第11回小学館ライトノベル大賞1328本の中から受賞作の先陣を切る作品が登場!

優秀賞受賞作『ジャナ研の憂鬱な事件簿』 酒井田寛太郎先生からのメッセージ

はじめまして、酒井田と申します。今後、一人でも多くの方に、一つでも多くの物語をお届けできればと思っています。

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中! このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

コミカライズ されど罪人は竜と踊る

4/29より隔週連載開始!!!

「サンデーうぇぶり」にて実力派の俊英、三途河ワタル先生による究極コミカライズ! 2017年秋TVアニメ化を前に、コミックスでも「され竜」総復習だ!

原作:浅井ラボ　キャラクター原案:宮城／ざいん
作画:三途河ワタル

コミカライズ GJ部

コミックス第2巻、4/19発売!

「サンデーGX」で好評連載中の『GJ部@こみっく』! 原作イラストレーター・あるや先生完全コミカライズの最新巻が登場! 新入部員のタマが登場する今巻も癒やし満載!

原作:新木 伸　作画:あるや

TVアニメ アトム ザ・ビギニング

毎週土曜23:00 NHK総合テレビにて好評放送中!

シリーズ構成・藤咲淳一自らのノベライズも発売中! "鉄腕アトム"に至るエピソードゼロの物語。その伝説を目撃せよ!

※放送時間は変更になる場合があります。

CAST
天馬 午太郎(CV:中村悠一) お茶の水 博志(CV:寺島拓篤)
A106(CV:井上雄貴) 堤 茂理也(CV:櫻井孝宏)
堤 茂斗子(CV:小松未可子) お茶の水 蘭(CV:佐倉綾音)
伴 俊作(CV:河西健吾) 伴 健作(CV:飛田展男)

©手塚プロダクション・ゆうきまさみ・カサハラテツロー・HERO'S／アトム ザ・ビギニング製作委員会

コミカライズ やはり俺の青春ラブコメはまちがっている&妹さえいればいい。

5/19にガガガ文庫2作品のコミカライズ同時発売!

「サンデーGX」に大好評連載中のコミカライズ最新巻が同時発売! 2大「@comic」でガガガ文庫創刊月5月はさらに盛り上がる!!

書店員さんとガガガくん

GAGAGA

四月は出会いの季節だよネ! 今年もみんなにはたくさんのガガガ文庫と出会って欲しいナ! ボクもガガガんばって紹介するヨ!

ガガガくん

今月の書店員さん

本の王国 浜松西店 古山祐樹さん

住所:静岡県浜松市中区葵西2-27-10
電話番号:053-430-6233
営業時間:10:00～20:00
定休日:年中無休
URL:https://twitter.com/book_hama

いつ来店されても、新しい発見、出会いがあるように工夫を凝らして展開しています。ぜひご来店ください。

古山さんのオススメ本

『七星のスバル』

今、一番読んで欲しい作品です。現実とゲームが交錯しながら進み胸が締めつけられるような物語です!

◀うっひゃ～! 棚一面ガガガ一色だネ! 手作りPOPから伝わってくる情熱には、お客さんも思わず惹かれちゃうヨ!

編集後記

- アカデミー賞授賞式を観るためにWOWOWに契約、放送が終わったら契約解除を繰り返す…… なんか申し訳ない気がします。(野)
- 春になったのはいいが突如襲い来る眠気に抗えない(☆)ｽﾔｧ
- 会社の仮眠室で寝るときの「さぁ寝るぞ!」感は、自宅で寝るときの二倍。(濱)
- 背中で語る父になりたい。(岩)
- 数年ぶりに親戚に会ったらチビたちが増えていました。(飯)
- 家が汚い。でも「汚い」と認識できてるので、まだ大丈夫だと思われる。(小)
- 会社仮眠室の圧倒的ホーム感。アメニティ持ち込むまで秒読み。(田)ｸﾞｰｽｶ

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛